三重県埋蔵文化財報告書　187

雲出川改修香良洲地区事業に伴う

香良洲西山遺跡発掘調査報告

一志郡香良洲町

1999・3

三重県埋蔵文化財センター

明治時代の矢野村（現香良洲町）の字切図（『矢野村地図附録第一』　1884(明治17)年　香良洲町所蔵）

序

高見山地に源を発する一級河川雲出川は、肥沃な一志の平野を潤し伊勢湾に注いでいます。その平野では古来より人々の生活が連綿と営まれ、三雲町中ノ庄遺跡や津市雲出島貫遺跡など数多くの遺跡が今日に残されています。中近世には用水の開削のため相次いで井堰が造られ、一部は今なお役立っています。また、昭和初期頃までは香良洲浦と上流の白山・美杉方面との水運もさかんで、流域の豊かな産物を運んでいました。

さて、今回報告する香良洲西山遺跡は雲出川改修香良洲地区事業に伴って調査されたものです。遺跡は、雲出川左岸の沖積地に立地する弥生時代から室町時代の複合遺跡です。大きな河川の近くに住まう人々は水の恵みをたくみに利用し、またあるときは水の脅威とたたかい、生活をしてきたことでしょう。

調査を終えたところには内に住む人々の生活を守るべく新しい堤防が築かれつつあります。そのいわば代償として発掘された遺跡の記録を整理し報告書として世に公開していくことが、私どもに課せられた重大な責務であると考えております。本報告書が地域の歴史を解明する一助となることを念願するところであります。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただきました建設省中部地方建設局、同三重工事事務所、香良洲町、香良洲町教育委員会、社団法人中部建設協会、及び地元の皆様に心からお礼申し上げるとともに、今後とも県民の皆様の文化財保護への一層の御理解と御協力をお願い申し上げる次第です。

平成11年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長　大井與生

例　言

1　本書は、平成９・10年度に三重県教育委員会が建設省中部地方建設局から委託を受けて実施した、雲出川改修香良洲地区埋蔵文化財発掘調査にかかる香良洲西山遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は当初「西山遺跡」（香良洲町遺跡ＮＯ．２）として登録されていたが、同名もしくは類似の遺跡名が県内に存在するため、将来の混乱を避けるため、本調査に先だって「香良洲」を冠し、「香良洲西山遺跡」と呼称することとした。

3　発掘調査の体制は、下記により実施した。

平成９(1997)年度　現地発掘調査
調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター
調査第二課
主幹兼課長　山田　猛
主査兼係長　本堂　弘之
主事　伊藤　裕之
齋藤　直樹
（香良洲町教育委員会より派遣）
室内整理員　木下　淑子
倉田由起子
調査協力　香良洲町教育委員会
現場作業　社団法人中部建設協会

平成１０(1998)年度　立会調査・報告書作成
調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター
調査第二課
主幹兼課長　吉水　康夫
主査兼係長　本堂　弘之
主事　齋藤　直樹
（香良洲町教育委員会より派遣）
室内整理員　木下　淑子
倉田由起子
調査協力　香良洲町教育委員会

4　調査期間中には下記の方に専門的なご指導とご助言を賜った。また青木氏には歴史地理学の観点から、附編の「香良洲西山遺跡付近の地形環境」の玉稿をいただいた。
　またパリノ・サーヴェイ株式会社に、Ｂ地区のシルト層に含まれる珪藻の分析を委託し、その結果も附編として掲載した。

青木哲哉(立命館大学非常勤講師)　磯島義一(元県農業技術センター職員)
後藤　溥(元香良洲町史編集委員)　新田　洋(斎宮歴史博物館)

5　この調査で出土した遺物及び発掘調査の記録は、三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。

6　本書作成にかかる整理及び執筆は、本堂弘之の協力を得て齋藤直樹が行った。

7　本書で報告した遺跡の位置は、国土座標第Ⅵ系に属している。挿図の方位は座標北で示している。なお、磁北は座標北のＮ6°20’Ｗ(平成４年)である。

8　挿図と写真図版の遺物番号は遺物実測図の番号と対応している。なお、写真図版は縮尺不同である。

9　本書での用語は以下の通り統一した。
つき・・・・「坏」・「杯」があるが、「杯」を用いた。
わん・・・・「椀」・「碗」・「埦」があるが「椀」を用いた。

10　本書で使用した遺構の名称・番号は調査時点の呼称を踏襲し、それに旧地形の名称を加えたものである。遺構一覧表を作成しておいた。また、遺構表示略記号は下記の通りである。
ＳＤ：溝　ＳＥ：井戸　ＳＫ：土坑　Pit：ピット、柱穴

11　当遺跡の調査の成果の一部は、既に平成９年度に「香良洲西山遺跡概報」及び調査ニュースNo.１～３などに報告されているが、この報告書をもって正式報告としたい。

12　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　　言 …… 1
　1 調査に至る経緯 …… 1
　2 調査の方法及び経過 …… 1
　3 小地区の設定について …… 3
　4 記録・整理方法について …… 3
　5 調査日誌(抄) …… 4
　6 出水対策要領(抄) …… 5

Ⅱ　位置と環境 …… 7
　1 地理的環境について …… 7
　2 歴史的環境について …… 7
　3 河川交通と海上交通の接点「矢野」 …… 10

Ⅲ　調査の成果（遺構） …… 11
　1 層序について …… 11
　　(1)はじめに …… 11
　　(2)Ａ・Ｃ地区の基本層序 …… 11
　　(3)Ｂ地区の基本層序 …… 11
　　(4)小結 …… 11
　2 主な遺構について …… 11
　　(1)はじめに …… 11
　　(2)弥生・古墳時代の遺構 …… 14
　　(3)鎌倉・室町時代の遺構 …… 15
　　(4)江戸時代以降の遺構 …… 15
　　(5)時代不明の遺構 …… 16
　　(6)自然地形 …… 18
　　(7)小結 …… 18

Ⅳ　調査の成果（遺物） …… 19
　1 はじめに …… 19
　2 弥生時代後期の遺物 …… 19
　3 古墳時代から奈良時代の遺物 …… 19
　4 平安時代から室町時代の遺物 …… 19
　5 江戸時代以降の遺物 …… 22
　6 石製品・土製品等の遺物 …… 22
　7 小結 …… 22

Ⅴ　結　語 …… 25
　1 調査のまとめ …… 25
　2 Ａ２地区上層の溝について …… 25
　3 矢野村(現香良洲町)の字名と塩田について …… 28

Ⅵ　附編 …… 29
　1　香良洲西山遺跡の地形発達と堆積環境の変遷について（パリノサーヴェィ） …… 29
　　1 はじめに …… 29
　　2 試料 …… 29
　　3 分析方法 …… 29
　　4 結果 …… 29
　　5 考察 …… 32
　　(1)堆積環境の変遷 …… 32
　　(2)三角州の発達と環境変遷 …… 32

　2　香良洲西山遺跡付近の地形環境(青木哲哉) …… 35
　　1はじめに …… 35
　　2遺跡付近の地形について …… 35
　　3遺跡周辺と発掘調査地区の堆積物 …… 37
　　4遺跡付近の地形環境 …… 42
　　5おわりに …… 42

挿　図　目　次

第１図　分布調査結果・試掘坑位置図 …… 2
第２図　試掘調査結果 …… 2
第３図　小地区設定図 …… 2
第４図　調査区周辺断面模式図 …… 3
第５図　遺跡位置図 …… 8
第６図　遺跡地形図 …… 9
第７図　Ａ地区土層図 …… 12
第８図　Ｂ地区土層図 …… 13
第９図　Ｃ地区土層図 …… 14
第10図　Ａ地区遺構平面図 …… 16
第11図　Ｂ２地区上層遺構平面図 …… 17
第12図　Ｂ地区下層遺構平面図 …… 17
第13図　ＳＥ20実測図 …… 17
第14図　Ｃ地区遺構平面図 …… 18
第15図　遺物実測図（１） …… 20
第16図　遺物実測図（２） …… 21
第17図　Ａ２地区上層遺構平面図 …… 26
第18図　矢野村字切図（復元） …… 27
第19図　Ｂ１トレンチの断面図及び試料採取位置 … 30
第20図　Ｂ２トレンチの断面図及び試料採取位置 … 30
第21図　主要珪藻化石群集 …… 31
第22図　香良洲西山遺跡付近の地形分類図…… 36
第23図　香良洲西山遺跡付近のボーリング資料…… 38
第24図　香良洲西山遺跡における堆積物…… 39
第25図　香良洲西山遺跡付近における模式的な地形環境… 41

表　目　次

第１表　調査に至る主な経緯 …… 1
第２表　調査中の主な経過 …… 1
第３表　出水対策要領　別表－１ …… 5
第４表　出水対策要領　別表－２ …… 5
第５表　出水対策要領　別表－３ …… 5
第６表　出水対策要領　別表－４ …… 6
第７表　出水対策要領　巡視記録簿 …… 6
第８表　遺構一覧表 …… 15
第９表　遺物観察表(1) …… 23
第10表　遺物観察表(2) …… 24
第11表　矢野村字名一覧 …… 26
第12表　珪藻分析結果表(1) …… 33
第13表　珪藻分析結果表(2) …… 34

写真図版目次

巻頭カラー　明治時代の矢野村(現香良洲町)の字切図
写真図版１　調査前遺跡遠景
写真図版２　調査前遺跡遠景／Ａ１地区全景
写真図版３　Ａ２地区全景／Ｂ１地区全景
写真図版４　Ｂ２地区上層遺構面全景／Ｃ地区全景
写真図版５　ＳＫ11／ＳＤ12／Ａ２地区横断土層
写真図版６　Ｂ１地区南壁土層／Ｂ２地区下層全景／ＳＫ30
写真図版７　旧流路／旧沼地／旧流路内遺物出土状況
写真図版８　出土遺物（１）
写真図版９　出土遺物（２）／出土遺物（３）
写真図版10　出土遺物（４）／出土遺物（５）
写真図版11　珪藻化石（１）
写真図版12　珪藻化石（２）

Ⅰ　前　言

1　調査に至る経緯

雲出川改修香良洲地区事業にかかる埋蔵文化財の保護については、平成８年３月に建設省中部地方建設局三重工事事務所（以下建設省）から事業地内の埋蔵文化財の有無について、当時の三重県教育委員会文化芸術課（以下県教委、現県教委生涯学習課文化財保護室）に照会があった。

堤防改修という緊急性の高い事業の性格に加え、翌年度事業開始の可能性が高かったため、直ちに、三重県埋蔵文化財センター（以下センター）が分布調査を実施し、事業地内に周知の遺跡である「西山遺跡」（町遺跡NO.２）があること、常夜燈・道標が存在することを回答した。

平成８年４月には、この分布調査結果を受け、県教委と建設省が埋蔵文化財等の取り扱いについて協議を行った。その結果、現状保存の困難な部分について、８年度に試掘調査の実施をすること、道標及び常夜燈については移設時にセンター職員が立ち合うことを決定した。

用地買収の関係で試掘調査は２回に分けて行った。２回の試掘調査の結果をもとに協議し、本調査面積4,500㎡、調査員２名体制で、平成９年度は現地調査、平成10年度は報告書作成という２カ年事業とすることとなった。

発掘調査は、建設省から三重県が委託を受け、センターが調査を担当した。

調査に当たっては、県職員１名の他、「県教育委員会・市町村教育委員会人事交流要項」に基づき、香良洲町教育委員会から１名の派遣職員を得た。

また、現地作業は調査の円滑化を期して、建設省が社団法人中部建設協会（以下協会）に委託した。

そして、調査事業の実施にあたっては、建設省・三重県・協会の三者で「協定書」を締結し、事業を実施した。（第１表参照）

年度	年月日	概要	備考(発番等)
H7	1996/3/22	計画地内の埋蔵文化財の有無確認依頼	建部三第264号
〃	1996/3/27	文化芸術課からセンターへの計画地内分布調査の依頼	教文489号
〃	1996/3/28	センター分布調査の実施	
〃	1996/3/29	センター分布調査結果の回答	教埋第155号
H8	1996/4/22	二者(センター・建設省)協議	
〃	1996/6/4	三者(センター・建設省・協会)協議：調査体制と方法(第１回)	
〃	1996/6/13	三者(センター・建設省・協会)協議：調査体制と方法(第２回)	
〃	1996/6/10	発掘調査の通知(98条の２)について	
〃	1996/7/17	第１回埋蔵文化財試掘調査依頼書	建部三第633号
〃	1996/7/29～8/2	第１回試掘調査の実施	
〃	1996/8/8	第１回試掘調査結果の報告	教埋第458号
〃	1996/8/21	四者(センター・建設省・協会・香良洲町)協議「今後の調査実施について」	
〃	1997/1/6	第２回埋蔵文化財試掘調査依頼書	建部三第2号
〃	1997/2/5～2/7	第２回試掘調査の実施	
〃	1997/2/14	第２回試掘調査結果の報告	教埋第93号
〃	1997/2/21	三者(センター・建設省・協会)協議「調査の工程・工法等の協定・河川条件等」	
〃	1997/2/25	H９香良洲調査計画書の提出について	
〃	1997/3/13	町有地の借用について(整理所用地)	教埋第159号
〃	1997/3/21	町有地の貸付許可について(整理所用地)	香総第74号

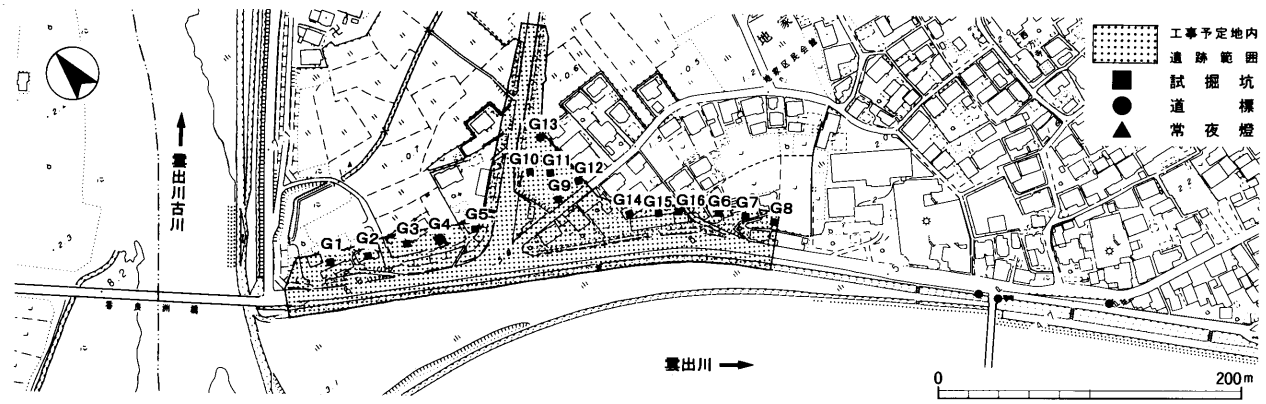
第１表　調査に至る主な経緯

2　調査方法及び経過

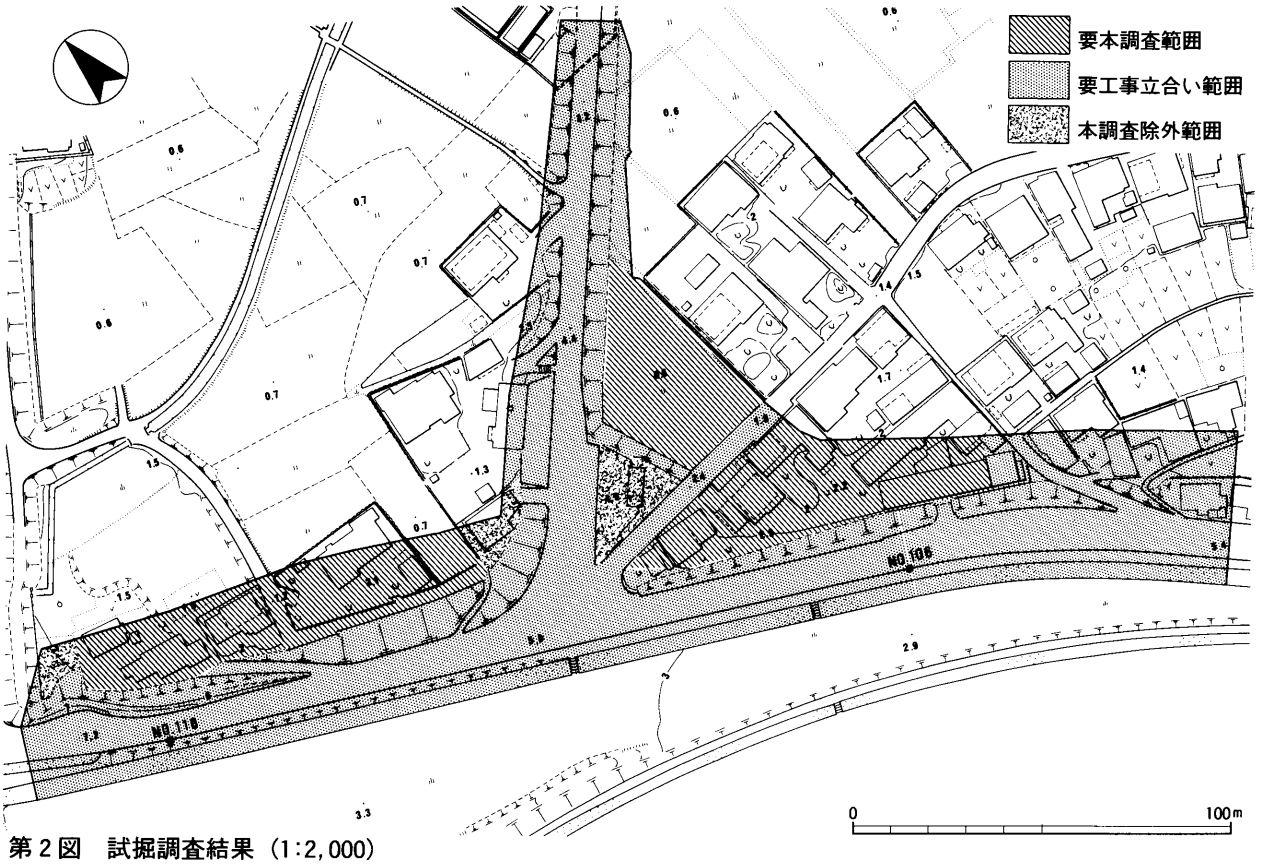
調査区は便宜上、Ａ～Ｃの３地区に分け、Ａ(Ａ１→Ａ２)→Ｃ→Ｂ(Ｂ１→Ｂ２)地区の順に調査を

年度	年月日	概要	備考(発番等)
H9	1997/4/1	三者（建設省・三重県・協会）「協定書」の締結	
〃	1997/4/1	建設省と三重県の委託契約の締結	
〃	1997/4/9	三者(センター・建設省・協会)協議「調査の具体的な工程と安全対策」	
〃	1997/4/11	発掘調査作業要領の作成・送付	
〃	1997/5/22～7/10	Ａ１地区の本調査	
〃	1997/5/15	三者(センター・建設省・協会)協議「『出水対策要領』の作成」	
〃	1997/6/6	Ａ１地区の引き渡し	
〃	1997/6/10～7/10	Ａ２地区の本調査（A1＋A2で1,076㎡）	
〃	1997/6/23	文化財保護法関係　９８条の２	教文第1231号
〃	1997/7/10	Ａ２地区の引き渡し	
〃	1997/7/22～10/6	Ｃ地区の本調査(976㎡)	
〃	1997/11/11～1998/1/23	Ｂ地区の本調査（Ｂ１＋Ｂ２で693㎡）	
〃	1997/11/11～12/11	Ｂ１地区の本調査	
〃	1997/12/1～1998/1/23	Ｂ２地区の本調査	
〃	1998/1/29	B(B1・B2)地区の引き渡し『出水対策要領』の解除	
〃	1998/3/17	埋蔵文化財の発見・認定について	教文第6-98号

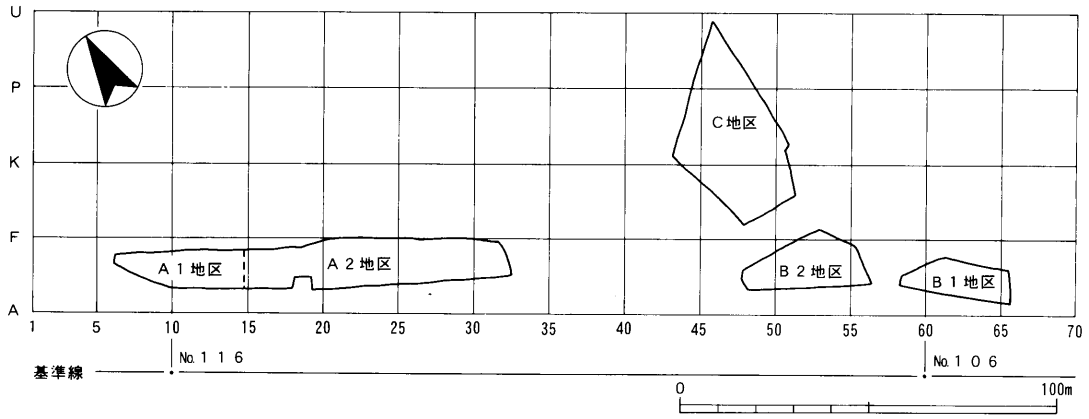
第２表　調査中の主な経過



第１図　分布調査結果・試掘坑位置図（1:5,000）



第２図　試掘調査結果（1:2,000）



第３図　小地区設定図（1:2,000）

実施した。(第２・３図参照)

調査は、まず調査区の宅地跡の盛土の除去から始めねばならず、しかも、排土処理の関係もあって準備段階での時間的ロスが大きかった。重機による表土掘削までの期間は天候の影響もあり予想以上にかかることとなった。

遺構面直上の包含層掘削から人力で掘削及び遺構検出を行った。しかし、予想以上に地下水位が高く、潮の干満の影響もあって、調査を中断せざるを得ないときもあった。

地下水位への影響は干満だけでなく、基盤層が砂質土のため、水田耕作や雨水の影響はかなり深刻であった。

特に雨水は、Ａ地区においては、堤防法面や周辺の水がすべて調査区に流れ込み、調査区法面をシートで保護したものの、かなり影響を受けた。

Ｃ地区においては、台風と秋の長雨の影響で、地下水位が下がるまで１ケ月近くも待たなければならなかった。

Ｂ地区は冬場の調査となった。青木哲哉氏に現地指導をしていただき、また、次年度実施予定で珪藻分析のための土壌サンプリングを行った。

なおＢ地区は、家屋の残骸が埋め込まれ、Ｂ１地区においては一部下層遺構面まで破壊されていた。

3　小地区の設定について

小地区の設定はＡ・Ｂ地区に平行する堤防上の工事用杭のNO.116とNO.106の２点を基準とした。

その２点を結んだ線を調査区設定の東西方向の基準線とし、基準線から北へ16m離れた平行線をＡラインとし、以下北に向かって４ｍピッチでＢ、Ｃ、Ｄ・・・Ｚラインまで設定した。(第３図参照)

なお、それ以降北にのびることも予想されたため、工事時立合調査で必要になれば、小文字で対応することとした。

基準線と直行する南北方向のラインの設定は、No.116で直行するラインを１０ラインとし、それに平行して４ｍピッチで南北方向のラインを決めた。

小地区の呼称は、南西角のラインの交点を採用した。たとえばＡラインと１０ラインの交点を南西角に持つ地区名はＡ１０という具合である。

なお、小地区設定及び国土座標への変換の測量及び計算は、中部建設協会に委託し、再計算及び図化作業はセンターが行った。

なお、堤防に平行したＡ・Ｂ地区は堤防保護のため２Ｈラインからさらに控えをとったこと、盛土を掘削することになるため調査区法面の勾配を緩くとったことから、トレンチ状となった。(第４図参照)

4　記録・整理方法について

香良洲西山遺跡の調査記録は、遺構全体に関しては、各調査区ごとに1/100の平板測量を実施した。

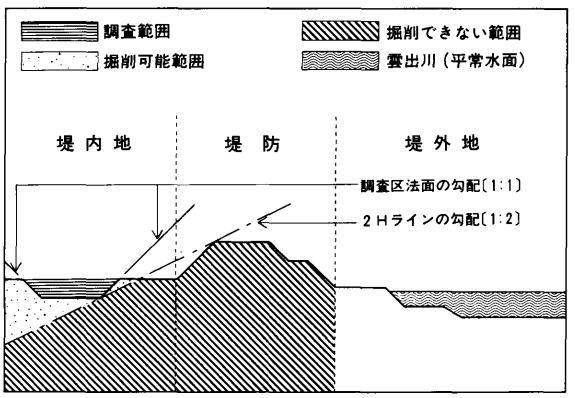
各遺構およびその断面に関しては適宜1/10実測図を作成した。

調査区の土層断面図は1/20実測図を作成した。Ａ地区は北壁土層(東西方向)とＡ２地区24ラインの横断土層(南北方向)、Ｂ地区は南壁土層(東西方向)とＢ１地区東壁土層(南北方向)、Ｃ地区は47ライン土層(南北方向)とＬライン土層(東西方向)を作成した。

写真は、遺構写真にはスライド・モノクロ(35mm、6×9)、遺物写真には6×9のモノクロを用いた。

遺物に関しては、実測した各遺物にはそれぞれ整理番号を与えている。実測図１枚目の１番目の遺物の場合「001－01」となる。当報告書の遺物番号との関係は第９・10表に記載した。

遺構実測図・遺物実測図・写真及び出土遺物等は平成10年度の三重県埋蔵文化財センターの整理方法に従い台帳を作成した。



第４図　調査区周辺断面模式図

5　調査日誌(抄)

A１地区

1997(平成９)年

4月21日　A地区準備工・調査区の伐開開始。

5月２日　A地区の２Hラインおよび小地区設定の基準杭設置。排土搬出路着工。

5月13日　A１地区西部から重機による表土掘削。

5月22日　作業員による包含層掘削開始。水防対策のため排土を利用して土嚢3,000袋を作る。

5月29日　地下水位が高いため6月1日まで遺構掘削中止。A１北壁土層実測。

6月３日　A１地区全景写真撮影。平板実測。

6月６日　A１地区建設省への引渡し。

A２地区

6月10日　A２地区東部から重機による表土掘削。

6月18日　作業員による包含層掘削開始。午後、台風７号対策。6月23日まで冠水で作業中止。

6月24日　砂暗渠の解明のためE24にトレンチ掘削。

6月26日　台風８号対策。週末の現場作業中止。

7月４日　A２地区全景写真撮影。見学者多し。

7月10日　北壁土層実測。午後建設省へ引き渡し。

C地区

7月14日　C地区準備工・排水作業。

7月15日　C地区重機による表土掘削開始。

7月22日　作業員による包含層（床土）掘削開始。

7月24日　包含層（床土）掘削完了。台風９号対策。8月3日まで、冠水のため作業中止。

8月４日　強制排水。現場再開。SK30～32掘削。SK30からは中世前期の遺物が一括で出土。

8月５日　冠水。8月7日まで現場作業中止。

8月８日　現場再開。SK31･SK32より湧水。

8月25日　調査区南西部から47ライントレンチ掘削。

8月26日　47ライントレンチ土層実測後崩落。コンパネで補強。北部で上層の耕作溝検出。

9月３日　Lライン土層実測。下層包含層掘削開始。調査区南東部の旧河道より土師器杯出土。

9月12日　C地区全景写真撮影。

9月16日　9月13日からの雨のため、調査区水没。地下水位が下がるまで作業中止。あまりの長期間の水没で、コケが生える。

9月29日　調査区南部平板実測。

9月30日　調査区北部平板実測。全体のレベル測量。

10月６日　SK30拡張。旧流路解明のため、トレンチ３本とグリッド１つを掘削。調査完了。

B１地区

10月20日　B２地区宅地跡の基礎の除去開始。

10月28日　B地区の２Hラインおよび小地区設定の基準杭設置。

11月４日　B１地区重機による表土掘削開始。

11月５日　攪乱が表土直下約２mまで達する。

11月11日　作業員による包含層掘削。SE20検出。

11月12日　SK21・22を検出。SK21より湧水。

11月18日　B１地区平板実測。

11月19日　B１地区全景写真撮影。撮影後、だめ押しのB１トレンチ掘削開始。土師器鍋等出土。

11月21日　B１土壌サンプリング実施。

B２地区

12月１日　B２地区重機による表土掘削開始。

12月２日　上層検出面確認。深掘りで表土直下約４mでも灰白色砂確認できず。激しい湧水。

12月４日　作業員による上層包含層掘削及び遺構検出。SK25･26掘削完了。攪乱が多い。

12月５日　B２地区上層全景写真撮影。略測後、下層包含層掘削開始。

12月12日　下層包含層掘削。B１地区土層実測。

12月15日　湧水のためこれ以上の掘削を断念。

12月16日　B２地区下層写真撮影。平板実測。

12月17日　B２南壁土層実測。だめ押しのB２トレンチ掘削。やはり湧水激しい。

12月18日　B２トレンチ掘削後の全景写真撮影。

12月22日　B２土壌サンプリング実施。

1998(平成10)年

1月６日　B２東部拡張部分の重機による表土掘削。

1月19日　発掘調査報告展開催（１月26日まで）

1月20日　拡張部分の作業員による包含層掘削。攪乱のため上層遺構面なし。下層まで掘削。

1月21日　拡張部分青灰色シルト層まで掘削完了。

1月22日　B２東部拡張後全景写真撮影後、略測。本年度のすべての調査を完了。

1月29日　B地区を建設省へ引き渡す。出水対策要領に基づく運用を解除する。

6　出水対策要領（抄）

雲出川香良洲地区埋蔵文化財発掘調査業務

出　水　対　策　要　領

平成９年５月

建設省中部地方建設局

三　　重　　県

中　部　建　設　協　会

雲出川香良洲地区埋蔵文化財発掘調査出水対策要領

第１条 目的

本要領は、雲出川香良洲地区埋蔵文化財発掘調査箇所のＡ・Ｂ地区における、豪雨時、出水時における対策を目的とする。

第２条 事前対策

１．緊急用資材として土嚢３，０００袋程度を用意する。

２．豪雨時の掘削法面法崩れ防止対策として、法面にシート掛けをする。

３．豪雨時の掘削法面雨裂防止対策として、堤防法面からの雨水を掘削範囲内に入れないものとする。

第３条 豪雨、出水対策

第５条に基づく業務を行う。

第４条 態勢の基準

１．注意　大雨警報の発令が予想される時
　　雲出橋で警戒水位を越えると予想される時

２．警戒　大雨警報の発令がされた時
　　雲出橋で警戒水位を越えた時

３．非常　掘削法面、堤防法面に異常が発見された時

第５条 態勢時の業務

１．注意　情報連絡　別表－１により行う。

２．警戒　掘削作業の中止　現場内パトロール
　　別表－２により行う。

３．非常　緊急連絡　別表－３により行う。

第６条 態勢時の要員

別表－４の要員を確保するものとする。

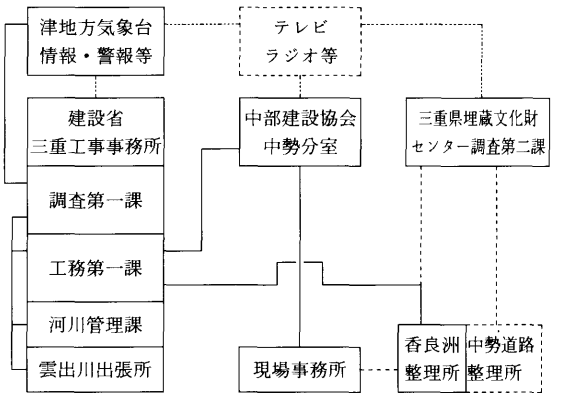
第７条 その他

本要領の運用期間は、Ａ・Ｂ地区の掘削開始から引渡し完了までとする。

参考資料　水防資材備蓄一覧表（省略）

第３表　［別表－１］

情報連絡系統図



第４表　［別表－２］

警戒態勢時における業務

１．発掘調査の中止等

１）発掘作業を中止し、場内の整理、掘削法面の点検等を実施する。

２）場内パトロールの準備、要員の確保を行う。

３）必要に応じ排水ポンプの停止を行う。

２．場内巡視（パトロール）　状況に応じ適宜行う。

３．巡視要領

１）掘削法面の異常の有無の確認
　＊法崩れ　＊湧水状況

２）堤防法面、法先平場の異常の有無の確認
　＊法崩れ　＊湧水状況　＊亀裂

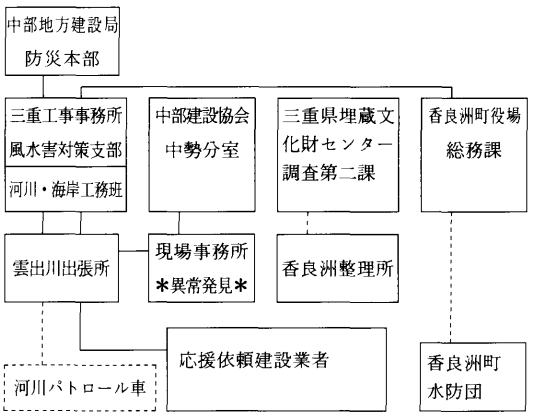
３）掘削箇所内の水位の状況

４．緊急連絡

掘削法面、堤防法面、法先平場に法崩れ、湧水、亀裂が発見された場合は、ただちに緊急連絡を行うものとする。

第５表　［別表－３］

緊急時連絡系統図



第６表［別表―４］

態勢時の要員及び連絡先

機　　関	所　　属	注　意	警　戒	非　常
三重工事事務所	工務第一課	係員１名	課長 係長２名 係員１名	課長 係長２名 係員３名
	調査第一課	係長１名 係員２名	課長 係長１名 係員２名	課長 係長３名 係員５名
	河川管理課	係員１名	課長 係長１名 係員１名	課長 係長３名 係員２名
	雲出川出張所	係長１名	所長 係長１名	所長 係長２名 係員１名
中部建設協会	中勢分室		１名	１名
	現場事務所	１名	３名	３名
三重県埋蔵文化財センター	調査第二課			
	香良洲整理所		２名	２名

緊急時連絡先（自宅）

三重工事事務所
- 工一課長
- 専門職
- 工務課長
- 雲出所長
- 技術係長

中部建設協会
中勢分室
- 室長
- 参事
- 主任

県埋蔵文化財センター
調査第二課
- 課長
- 第三係長

第７表［巡視記録簿］

巡　視　記　録　簿

平成　　年　月　日				巡視時刻	時　分
				巡視者名	
点検箇所	項　目	異常の有無		有りの場合の状況	
		なし	有り		
掘削法面	法崩れ				
	湧　水				
法先平場	亀　裂				
	湧　水				
堤防法面	法崩れ				
	湧　水				

特記事項（異常発見場所等を記入する。）

II　位置と環境

1　地理的環境について

香良洲西山遺跡(1)は、一志郡香良洲町字西山を中心として広がる遺跡である。

この遺跡の所在する香良洲町は、伊勢平野のほぼ中央部を流れる雲出川の河口に形成された三角州上に全町域が位置する。北は雲出川古川(以下古川)を境に津市、南は雲出川(以下本流)を境に三雲町と接し、東は伊勢湾に面している。川と海に囲まれているため、中世以降は周辺地域から独立してまとまった地域となっている[①]。

当町域は堤防を除けば、平均0.3m前後の沖積地で、もっとも高い標高3mの西北部から標高0.3mの東南部にかけて低くなっている。古くからの集落や畑は自然堤防上や海岸線に並行する2条の砂堆上に、また水田は三角州の中央部や海岸近くの後背湿地に立地する。当遺跡はこの三角州先端部の自然堤防上と後背湿地に立地している。

地質的には第四紀沖積層に属する砂礫層やシルト層で、海岸部ほど厚く堆積している。調査区付近ではN値50以上の固い砂礫層(今から2万年以上前に堆積した沖積層基底礫層)まで約20mあり、現在までに雲出川が氾濫を繰り返して運んだ土砂が堆積したものである[②]。

下流域の広大な沖積地を生み出した雲出川は、三重県と奈良県との境にある三峰山に源を発し、伊勢湾に向けて、中村川・長野川などの大小の支流を合わせて北東流する1級河川である。川沿いの道は、古くから伊賀を経由して畿内と南伊勢や東国を結ぶ主要な道の一つであった。その道沿いでもある左岸の久居丘陵や右岸の一志丘陵・阿坂丘陵及びそれらの縁辺部には、旧石器時代以降の数多くの遺跡が確認されている。特に雲出川右岸中流域で流れ込む支流の中村川との合流点付近は、伊勢平野への入り口にあたり、弥生時代以降の大規模な集落や首長墓と考えられる前方後方墳や群集墳、そして古代寺院などの遺跡が密集している。出土する土器や瓦などには畿内方面の文化の影響が強く見られる。

丘陵部と比較的標高の高い砂堆上に立地する遺跡を除き、中流域付近に縄文時代の遺跡が立地しているのは、約6,000年前のいわゆる縄文海進頂期の海面上昇で、当時の海岸線がそのあたりにあったためだと考えられる[③]。その後、海退期となり、現在の海岸線付近には、川の堆積作用と沿岸流による砂堆の形成によって沖積地が形成されてきた。

当遺跡付近において、古墳時代頃の海岸線は現在の本流と古川の分流点付近であったと推定されている[④]。しかし、当時の海岸線はかなり入り組んでいたらしく、当遺跡から約1.5km上流の雲出島貫遺跡[⑤](2)では縄文時代晩期の甕棺墓が確認されており、また当遺跡の対岸にある前田町屋遺跡[⑥](3)では古墳時代前期の古墳が確認され、下層からは縄文時代晩期の土器が出土している。また、同時期の古墳は小野江甚目遺跡[⑦](4)でも確認されている。

縄文時代晩期以降、沖積地の形成に伴って、人々の生活領域が次第に新しい海岸部に進出してきたと思われる。当町域においても、当遺跡をはじめ、北八反田遺跡(5)・観音堂遺跡(6)・高砂遺跡(7)から古墳時代の遺物が出土している。当町域もそのころには、人々が活動できる自然堤防や砂堆が部分的に形成され、そしてほぼ現在のような形になったのは中世以降と考えられている。

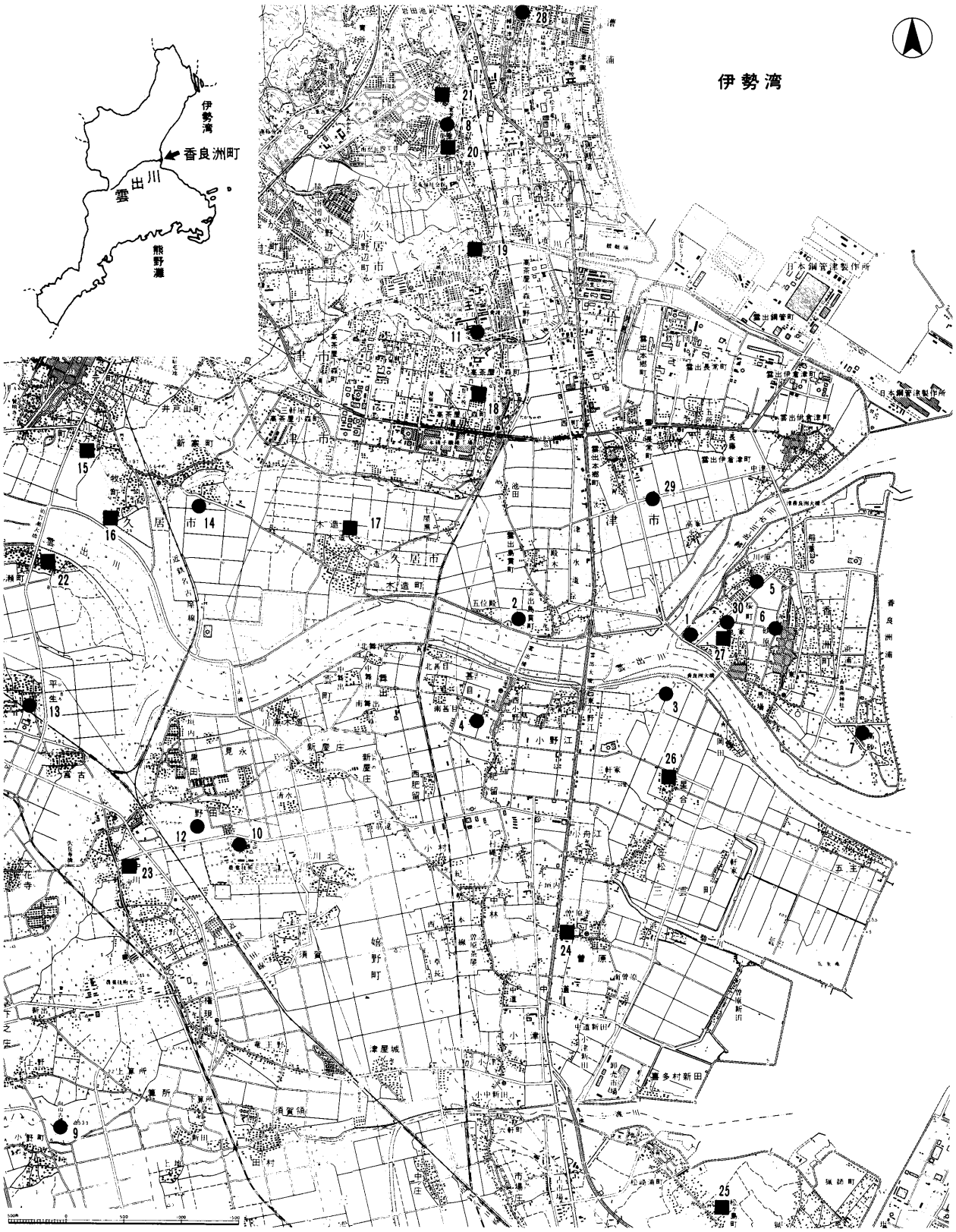
2　歴史的環境について

伊勢平野では弥生時代以降、土器の特徴などに北と南の違いが指摘されている。畿内との政治的関係で繋がりのあった雲出川流域がその境界の一つとされている[⑧]。

当遺跡において、明確な遺構として把握できた古墳時代以降の雲出川下流域の周辺遺跡[⑨]についてもう少し詳細にふれてみたい。

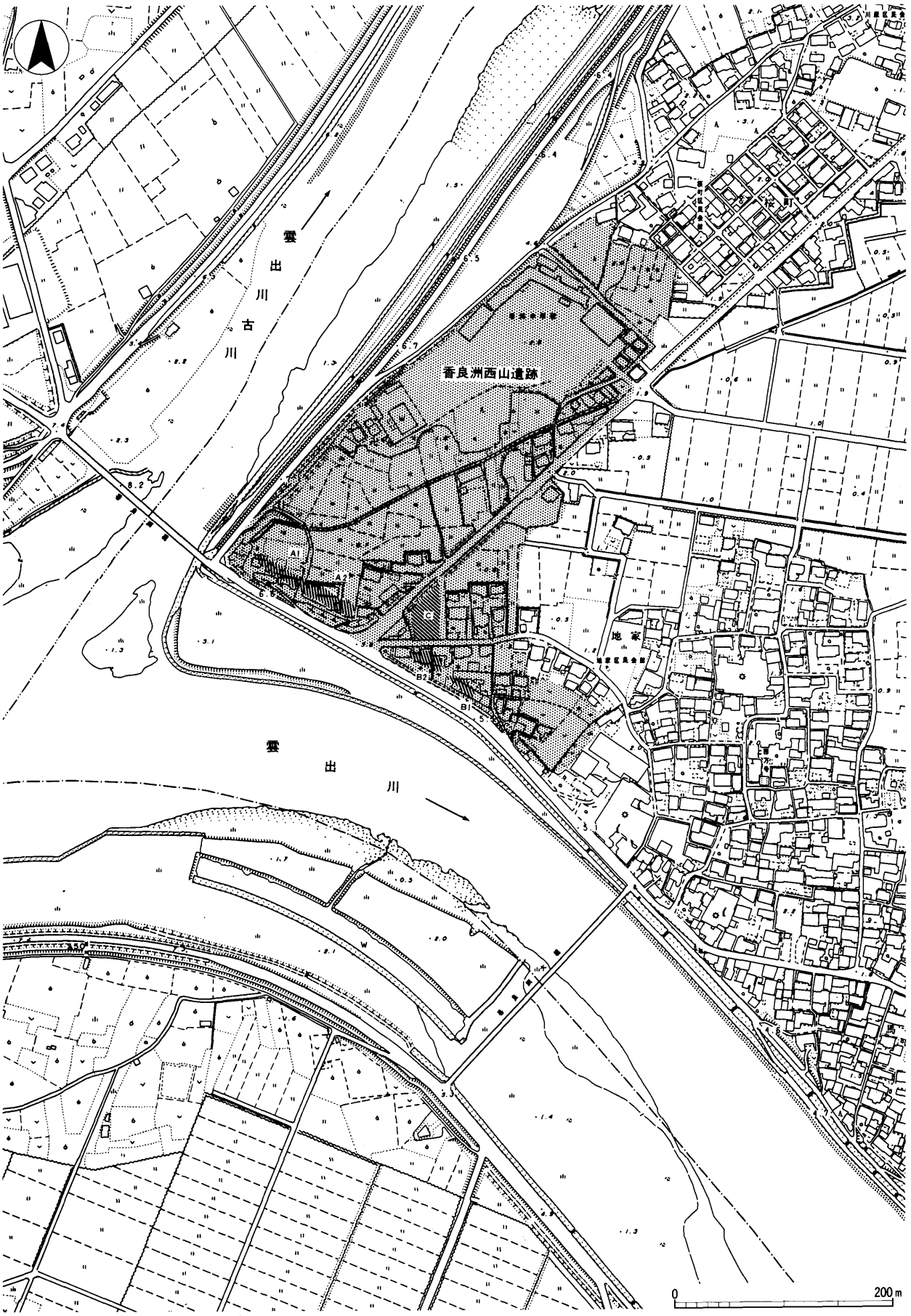
古墳時代

当遺跡の北西約5kmには旧安濃郡の首長墓である池谷古墳(8)が築かれた。海岸に近い段丘上のその場所からは当時の藤潟の港（後の安濃津）が一望できたと思われる。また、南西方向にほぼ同じ距離に



第５図　遺跡位置図（1:50,000）（国土地理院「津東部」「津西部」「松阪港」「大仰」1:25,000を使用）

１香良洲西山遺跡　２島貫遺跡　３前田町屋遺跡　４小野江甚目遺跡　５北八反田遺跡　６観音堂遺跡　７高砂遺跡　８池谷古墳　９向山古墳　10西山１号墳　11高茶屋大垣内遺跡　12片部遺跡　13平生遺跡　14長持元屋敷遺跡　15川方城　16牧城　17木造城　18小森城　19小森上野城　20池の谷砦跡　21垂水城　22須賀瀬城　23小川城　24曽原城　25細頸城　26星合城　27矢野城　28安濃津遺跡群　29宮間戸遺跡　30北浦遺跡



第6図　遺跡地形図（1:5,000）

旧一志郡の首長墓と考えられている向山古墳(9)や西山1号墳(10)が築かれている。池谷古墳に比べると現在の海岸線からかなり内陸部に入っている。旧飯南郡との境界付近に築かれている。

また、久居丘陵の東端に位置する高茶屋大垣内遺跡[10](11)では土器焼成坑や掘建柱建物が確認されている。右岸の片部遺跡(12)では大規模な水利施設が確認されている。

奈良・平安時代

律令期の条里制は、近世の旧参宮街道からやや東の部分までの施行が推定されている[11]。当町域には確認されていないため、まだ水田耕作に適した土地条件ではなかったと考えられる。このころの集落跡としては右岸では平生遺跡(13)、左岸では長持元屋敷遺跡(14)などがある。

鎌倉・室町時代

中世に入って、本警固が矢野浦にも設置され、また新警固が設置されていることから、海上交通の上で神宮との関係や長野氏との関係が注目される[12]。

特に箱木御薗として塩を神宮に納めていたこと[13]から、神宮の保護下に置かれることで自らの利益を守ろうとする[14]中世的集落もしくは矢野氏の支配が確立していたことを伺わせる。

また、南北朝期には左岸を中心に北朝方の長野氏、右岸を中心に南朝方の北畠氏が対立していたため、丘陵端などに多くの中世城館が築かれた。第5図の15～21は雲出川左岸に築かれた城で、22～26は右岸に築かれたものである。矢野城(27)は北畠家臣の矢野氏の城であったとされる。この矢野城のように雲出川右岸では、砂堆もしくは自然堤防上に築かれた中世城館が多く存在している。当時の海岸線や川に近い場所と推定できるところが比較的多い。

この時期の集落跡としては、左岸では安濃津遺跡群[15](28)、宮間戸遺跡[16](29)、右岸では前田町屋遺跡などがある。集落ではないが、当町域でも和鏡が出土した北浦遺跡(30)などがある。

江戸時代

周辺地域の塩田は早くから、新田に変わり、江戸時代には矢野が周辺の塩年貢を肩代わりしている。しかし、江戸中期には当町域の東部海岸付近の塩田も新田となり、当町域での製塩も終わりをつげる。

3　河川交通と海上交通の接点「矢野」

雲出川河口部を含む伊勢湾西岸地域には中世以降、安濃津をはじめ、伊勢神宮の外港として賑わった大湊など多くの港があった。伊勢湾内だけでなく、東国などにも繋がる海上交通の拠点として、中世以前にもその重要性は高かったと考えられる。

当町域にも中世以降「矢野」の港が形成された。近世には上流部の木材や米などの河川交通の港としても重要な位置を占めていた。近世の矢野の港は本流にあり、地家・馬場地区及び、河口部の川口垣内地区の2カ所が知られている。

矢野村は津藩領だが、川口垣内地区には紀州藩と津藩の米倉が設置されている。雲出川上流からそれぞれの藩の年貢米や木材などが運ばれ、紀州藩はここから白子へ積み出していた。

上流からくる荷物は年貢米のほか薪炭や木材が下り、塩や海産物などが上流に運ばれていった。

近代以降道路や鉄道の発達や、農業用水の堰が多く設置されたため、筏や船を通すことができなくなり、雲出川舟運も終焉を迎えた。

［註］

①香良洲町の地誌および遺跡については、『香良洲町史』（香良洲町教育委員会、1993）と『一志郡史』（一志郡町村会、1955)及び『三重地理学会報』14号(三重地理学会、1964)を参考にした。

②青木哲哉「平野の地下地質と地形環境」(『大垣市遺跡詳細分布報告書　解説編』大垣市教育委員会、1997)

③上田洋行「雲出川下流域平野における地形と条里」(『伊勢湾岸地域の古代条里制』弥永貞三・谷岡武雄編 東京堂出版、1979)

④前掲書③

⑤伊藤裕偉・川崎志乃『島抜第1次調査』(三重県埋蔵文化財センター、1998)

⑥「三雲町と低地の遺跡たち」説明会資料(三重県埋蔵文化財センター、1998)

⑦前掲書⑥

⑧伊藤久嗣「「伊勢」その南と北」(『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズIII、1987)

⑨周辺の遺跡は『三重県久居市遺跡分布地図』(久居市教育委員会、1984)、『三重県津市遺跡地図』(津市教育委員会、1988)、『三重県一志郡嬉野町』(嬉野町教育委員会、1989)のほか『三重の中世城館(増補・再版)』(三重県教育委員会、1978)なども参考にした。

⑩田中久生『高茶屋大垣内遺跡(第2次)』(三重県埋蔵文化財センター、1997)

⑪前掲書③

⑫飯田良一「文明年間における伊勢湾の警固と回船」(『三重県史研究』第4号　三重県総務部学事文書課、1988)

⑬『神鳳鈔』に「箱木御薗一石、外宮三石、塩雑用三石」とあり、傍注に「内宮矢野」とある(『群書類従本』)。

⑭前掲書③

⑮伊藤裕偉『安濃津』(三重県埋蔵文化財センター、1997)

⑯中村信裕「宮間戸遺跡発掘調査報告」(『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1983)

III　調査の成果（遺構）

1　層序について

（1）　はじめに

香良洲西山遺跡における層序は、遺跡が立地する旧地形の違いから大きく２つに分かれる。

Ａ・Ｃ地区は本流に沿って形成された自然堤防北側の後背湿地、Ｂ地区は自然堤防に立地する。

なお、明治中期の地籍図によると、Ａ・Ｃ区は基本的に水田で、Ａ地区西部だけが畑、Ｂ地区は畑・宅地として利用されていた。現況は、Ａ・Ｂ地区は盛土を施して宅地や工場、Ｃ地区は水田として利用されていた。

（2）　Ａ・Ｃ地区の基本層序

Ａ地区の基本層序は盛土を除くと、旧耕作土・床土・褐色砂質土・青灰色シルト・灰白色砂である。

検出面は基盤層である灰白色砂上面で、南北方向は北から本流側である南に向かって緩やかに落ち込んでいる傾向が確認できた。また、東西方向は町道を挟んだＣ地区の旧流路に向かって落ち込んでいる。

Ｃ地区の基本層序も、Ａ地区とほぼ同じで、耕作土、床土、青灰色砂質土、灰白色砂となる。検出面もＡ地区と同じ灰白色砂上面である。ただし、調査区西側の旧流路及び東側の旧沼地の部分では床土直下にそれらの埋土が堆積している。

（3）　Ｂ地区の基本層序

Ｂ地区の基本層序は、表土である盛土・攪乱を除くと、暗褐色砂質土(旧表土)、褐色砂質土、青灰色シルト、青灰色シルト粗砂混、暗青灰色シルトとなる。Ａ・Ｃ地区で検出面とした灰白色砂層は確認できなかった。

（4）　小結

Ａ・Ｃ地区の灰白色砂層はその上面や遺構から出土した土器から、遅くとも弥生時代後期から古墳時代にかけて堆積していた基盤層であったと考えられる。この層は無遺物層で、Ａ地区東端で現地表から15mの深さまで確認されている。

Ｃ地区の旧流路の埋土からは土師器椀(26)、旧沼地の埋土からは土師器甕(12)が出土している点と旧流路と旧沼地に挟まれた砂州状の微高地(灰白色砂層)上のＳＫ33から土師器甕(８)が出土している点は時期差はあるものの古墳時代後期以降という点で整合している。

Ｂ２地区で上層遺構検出面とした褐色砂質土層上面は標高１ｍ前後である。Ｂ１地区では攪乱によりほぼ全面破壊されていたが、直上の暗褐色砂質土には植物遺体と考えられる炭化物が多く含まれていることから、明治時代中期までは畑として利用されていたときの旧表土と考えられる。

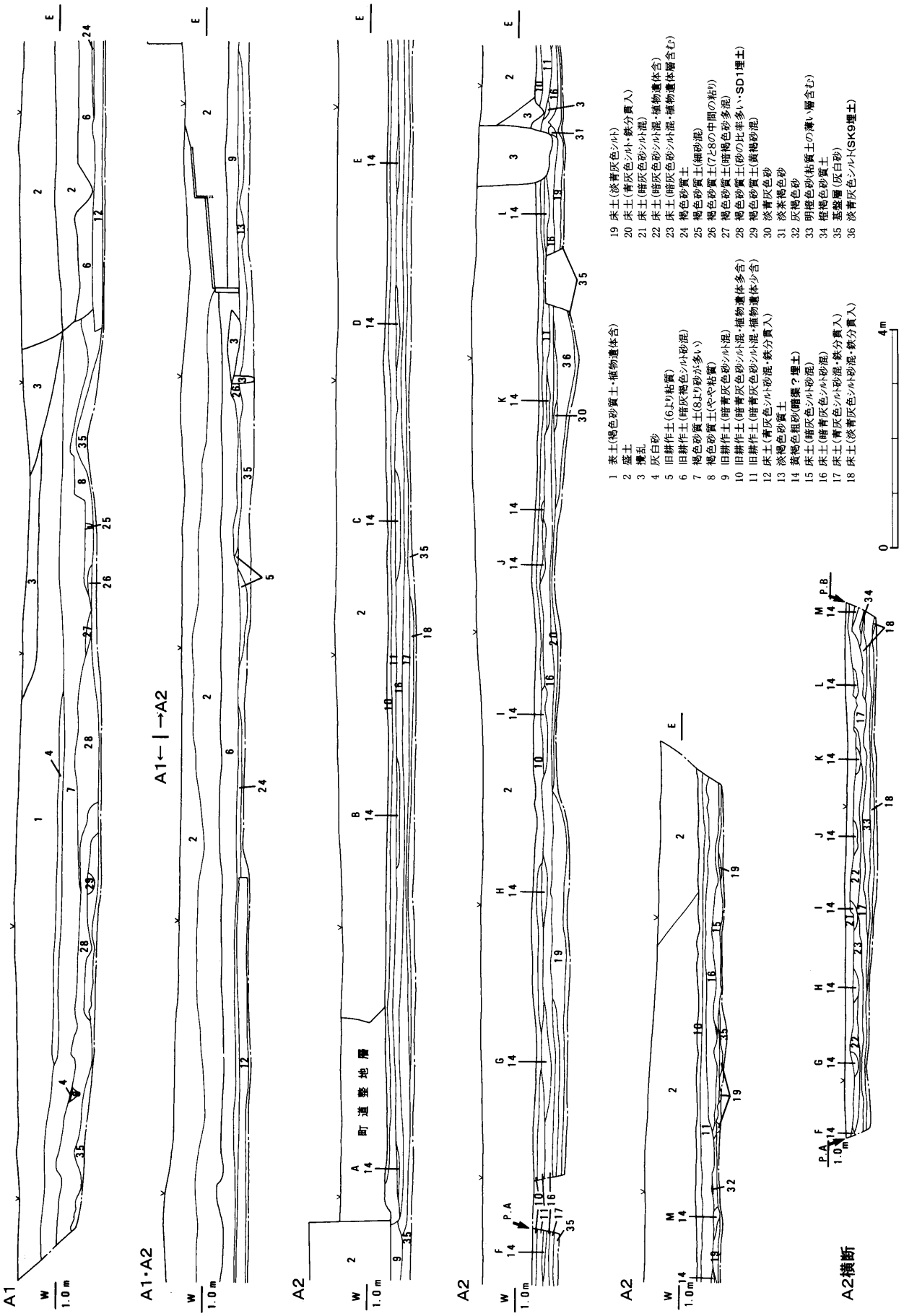
Ｂ地区の下層検出面である青灰色シルト下層の青灰色シルト砂混層は出土した土師器鍋(57)から、この層の堆積時期は12世紀末から13世紀初頭までと考えられる。Ｂ地区の旧地形を自然堤防としたが、それは13世紀初頭以降のことである。それ以前は、本流の一時期の河道と考えられ、河道の変化から後背湿地となり、自然堤防へと変化していったものと考えられる。なお、青灰色シルト層以下のシルト層の厚さは不明で、攪乱として埋め込まれていた建築廃材を撤去するとき、重機で標高－２ｍ程度ところまでは確認できた。

包含層である床土・褐色砂質土とも部分的に、１つの層の中に縞状の植物遺体や粗砂などの薄い層が幾層にも重なっているものが観察できた。おそらく、雲出川の氾濫による堆積作用によるものと考えている。また、Ｂ地区のトレンチからサンプリングした埋土に含まれる珪藻の種類が下層から上層に向かって、海水性から汽水性、中～下流性河川指標群から陸生珪藻群へと変化していることが分析から明らかになっている。

2　主な遺構について

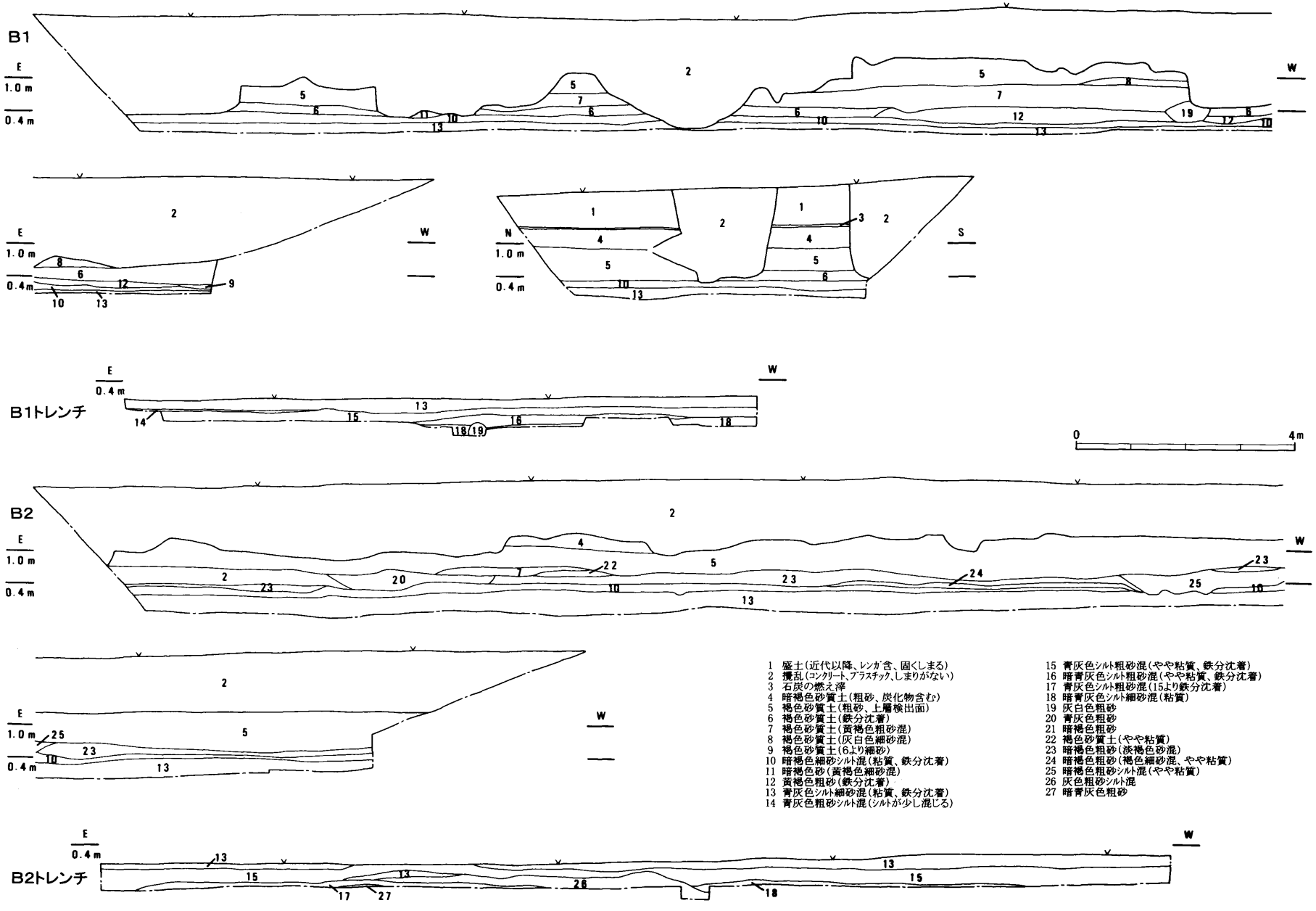
（1）　はじめに

Ａ・Ｃ地区において検出面とした最下層の灰白色砂上面は、出土した遺物から弥生時代後期以降と考えられる。検出面から現代の水田面までの厚さは平均0.5mほどであり、調査時点では、以下の理由から包含層として扱わざるを得なかった。

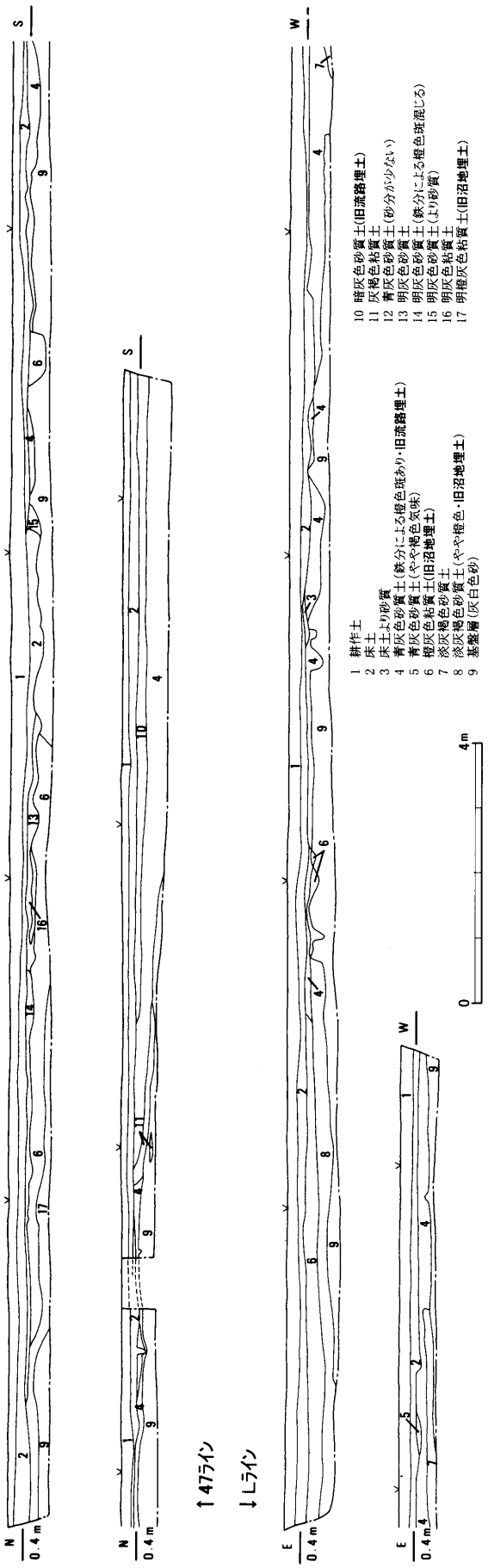


第７図　Ａ地区土層図（1:100）　　※Ａ～ＭはＡ２地区上層遺構面の溝の名称

第8図　B地区土層図（1:100）



1　盛土（近代以降、レンガ含、固くしまる）
2　攪乱（コンクリート、プラスチック、しまりがない）
3　石炭の燃え滓
4　暗褐色砂質土（粗砂、炭化物含む）
5　褐色砂質土（粗砂、上層検出面）
6　褐色砂質土（鉄分沈着）
7　褐色砂質土（黄褐色粗砂混）
8　褐色砂質土（灰白色細砂混）
9　褐色砂質土（6より細砂）
10　暗褐色細砂シルト混（粘質、鉄分沈着）
11　暗褐色砂（黄褐色細砂混）
12　黄褐色粗砂（鉄分沈着）
13　青灰色シルト細砂混（粘質、鉄分沈着）
14　青灰色粗砂シルト混（シルトが少し混じる）
15　青灰色シルト粗砂混（やや粘質、鉄分沈着）
16　暗青灰色シルト粗砂混（やや粘質、鉄分沈着）
17　青灰色シルト粗砂混（15より鉄分沈着）
18　暗青灰色シルト細砂混（粘質）
19　灰白色粗砂
20　青灰色粗砂
21　暗褐色粗砂
22　褐色砂質土（やや粘質）
23　暗褐色粗砂（淡褐色砂混）
24　暗褐色粗砂（褐色細砂混、やや粘質）
25　暗褐色粗砂シルト混（やや粘質）
26　灰色粗砂シルト混
27　暗青灰色粗砂



第９図　Ｃ地区土層図（1:100）

耕作土直下の床土ですでに湧水が始まり、断面の土層では分層できても、遺構面は灰白色砂上面としか認識することができなかった。

地下水位が高いため、最初に調査を開始したＡ１地区では、まさに泥水の中から遺物が出土し、分層的な調査は全くできなかった。

晴天が続いていても、満潮時が近づくと、検出面全体からじわじわと水が浸みだし、遺構の底から明らかに湧水しているのが確認できた。

したがって、床土と一括した層位の中に遺構面があった可能性は非常に高かったと考えている。

また、特にＣ地区においては北東側に広がる水田地帯の影響で地下水位以上に水田の水に悩まされた。そのため、調査区の壁際及び土層観察用の畦として設定した南北方向と東西方向の畦沿いに排水路を掘削した。包含層から遺構面に下げるほど排水路もさらに深く掘削しなければならなかったため、ＳＫ33やＳＫ31などは排水路で破壊してしまった。

（２）弥生・古墳時代の遺構

ＳＫ11は直径約３ｍ、深さ0.18ｍの半円形部分を検出した。しかし、残りの部分は調査区の南側に延びるため、全体の形状は不明である。埋土は黒色粘土（砂混）で、弥生土器が２点出土したが、磨耗が激しく、流れ込みの可能性もある。

ＳＫ７はＡ２地区東南部で検出されたが、調査区南側にのびるため、遺構の形状は不明である。古墳時代の土師器高杯(17)の口縁部が出土している。磨耗が激しいため、流れ込みの可能性もある。

ＳＤ12はＡ２地区中央部で検出された。全長約10ｍ、幅約0.3ｍ、深さ0.05ｍで、ゆるやかな弧を描く溝状の遺構である。埋土は褐色砂（青灰色シルト混）で、壁面及び底面にシルトが厚さ１cm程薄く張りついていた。

西から東に向かって流れたと考えられるが、削平を受けているためどの方向に延びていたかは不明である。出土遺物は土師器二重口縁壺(4)の口縁部１点のみである。

ＳＫ33はＣ地区北部で検出された。埋土は青灰色砂(鉄分貫入)で質的には基盤層の灰白色砂とほぼ同じであった。直径約1.2ｍの半円状で、西半分は排水溝で破壊していた。埋土からは古墳時代後期の土

師器甕(８)が排水溝拡張掘削中に１点、翌日遺構検出時には接合する部分が出土した。

(３)鎌倉・室町時代の遺構

ＳＫ４はＡ１地区中央部の旧水田の畦の肩部分から検出された。長軸約３ｍ、短軸1.2ｍの楕円形で、検出面からの深さは0.25ｍである。

出土した土器から13世紀前半以降に埋まったと考えられる。

ＳＫ21はＢ１地区東部で検出された。長軸３ｍ、短軸１ｍの楕円形で、検出面からの深さは約0.3ｍである。

埋土は暗青灰色粘土(シルト)で、出土した土器片から13世紀には埋まったと考えられる。

ＳＫ22はＳＫ21の南側から検出された。調査区南側に延びるため、遺構の形状は不明である。

ＳＫ24はＢ１地区西部のＳＥ20の北東側で、包含層の褐色砂質土層を除去したときに検出された。長軸１ｍ、短軸0.7ｍの楕円形で、埋土の暗青灰色砂から土師器片と灰釉陶器片が出土した。

ＳＫ30はＣ地区の西端で検出された。最大径約４ｍの不定形で、深さは0.16ｍの土坑である。さらに西側に広がるため拡張したが、町道(旧海軍道路)の擁壁建設に伴う攪乱を受け、規模は不明である。柔らかめの灰色粘土(シルト)の埋土の中から、12世紀後半の山茶椀、土師器甕、瓦器椀、土錘が出土した。

ＳＫ31はＣ地区の南西部の調査区壁際で検出された直径約２ｍ、深さ約0.2ｍの浅い半月状の土坑である。ＳＫ33と同様に調査区排水路のために残りの部分は破壊された。旧流路の埋土から切り込んでいた。埋土は青灰色粘土(シルト)で、土師器片、山茶椀片が出土した。時期はＳＫ30と同時期と考えられる。

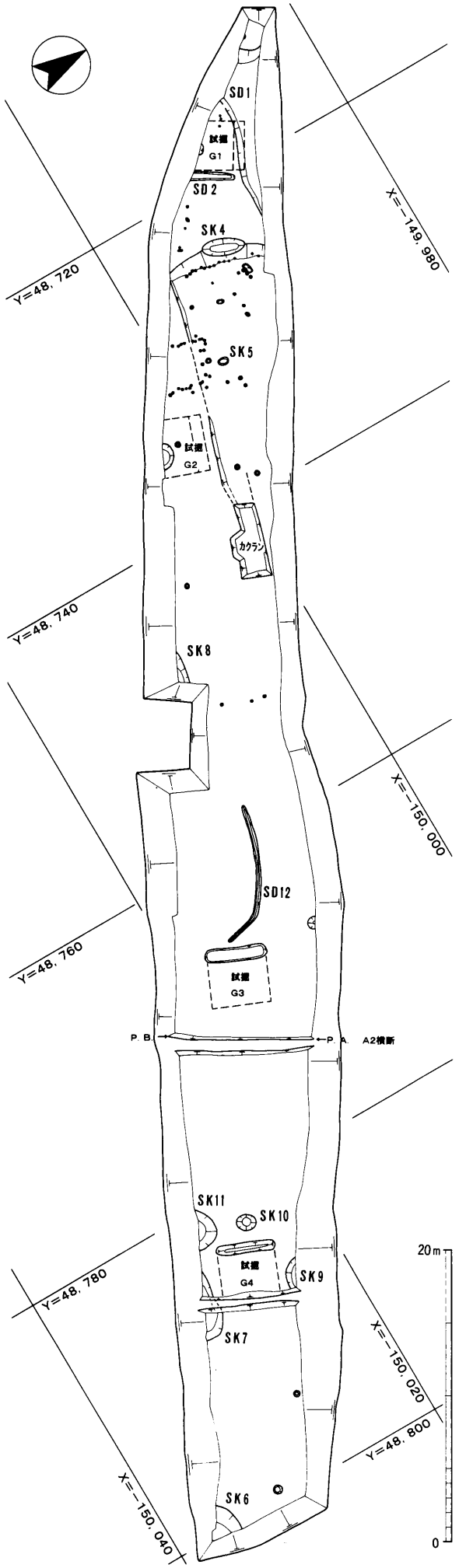
ＳＫ32はＣ地区中央部で検出された直径約２ｍ、深さ0.12ｍの浅い土坑である。旧流路の埋土から切り込んでいた。埋土は灰褐色砂質土で、土師器片、山茶椀片が出土した。時期はＳＫ30と同時期と考えられる。

(４)江戸時代以降の遺構

ＳＤ１はＡ１地区西端部で検出された。この遺構は調査区の南北に広がるため、深さ・幅とも不明だ

報告書遺構名	地区	埋土	検出	調査区内で検出された平面的な規模と形	検出面標高(m)遺構の肩	遺構の底の標高(m)	遺構の深さ(m)	灰白色砂層まで完掘しているかどうか	時代	備考
ＳＤ１	Ａ１	褐色シルト砂混	部分	長さ2m、幅4～11mの溝	0.60	南：0.40 北東：0.24	南：0.20 北東：0.36	完掘	近世以降	調査区外に延びる 南から北東に流れたと考えられる
ＳＤ２	Ａ１	赤褐色砂質土	部分	長さ2.7m、幅0.6mの溝	0.58	南：0.49 北：0.39	南：0.09 北：0.19	完掘	不明	調査区外に延びる
ＳＫ４	Ａ１	褐色シルト砂・砂利混	全体	長軸３ｍ、短軸1.2ｍの楕円形	0.55	0.21	0.34	完掘	中世	
ＳＫ５	Ａ２	暗灰色砂質土	全体	直径0.5mのほぼ円形	0.18	−0.02	0.20	完掘	不明	
ＳＫ６	Ａ２	青灰色シルト砂混	部分	最大径2.4mの不定形	0.22	0.07	0.15	完掘	不明	調査区外に延びる
ＳＫ７	Ａ２	茶褐色砂	部分	最大径５ｍの不定形	0.15	−0.04	0.19	完掘	古墳	調査区外に延びる
ＳＫ８	Ａ１	暗青灰色砂	部分	最大径２ｍの不定形	0.26	0.19	0.07	完掘	不明	調査区外に延びる
ＳＫ９	Ａ２	青灰色シルト	部分	最大径２ｍの不定形	0.15	−0.05	0.20	完掘	不明	調査区外に延びる
ＳＫ10	Ａ２	暗青灰色砂	全体	直径1.2m	0.16	−0.06	0.22	完掘	不明	
ＳＫ11	Ａ２	暗青灰粘質土砂混	部分	直径３ｍ	0.17	−0.01	0.18	完掘	弥生	調査区外に延びる
ＳＤ12	Ａ２	上層　褐色砂シルト混 下層　褐色シルト	全体	全長10m 幅0.3mの溝	西：0.29 東：0.26	西：0.24 東：0.21	西：0.05 東：0.05	完掘	古墳	西から東に流れたと考えられる
ＳＥ20	Ｂ１	淡灰褐色砂質土	全体	堀形の直径1.7m	0.34	−0.50	0.84	安全対策上、掘削を断念	近代以降	湧水激しい
ＳＫ21	Ｂ１	暗青灰色シルト	部分	長軸３ｍ、短軸１ｍの楕円形	−0.05	−0.30	0.25	湧水部分は未掘	中世	
ＳＫ22	Ｂ１	暗青灰色シルト	部分	最大径１ｍの不定形	−0.05	−0.16	0.11	湧水部分は未掘	中世	調査区外に延びる
ＳＫ23	Ｂ１	茶褐色砂	全体	直径２ｍ	0.10	−0.55	0.65	安全対策上、掘削を断念	近代以降	ＳＥ20と関連か湧水なし
ＳＫ24	Ｂ１	暗青灰色砂	全体	長軸１ｍ、短軸0.7ｍの楕円形	−0.04	−0.19	0.15	完掘	中世	
ＳＫ25	Ｂ２	暗褐色砂質土	全体	長軸1.4m 短軸0.6mの楕円形	1.06	0.85	0.21	完掘	近世以降	
ＳＫ26	Ｂ２	上層　灰白色砂 下層　褐色シルト	全体	長さ４ｍ、幅0.5～0.7mの三日月状	1.06	0.78	0.28	完掘	近世以降	
ＳＫ30	Ｃ	暗青灰色砂質土	部分	最大径４ｍの不定形	0.32	0.16	0.16	完掘	中世	調査区外に延びる 拡張したが、町道の擁壁建設時に破壊
ＳＫ31	Ｃ	青灰色粘土	全体	直径２ｍの半円状	0.25	−0.03	0.28	湧水部分は未掘	中世	
ＳＫ32	Ｃ	灰褐色砂質土	全体	直径２ｍの半円状	0.33	0.21	0.12	完掘	中世	
ＳＫ33	Ｃ	青灰色砂鉄分貫入	全体	直径1.2mの半円状	0.20	0.05	0.15	完掘	古墳	調査区外に延びる
旧流路	Ｃ	上層　暗灰色砂質土 下層　青灰色砂質土	部分	長さ30m 幅３～10m	北：0.20 南：0.21	北：0.04 南：−0.27	北：0.16 南：0.48	湧水部分は未掘	古墳	調査区外に延びる 北から南に流れた
旧沼地	Ｃ	上層　橙灰色粘質土 下層　淡灰褐色砂質土	部分	長さ40m 幅３～８ｍ	北：0.20 南：0.21	北：0.04 南：0.06	北：0.14 南：0.15	湧水部分は未掘	古墳	調査区外に延びる

第８表　遺構一覧表



←第10図　A地区遺構平面図（1:400）

が、南から北東方向へ流れていたと考えられる。近世陶器が出土していることから、近世以降に埋まったと考えられる。なお埋土からは平安末期のロクロ土師器皿(27)も出土している。

ＳＥ20はＢ１地区西部で検出された。検出面での掘り方は直径約1.7mで、検出面から0.8mまでは確認できた。湧水が激しく、危険なことと２Ｈラインの制約から完掘はできなかった。陶製の井戸側の下には木製の結桶が１段は確認できた。陶製の井戸側の口縁や模倣タガの形状から、この井戸の時期も1900年代と考えられる。

ＳＫ23はＳＥ20の北西で検出された。直径約２ｍ、検出面から深さ0.65mまで掘削したが、ＳＥ20と同様の理由で完掘はできなかった。ＳＥ20を掘削前ここに井戸を掘削しようとしたが、水がでなかったために埋め戻された可能性もある。埋土は暗青灰色シルトで、土師器片が数片出土した。

ＳＫ25はＳＫ26とともにＢ２地区西部の上層遺構面で検出された。長軸約1.4m、短軸約0.6mの楕円形で、検出面からの深さは0.21mである。埋土は暗褐色砂質土で、土師器片が出土した。

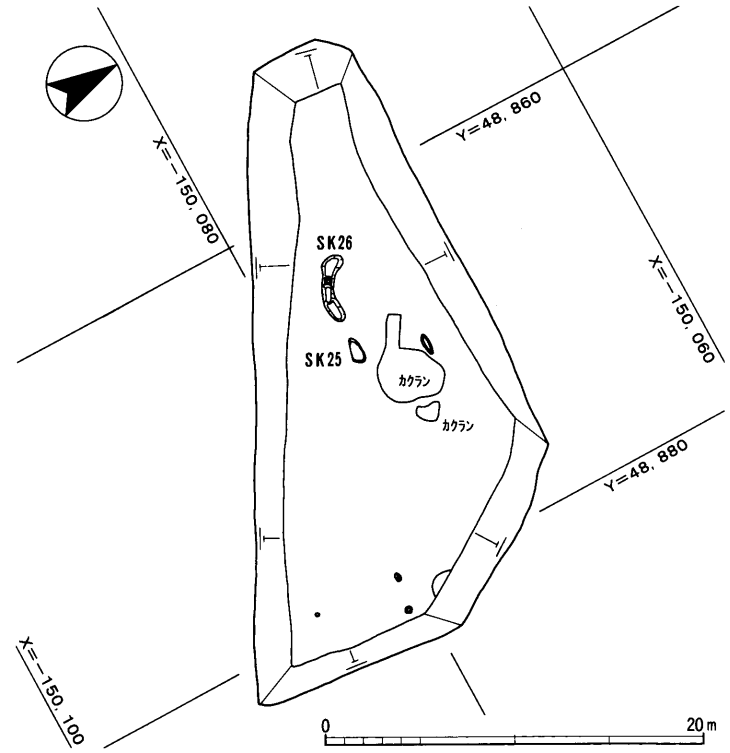
ＳＫ26はＳＫ25の西側で検出された。長さ約４ｍ、最大幅0.7mの細長い土坑で、最大の深さは0.28mである。埋土は上層から灰白色砂、灰白色砂シルト混、褐色シルトとなり、ＳＫ25とは異なる。埋土から土師器片が出土した。検出時にＳＫ25とＳＫ26は一連の溝状遺構と考えていたが、埋土が異なるため別々の土坑とした。

（５）時代不明の遺構

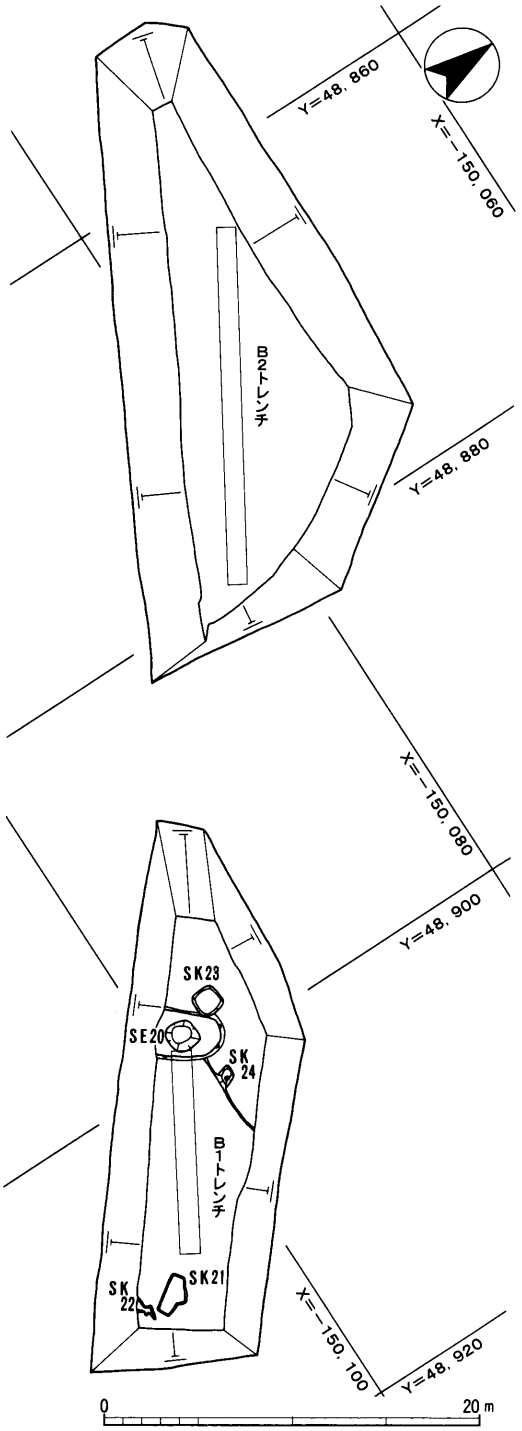
以下の遺構では、土師器の皿や鍋の胴部片などの小片しか出土していない。中世から近世と考えられるが、特定できないため、時代は不明とした。

ＳＤ２はＡ１地区西部で検出された。長さ2.7m、幅約0.6m、検出面からの深さ約0.1mである。南から北へ流れたと考えられる。ＳＤ１に流れ込むと予想されたが、削平を受けたためか、検出はできなかった。調査区の南側に伸びている。遺物は炭化物が出土しただけで時代は不明である。

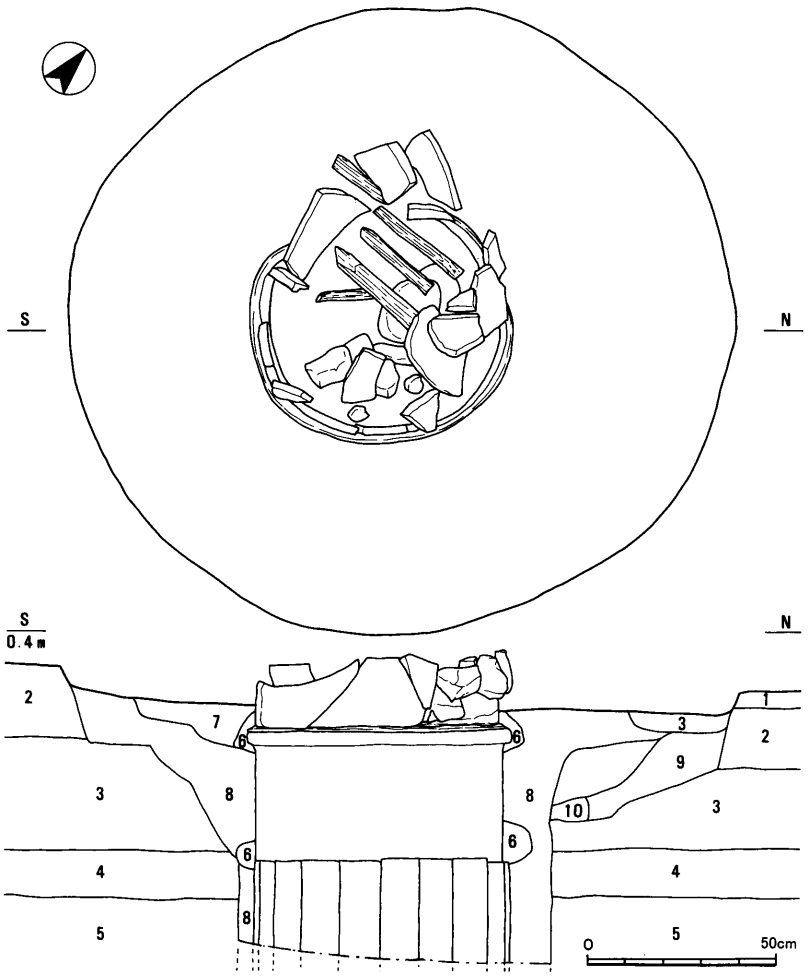
なお、調査区のこの部分は、中世以降畑として利用されていたと考えられるため、その時の耕作溝の



第11図　B 2 地区上層遺構平面図（1:400）

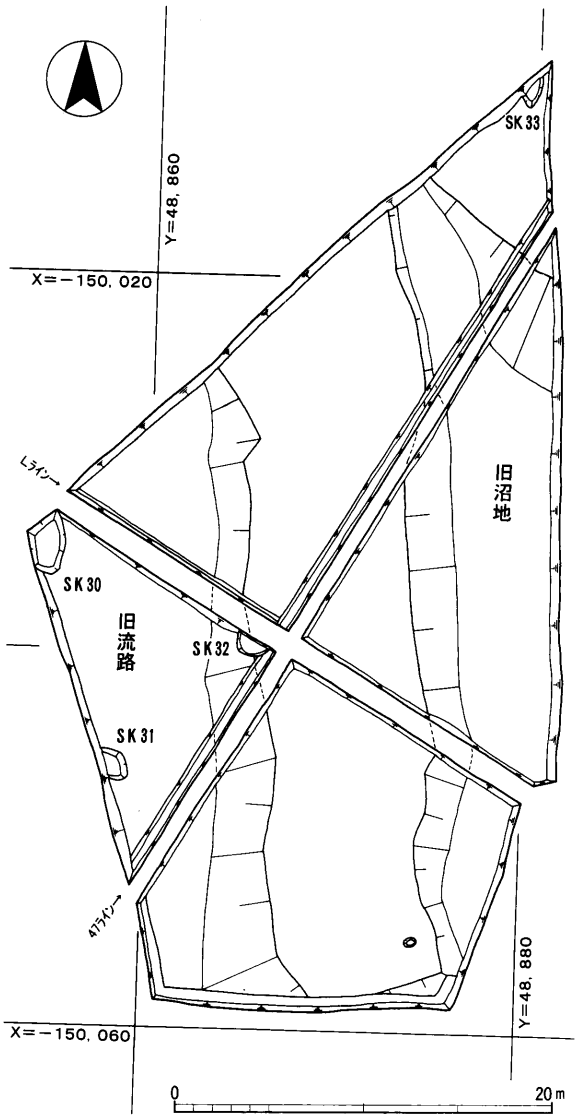


第12図　B地区下層遺構平面図(1:400)



第13図　SE20実測図（1:20）

1　灰色砂（鉄分付着）
2　黄褐色粗砂（鉄分付着）
3　青灰色シルト
4　青灰色シルト砂混
5　暗青灰色シルト
6　淡橙色粘土
7　淡灰褐色砂質土
8　淡褐色砂
9　淡褐色砂シルト混
10　淡褐色砂（鉄分付着）



第14図　C地区遺構平面図（1:400）

可能性も否定できない。

ＳＫ５はＡ１地区中央部で検出された。直径約0.5m、深さ約0.1mの円形である。出土遺物は土師器１片のみで、時期は不明である。

ＳＫ６はＡ２地区南東角で検出された。調査区外に伸びるため、遺構の形状は不明である。また、出土遺物は土師器１片のみで時期も不明である。

ＳＫ８はＡ２地区南西部で検出された。この遺構も調査区南側に伸びるため遺構の形状は不明である。出土遺物は土師器１片のみで、時期も不明である。

ＳＫ９はＡ２地区北東部で検出された。遺構は調査区北側に伸びるため形状は不明である。また、土師器１片が出土しているが、小片のため時期は不明である。

ＳＫ10はＡ２地区東部中央で検出された。直径約1.2mで、検出面からの深さ約0.2mである。土師器１片が出土しているが、時期は不明である。

（６）自然地形

旧流路　Ｃ地区西部分で検出された南北方向の流路である。この流路は調査区の西側にさらに広がるため、全体の幅などは不明であるが、調査区内では北部で深さ0.2mの広く浅い溝状を呈している。南部では深さ0.5mと落ち込んでいる。北側の古川方向から南側の本流方向に向かって流れていたと考えられる。

旧流路の埋土からは土師器杯(26)、底に近い部分(灰白色砂上面)から、古墳時代の土師器が数点出土しているが、いずれも磨耗が激しく、流れ込みによるものと考えられる。水が流れていた時期も、同時期だと考えられる。調査終了前に下層の確認トレンチを入れたところ、基盤層の灰白色砂層で、シルトと砂の薄い互層状態が確認できた。流水の堆積作用と考えられる。なおこの流路の南部(下流部分)は湧水のため、灰白色砂層までは完掘はできていない。

また、後から調査されたＢ２地区においてこの流路の続きは確認できなかった。

旧沼地はＣ地区東部分で検出された南北方向の不定形な沼地である。西側の旧流路とほぼ並行し、ＳＫ33の検出された微高地は旧沼地の北側である。

埋土は旧流路と異なり、上層から橙灰色粘質土、橙灰色砂質土、灰白色砂層となる。上層の橙灰色粘質土からは土師器甕(12)が出土している。

調査中に下層の確認トレンチを入れたところ、基盤層の灰白色砂層以下の部分は湧水のため旧流路のような流水の堆積作用によるシルトと砂の薄い互層状態は確認できなかった。埋土に植物遺体等の炭化物も観察できなかった。

（７）小結

今回確認できた遺構は古墳時代と中世以降の大きく二つの時期に分けられる。住居跡など直接的な集落跡に結びつくものは確認できなかったが、土坑や溝など間接的に集落跡に結びつく遺構が確認できた。

なお、旧流路などで確認されたシルトと砂の薄い互層状態は、干潟における朝汐作用による堆積の可能性もある。

Ⅳ　調査の成果（遺物）

1　はじめに

遺物の出土量は、陶製の井戸側[1]を除くと整理箱に約10箱である。遺構出土の遺物も小片が多く図示できなかった。また磨耗の激しい遺物も多く、内外面の調整が不明瞭なものがあった。

時代的には、弥生時代から江戸時代までと幅広くあるが、弥生時代後期から古墳時代後期までと中世から近世までの二つの時期に集中している。

なお、植物遺体として桃の種[2]と考えられるものがＢ・Ｃ地区から出土した。また、ＳＥ20の結桶は、２Ｈラインの関係上、あまり深く掘削できず、遺構実測図と写真のみの記録を残した。

遺物の出土範囲はＡ・Ｂ地区がほぼ全面的に偏りなく出土したのに対し、Ｃ地区は旧沼地部分より西側の微高地と旧流路部分に偏って出土した。

2　弥生時代後期の遺物

広口壺(1)はＳＫ11から出土した。図示しなかったが、別個体の体部片も出土している。

高杯（２）はＣ地区の灰白色砂上面で出土した。内外面ともに磨耗が激しく調整は不明瞭である。三方に透かし孔があり、弥生時代後期のものと思われる。

3　古墳時代から奈良時代の遺物

土師器壺（３～５）は古墳時代前期のものと考えられる。３は広口の大型壺だが、口縁部が欠けている。４はＳＤ12出土で二重口縁壺である。

土師器甕（６～15・18・53～56）のうち、８がＳＫ33、12が旧沼地の出土で、あとは灰白色砂上面か包含層出土である。７～９・53はＳ字状口縁台付甕の口縁部でＥ類[3]に属し、５世紀後半頃のものと思われる。10は台付甕の台部で、11・18はＳ字状口縁台付甕の台部である。12は７世紀代のものと考えられる。55・56は奈良時代の長胴甕である。

土師器高杯（16・17・19～23・50～52）は古墳時代前期から中期にかけてのものである。16・17は内面にミガキが施されている。古墳時代前期のものと思われる。20～22は脚部、50・51は杯部だけの出土で古墳時代中期のものと考えられる。23は焼成不良の須恵器高杯である。

土師器器台（24・25）のうち25は庄内系の小型器台で、脚部には三方に透かし孔があり、３世紀末から４世紀初頭頃のものと思われる。

土師器杯(26)は旧流路南部の埋土から出土した。口縁部にヨコナデがみられる。５世紀末から６世紀初めにかけてのものと考えられる。

4　平安時代から室町時代の遺物

ロクロ土師器皿[4]（27・28・63）は10世紀代のものと考えられる。27はＳＤ１、63はＢ２地区青灰色シルト層から出土している。いずれも磨耗が激しい。

土師器皿[5]（29・30・43・62・65～75）は、30がＳＤ１、70がＳＫ21からの出土である。29・65～70・74・75が南伊勢系[6]で、30・72・73が中北勢系[7]の特徴を持っている。62は京都系「ての字」口縁皿[8]で11世紀中葉から後葉のものである。

黒色土器椀[9]（58～60）はいずれもＢ１地区の青灰色シルト砂混層からの出土で、10世紀末～11世紀のものである。58は黒色土器Ｂ類、59・60は黒色土器Ａ類で内面にはヘラミガキが施されている。

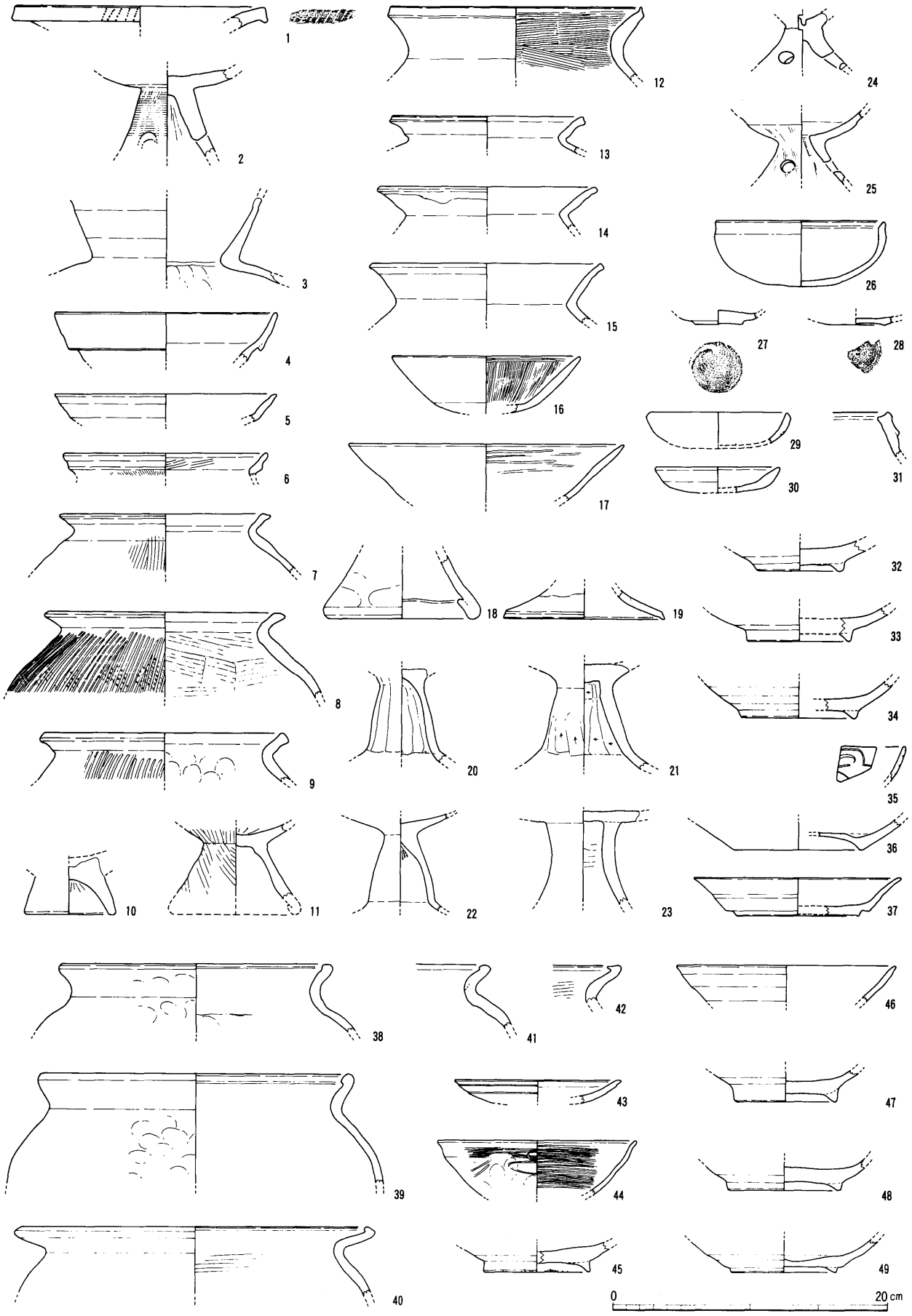
瓦器椀[10]（44・61）はいずれも12世紀代のものである。口唇部内側に沈線が施され、内側にはヘラミガキがある。44はＳＫ30出土で、共伴する土師器甕や山茶椀の編年観ともほぼ整合している。

土師器甕（38～42）はＳＫ30の出土でいずれも口縁部片のみである。南伊勢系の土師器鍋が確立する直前のものである。12世紀後半頃のものと思われ、口縁部が丸く肥厚し、内側に折り返しが認められる。

土師器鍋(57)はＢ１トレンチ青灰色シルト砂混層から山茶椀(79)と一緒に出土した。南伊勢系の土師器鍋で12世紀末から13世紀初頭のものである。

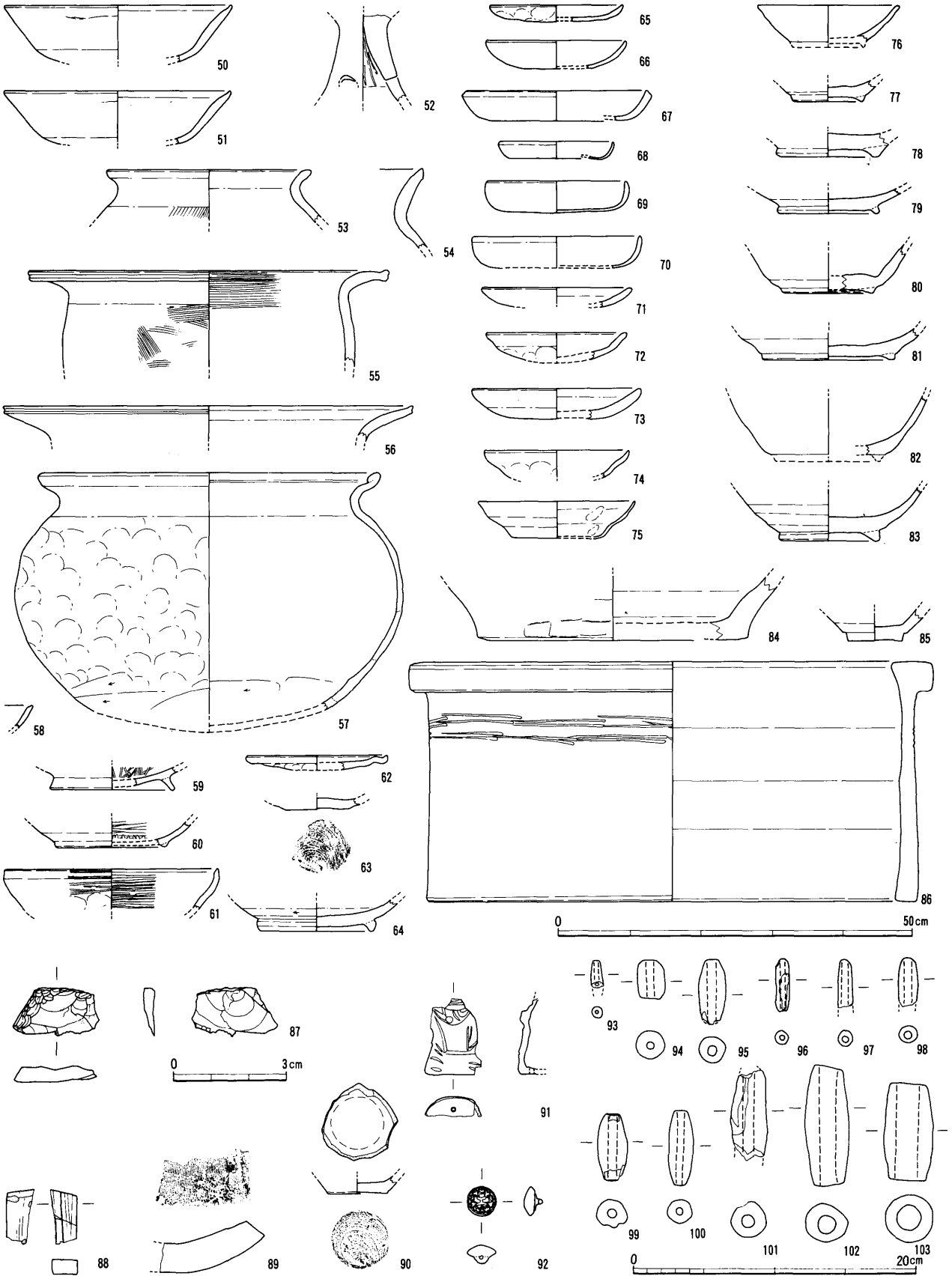
土師器羽釜(31)は口縁部片で、中世後半以降のものと思われる。

灰釉陶器椀(64)は土師器鍋(57)と同じ層から出土している。



第15図　遺物実測図（1）（1：4）

［5・27・30；SD1、33；SK4、17；SK7、1；SK11、4；SD12、12；旧沼地、26；旧流路、38～49；SK30、8；SK33、他はA・C地区包含層］



第16図　遺物実測図（2）（1：4　ただし86は1：8、87は2：3）

［70;SK21、86;SE20、100・102;SK30
50～69・85・89・90・98・99;B地区包含層、88・91・93～97;A地区包含層、87・92・101;C地区包含層］

山茶椀・小椀(32～34・45～49・78～83)は藤澤良祐氏による山茶椀編年[11](以下、山茶椀の編年及び類型名は藤澤氏のものを引用する)の第４～６型式（尾張型）と考えられる。33はＳＫ４の出土である。第６型式と思われ、13世紀前半と考えられる。45～49はＳＫ30の出土である。第４型式と思われ、12世紀後半と考えられる。45の高台には籾殻痕がある。

小椀(76・77)は高台を有し、体部がやや内湾しながら立ち上がる。第３型式と思われ、12世紀前半のものと考えられる。

天目茶椀(85)は17世紀までに堆積したと考えられるＢ２地区の下層包含層から出土した。

青磁椀(35)はＳＫ30近くの包含層から出土した。

陶器壺(84)は青灰色シルト層から出土した。

5　江戸時代以降の遺物

36は土瓶と考えられる。排水路掘削中の出土であり、出土層位は不明である。

陶器皿(37)は灰白色の釉が施されている。ＳＤ１上層の北壁から出土した。ＳＤ１が完全に埋まったのは、この遺物から近世以降と考えられる。

陶製の井戸側(86)はＳＥ２０の出土である。少なくとも二段あったが、上の部分は、攪乱によって破壊されていた。口縁部と模倣タガの形態から、伊藤裕偉氏による陶器井戸枠分類[12]の第２期Ｃ段階から第３期にかけてのもので、1900年代と考えられる。

6　石製品・土製品等の遺物

リタッチドフレイク(87)はＣ地区の包含層から出土した。後世の攪乱によるものと考えられる。

砥石(88)はＡ２地区から出土した。２面使用されていた。図示しなかったが砥石はＡ１地区包含層からもう１点出土しているだけで、Ｂ・Ｃ地区では出土していない。

平瓦(89)はＢ１トレンチから出土した。磨耗は激しいが布目圧痕は確認できる。流れ込みと考えられるが、当遺跡周辺には古代寺院等は確認されていない。町内にある現在の寺院は創立が不明なものもあるが16世紀以降であり、当遺跡よりも下流にある。当遺跡の上流部に何らかの瓦を使用した建物があった可能性がある。

円形加工陶磁製品(90)は山皿の底部を加工した物である。

土製品人形(91)はＡ１地区の盛土掘削中に包含層から出土した。小地区設定前であったため出土位置は不明である。

陶製ボタン(92)はＣ地区の包含層(床土)出土で、第二次大戦中の金属ボタンの代用品と考えられる。

土錘(93～103)は遺構及び包含層からの出土であるが、出土範囲はＡ２地区東部とＢ・Ｃ地区に限られる。特にＳＫ30から出土した土錘(102)は共伴する遺物から12世紀後半には陶器質の土錘が使用されていた可能性がある。

7　小結

出土した瓦器椀や山茶椀などから大和地方や東海地方との交流が裏付けられた。また、時代幅はあるものの土師器皿については京都系の皿や中北勢地域や南伊勢系の影響を受けたものなどが出土している。また、Ｂ地区の上層検出面から下層検出面までの下層包含層は中世、下層検出面の青灰色シルト層以下は古墳時代から中世までの時期に限定される。

［註］

①井戸の部分名称は、宇野孝夫「井戸考」(『史林』65－5、1982)による。
②『香良洲町史』(香良洲町、1993)　伝承ではあるが町内は古代、桃の産地であったと記述されている。
③山田猛「弥生・古墳時代の遺物」『山城遺跡・北瀬古遺跡』(三重県埋蔵文化財センター、1994)
④新田洋「三重県における古代末～中世にかけての土器様相－特に土師器についての素描－」(『マージナルNO.9』愛知考古学談話会、1988)
⑤新田洋「中南勢における中世土師器－特に「在地系」皿－の変遷と地域色解明への一視点」(出典註④と同じ)
⑥伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」(『Mie　history』Vol.1、三重歴史文化研究会、1990)
⑦倉田直純「下川遺跡」(『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター、1990)
⑧第16回中世土器研究会報告資料『京都系土師器皿の伝播と受容－平安後期を中心に－』(1997)
⑨大川勝宏「斎宮の黒色土器－供膳形態を中心に－」(『斎宮歴史博物館　研究紀要二』斎宮歴史博物館、1993)
⑩山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」(『中近世土器の基礎的研究II』1986)
⑪藤澤良祐「山茶碗と中世集落」(『尾呂』瀬戸市教育委員会、1990)
　藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」(『研究紀要第３号』三重県埋蔵文化財センター、1994)
⑫伊藤裕偉「近世以降の陶器井戸枠について」(『安濃津』三重県埋蔵文化財センター、1997)

報告番号	整理番号	種類	器種	大地区	小地区	遺構・層位		計測値（cm）				調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
						遺構	層位	口径	底径	器高	その他						
1	001-06	弥生土器	広口壺	A 2	C25・C26	SK11	暗青灰粘質土砂混	18.0	－	－	－	ヨコナデ、刺突文	密	並	明褐灰	口縁部1/12	全面マメツ進む
2	032-04	土師器	高杯	C	O45		灰白砂	－	－	－	脚径3.8	ヘラミガキ、ハケメ後脚描き横線文、しぼり痕、三方透孔	やや密	並	にぶい黄橙	脚部つけね完存	内外面マメツ進み調整不明瞭
3	002-01	土師器	甕	A 1	D9		灰白砂上面	－	－	－	頸径10.7	ヨコナデ、オサエ	やや粗	並	にぶい黄橙	頸部1/3	
4	001-07	土師器	二重口縁壺	A 1	D12	SZ12	褐色砂粘土ブロック混	16.0	－	－	－	ヨコナデ	密	並	にぶい橙	口縁部1/8	
5	001-02	土師器	壺？	A 1	D8	SD1	褐色ｼﾙﾄ砂混	16.0	－	－	－	ヨコナデ、強いヨコナデ	密	並	黄灰	口縁部1/12	
6	002-04	土師器	S字台付甕	A 2	C20		砂層上面	(14.6)	－	－	－	ヨコナデ、ハケメ	やや密	並	にぶい橙	口縁部1/8	
7	031-03	土師器	S字台付甕	C	N44		暗青灰砂質土	14.5	－	－	－	ヨコナデ、ナデ、ハケメ	やや粗	並	にぶい黄橙	口縁部1/8	外面口縁部スス付着
8	032-01	土師器	甕	C	S45	SK33	灰白砂上面淡褐色砂	16.8	－	－	－	ヨコナデ、ハケメ、工具ナデ（一部ハケメ状）	やや粗	並	にぶい黄	口縁部3/8	外面スス付着
9	004-01	土師器	S字台付甕	A 2	D24		包含層	17.2	－	－	－	ヨコナデ、オサエ、ハケメ	やや粗	並	にぶい黄橙	口縁部1/6	
10	004-03	土師器	台付甕	A 1	C9		包含層	－	6.4	－	－	ナデ、台部内面工具当たり痕	やや密	並	橙	底部ほぼ完存	マメツ進み調整不明瞭、台部内面黒変
11	003-01	土師器	S字台付甕	A 1	D11		包含層・床土	－	－	－	台径4.7	ナデ、ハケメ、工具当たり痕	やや密	並	にぶい橙	台部つけね完存	内面全体黒変
12	030-01	土師器	甕	C	Q45	旧沼地	橙灰色粘質土	18.2	－	－	－	ヨコナデ、ナデ？、ハケメ	やや密	並	浅黄橙～橙	口縁部1/4	内外面マメツ進み調整不明瞭
13	002-03	土師器	甕	A 1	D13		灰白砂上面	(13.8)	－	－	－	ヨコナデ	やや粗	並	にぶい橙	口縁部1/6	外面スス付着
14	037-04	土師器	甕	試掘（A1）	ｸﾞﾘｯﾄ2		包含層	15.7	－	－	－	ヨコナデ？、ナデ？	やや密	並	にぶい褐	口縁部1/5	内外面マメツ進み調整不明瞭
15	005-04	土師器	甕	A 1	C9		包含層	(16.6)	－	－	－	ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	にぶい黄橙	口縁部1/10	
16	004-02	土師器	高杯	A 1	C9		包含層	13.6	－	－	－	内面ヘラミガキ、外面マメツのため調整不明	密	並	橙	口縁部1/6	外面マメツ進み調整不明
17	001-05	土師器	高杯	A 2	C28	SK7	茶褐色砂	20.0	－	－	－	ヨコナデ、粗いミガキ	粗	並	にぶい橙	口縁部1/5	全面マメツ進む
18	005-02	土師器	S字台付甕	A 1	C9		包含層	－	10.7	－	－	ナデ、オサエ後ナデ	やや粗	並	にぶい黄橙	底部1/4	
19	038-01	土師器	高杯	A 2	－		表採	－	11.7	－	－	ヨコナデ	やや密	並	浅黄	底部1/6	
20	002-02	土師器	高杯	A 1	C11		灰白砂上面	－	－	－	脚径3.2	面取り風ナデ、ナデ、オサエ	やや粗	並	灰黄	脚部つけねほぼ完存	
21	032-02	土師器	高杯	C	N46		灰白砂上面	－	－	－	脚径4.1	ナデ、ケズリ	やや粗	並	外面：灰黄 内面：にぶい橙	脚部つけね完存	
22	031-04	土師器	高杯	C	G49		排水溝の底（灰白砂上面）	－	－	－	脚径2.4	調整不明	密	並	橙	脚部つけね完存	内外面マメツ激しく調整不明
23	005-01	須恵器	高杯	A 1	D7		包含層	－	－	－	脚径5.5	ロクロナデ	やや密	不良	淡黄	脚部つけね完存	外面及び杯部に削った跡あり
24	003-02	土師器	器台	A 1	D12		包含層（床土）	－	－	－	脚径2.8	ナデ、三方透孔	やや密	並	にぶい黄橙	脚部つけねほぼ完存	外面マメツ激しく調整不明
25	032-03	土師器	器台	C	N44		灰白砂上面	－	－	－	脚径3.4	ヘラミガキ、工具ナデ、三方透孔	やや密	並	にぶい黄橙	脚部つけね完存	内外面マメツ進み調整不明瞭
26	031-01	土師器	杯	C	H48	旧流路	暗青灰砂質土	12.3	－	4.8	－	ヨコナデ、ナデ？	密	並	明赤褐	全体ほぼ完存	内外面マメツ進み調整不明瞭
27	001-03	土師器	皿	A 1	D7	SD1	褐色ｼﾙﾄ砂混	－	3.8	－	－	ロクロナデ、糸切り痕、ヘラケズリ	密	並	橙	底部完存	全面マメツ進む
28	006-03	土師器	皿	A 2	D32		包含層	－	4.0	－	－	ロクロナデ、ナデ、糸切り後ナデ	やや粗	並	にぶい黄橙	底部1/4	
29	006-02	土師器	皿	A 2	D22		包含層	10.0	－	－	－	ヨコナデ、指オサエ後ナデ	密	並	にぶい黄橙	口縁部1/8	
30	001-01	土師器	皿	A 1	D8	SD1	褐色ｼﾙﾄ砂混	9.0	－	－	－	ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	内面：浅黄橙 外面：淡赤橙	口縁部1/8	全面マメツ進む
31	004-06	土師器	羽釜	A 2	E20		包含層	－	－	－	－	ヨコナデ	やや密	並	にぶい橙	小片	小片のため径復元できず.
32	031-02	陶器	椀	C	J44		暗青灰砂質土	－	6.0～7.0	－	－	ロクロナデ、貼り付けナデ、ナデ	密	良	灰白	高台部3/4	高台の付き方が楕円になっている、内面自然釉付着
33	001-04	陶器	椀	A 1	C10	SK4	褐色ｼﾙﾄ砂（ｼﾞｬｯｸ混）	－	7.4	－	－	ロクロナデ、貼り付けナデ	やや粗	良	灰白	高台部1/8	
34	028-01	陶器	椀	C	J44		床土	－	8.2	－	－	ロクロナデ、貼り付けナデ、ナデ	やや密	良	灰白	高台部1/4	内面一部自然釉付着、高台砂圧痕あり
35	034-01	青磁	椀	C	I45		落ち込み	－	－	－	－	施釉、線刻文	密	良	胎土：灰白 施釉：オリーブ灰	小片	小片のため径復元できず
36	035-01	陶器	土瓶	C	－		西排水路包含層	－	9.4	－	－	ロクロナデ、ロクロケズリ	密	良	灰白	底部1/4	外面全体スス付着
37	006-04	陶器	皿	A 1	D7		北壁	15.0	9.0	2.8	－	ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	密	良	胎土：灰白 施釉：灰白	口縁部1/8 底部1/3	
38	026-04	土師器	甕	C	K43	SK30	青灰色粘質土	(19.5)	－	－	－	ヨコナデ、ナデ、オサエ	やや粗	並	にぶい黄橙	口縁部1/8	41・42と同一個体か？
39	027-02	土師器	甕	C	K43	SK30	青灰色粘質土	(22.4)	－	－	－	ヨコナデ、ナデ、オサエ	粗	並	灰白	口縁部1/12	内外面マメツ進み調整不明瞭、外面口縁部スス付着、内面体部黒変
40	027-01	土師器	甕	C	K43	SK30	青灰色粘質土	25.2	－	－	－	ヨコナデ、ナデ、ハケメうすく残る	粗	並	にぶい橙～灰黄褐	口縁部1/9	内外面マメツ進み調整不明瞭
41	025-01	土師器	甕	C	K43	SK30	青灰色粘質土	－	－	－	－	ヨコナデ、ナデ、工具ナデ	粗	並	外面：にぶい黄橙 内面：浅黄橙	小片	小片のため径復元できず、内外面マメツ激しい
42	026-03	土師器	甕	C	K43	SK30	青灰色粘質土	－	－	－	－	ヨコナデ、ハケメうすく残る	密	並	にぶい黄橙	小片	小片のため径復元できず、外面スス付着
43	025-02	土師器	皿	C	K43	SK30	青灰色粘質土	12.0	－	－	－	ヨコナデ、ナデ、オサエ	やや密	並	外面：褐灰 内面：にぶい黄橙	口縁部1/8	外面一部黒変
44	024-01	瓦器	椀	C	K43	SK30	青灰色粘質土	14.5	－	－	－	ヨコナデ、ヘラミガキ、オサエ後ヘラミガキ、内面沈線	密	良	胎土：灰白 燃焼：オリーブ黒	口縁部1/10	内外面燃焼残り良好
45	024-04	陶器	椀	C	K43	SK30	青灰色粘質土	－	7.6	－	－	ロクロナデ、貼り付けナデ、糸切り痕	やや密	良	灰白	高台部3/8	高台全体籾殻痕あり
46	024-03	陶器	椀	C	K44	SK30	青灰色粘質土	(16.0)	－	－	－	ロクロナデ	密	良	灰白	口縁部1/8	
47	024-05	陶器	椀	C	K43	SK30	青灰色粘質土	－	7.1	－	－	ロクロナデ、貼り付けナデ、ナデ	密	良	灰白	高台部1/4	内面一部黒変
48	026-01	陶器	椀	C	K43	SK30	青灰色粘質土	－	8.0	－	－	ロクロナデ、貼り付けナデ、糸切り痕	やや密	良	灰白	高台部1/2	内面自然釉付着、内面見込み部黒変？
49	024-06	陶器	椀	C	K43	SK30	青灰色粘質土	－	7.5	－	－	ロクロナデ、貼り付けナデ、糸切り痕	密	良	灰	高台部1/4	内面自然釉付着、内面全体黒変

第９表　遺物観察表（１）　　※第15図　遺物実測図（１）と対応

報告番号	整理番号	種類	器種	大地区	小地区	遺構・層位		計測値（cm）				調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
						遺構	層位	口径	底径	器高	その他						
50	020-01	土師器	高杯	B 2	D53.54		包含層	15.9	－	－	－	ヨコナデ、ナデ	粗	並	にぶい黄橙	口縁部1/4	内外面マメツ著み調整不明瞭、５１と同一個体か？
51	020-02	土師器	高杯	B 2	D53		包含層	15.9	－	－	－	ヨコナデ、ナデ	粗	並	にぶい黄橙	口縁部1/8	５０と同一個体か？
52	023-05	土師器	高杯	B 2	－		表採	－	－	－	脚径3.3	しぼり痕、三方透孔	やや粗	並	外面：橙 内面：浅黄橙	脚部つけね完存	外面マメツ激しく調整不明
53	011-03	土師器	S字台付甕	B 1	C62・C63		青灰シルト砂混トレンチ	14.0	－	－	－	ヨコナデ、ナデ、ハケメ	やや粗	並	明褐灰	口縁部1/8弱	
54	019-06	土師器	甕	B 2	C52		包含層	－	－	－	－	ヨコナデ、ナデ、ハケメ	やや粗	並	にぶい黄橙	小片	小片のため径復元できず、口縁端部マメツ著み調整不明瞭
55	020-03	土師器	長胴甕？	B 2	D52		包含層	(25.0)	－	－	頸径(20.0)	ヨコナデ、ナデ、ハケメ、粗いハケメ	やや密	並	にぶい黄橙	口縁部わずか 頸部1/8	
56	021-01	土師器	長胴甕？	B 2	C50		包含層（明茶砂質土）	28.6	－	－	－	ヨコナデ、ナデ、ハケメ後ナデ	密	並	浅黄橙	口縁部1/8弱	
57	012-01	土師器	鍋	B 1	C63		青灰シルト砂混	23.6	－	－	体径27.4	ヨコナデ、ナデ、オサエ、ケズリ	粗	並	浅黄橙	口縁部1/6 体部1/6	トレンチ断面出土、79と同時に出土 外面全体スス付着、内面黒変
58	013-03	黒色土器	椀	B 1	C62		青灰シルト砂混	－	－	－	－	ヨコナデ、ヘラミガキ、内面沈線	密	良	黒	小片	小片のため径復元できず、内外面黒変
59	011-01	黒色土器	椀	B 1	C62・C63		青灰シルト砂混トレンチ	－	8.7	－	－	ヘラミガキ、貼り付けナデ、ナデ	密	良	外面：にぶい黄橙 内面：黒	高台部1/6	内面全体黒変
60	013-02	黒色土器	椀	B 1	C62		青灰シルト砂混	－	(8.0)	－	－	ヘラミガキ、貼り付けナデ、ナデ	密	良	外面：にぶい黄橙 内面：黒	高台部1/8	内面黒変
61	013-01	瓦器	椀	B 1	C63		青灰シルト砂混	(15.0)	－	－	－	ヘラミガキ、オサエ、内面沈線	密	良	胎土：灰白 燻焼：暗灰	口縁部1/12	内外面燻焼残り良好
62	020-04	土師器	皿	B 2	D51		包含層	(10.0)	－	－	－	ヨコナデ、ナデ、オサエ	やや密	並	外面：橙 内面：にぶい黄橙	口縁部1/8	
63	017-01	土師器	皿	B 2	B53		青灰シルト層	－	4.5	－	－	ロクロナデ、糸切り痕	密	並	にぶい橙	底部1/3	
64	014-02	灰釉陶器	椀	B 1	C62		青灰シルト砂混	－	7.9	－	－	ロクロナデ、貼り付けナデ、ロクロケズリ、施釉（灰釉）	やや密	良	灰黄	高台部3/8	
65	018-03	土師器	皿	B 2	B52		下層包含層	9.3	－	1.2	－	ナデ、オサエ	やや密	並	灰白	口縁部1/4	
66	017-07	土師器	皿	B 2	B52		青灰シルト砂混	9.8	－	2.0	－	ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	浅黄橙	口縁部1/8	
67	020-05	土師器	皿	B 2	C49		包含層	12.6	－	－	－	ヨコナデ、ナデ	密	並	浅黄橙	口縁部1/8	
68	018-04	土師器	皿	B 2	D51		下層包含層	8.0	－	1.3	－	ナデ、オサエ	やや密	並	灰白	口縁部1/4弱	
69	017-08	土師器	皿	B 2	C54		青灰シルト砂混（排水溝）	9.8	－	1.3	－	ナデ、オサエ	密	並	浅黄橙	全体1/2	
70	009-01	土師器	皿	B 1	B64	SK21	暗青灰シルト	11.8	－	－	－	ヨコナデ、ナデ、オサエ	やや密	並	灰白	口縁部1/6	
71	016-01	土師器	皿	B 2	D50		トレンチ	10.4	－	－	－	ヨコナデ	密	並	橙	口縁部1/6	
72	038-02	土師器	皿	B 2	－		表採	9.8	－	－	－	ヨコナデ、オサエ後ナデ	やや密	並	にぶい黄橙	口縁部1/5	
73	023-01	土師器	皿	B 2	－		表土除去	11.8	－	－	－	ヨコナデ、ナデ、オサエ	密	並	にぶい黄橙	口縁部1/4	
74	015-01	土師器	皿	B 1	B64		淡褐色砂質土	10.2	－	－	－	ヨコナデ、ナデ、オサエ	やや密	並	にぶい黄橙	口縁部1/5	
75	019-05	土師器	皿	B 2	D50		包含層	11.0	－	2.6	－	ヨコナデ、指オサエ後ナデ	密	並	灰白	全体1/6	
76	023-04	陶器	椀	B 2	－		表採	10.0	－	－	－	ロクロナデ	密	良	灰白	口縁部1/8	
77	010-02	陶器	椀	B 1	C61		青灰シルト層	－	5.0	－	－	ロクロナデ、貼り付けナデ、ナデ	やや密	良	灰白	高台部1/3	
78	014-01	陶器	椀	B 1	C63		青灰シルト砂混	－	6.8	－	－	ロクロナデ、貼り付けナデ、糸切り後ナデ	やや粗	並	灰白	高台部1/4	
79	012-02	陶器	椀	B 1	C63		青灰シルト砂混	－	7.0	－	－	ロクロナデ、貼り付けナデ、糸切り痕	密	良	灰白	高台部3/4	トレンチ断面出土、57と同時に出土 外面自然釉付着？
80	017-06	陶器	椀	B 2	B53		青灰シルト層	－	6.0	－	－	ロクロナデ、貼り付けナデ、糸切り痕、指頭ナデ	粗	良	灰白	高台部1/4	
81	016-04	陶器	椀	B 2	D53		トレンチ	－	6.0	－	－	ロクロナデ、貼り付けナデ、糸切り後ナデ	やや粗	良	灰白	高台部1/4強	内面少し自然釉付着、内面重ね焼き痕、高台籾殻痕あり
82	014-05	陶器	椀	B 1	C62		青灰シルト砂混	－	－	－	底径8.0	ロクロナデ、貼り付けナデ	やや粗	良	灰白	底部1/4弱	高台はかれて欠損
83	011-02	陶器	椀	B 1	C62		青灰シルト砂混トレンチ	－	6.7	－	－	ロクロナデ、貼り付けナデ、ナデ	密	良	灰白	高台部完存	内面自然釉付着
84	010-01	陶器	鉢	B 1	C62		青灰シルト層	－	17.6	－	－	ロクロナデ、工具ナデ、未調整	やや粗	良	外面：灰白 内面：暗灰黄	底部1/6	
85	018-05	陶器	天目茶椀	B 2	B52		下層包含層	－	3.9	－	－	ロクロケズリ、施釉（鉄釉）	密	良	胎土：灰白 施釉：黒褐	高台部完存	
86	040-01	陶器	井戸側（井筒）	B 1	C61	SE20		73.0～74.0	69.0～70.0	33.8	－	回転ナデ、施釉（鉄釉）	密	良	胎土：赤 施釉：赤黒～暗赤	完存	
87	032-05	石製品	ﾘﾀｯﾁﾄﾞﾌﾚｲｸ	C	P45		包含層（耕作溝３）	長1.2	幅2.25	厚0.4	重量1.1g	－	－	－	－	完存	
88	006-06	石製品	砥石	A 2	E28		包含層	長(3.8)	幅(1.9)	－	重量(10.0g)	加工痕あり	－	－	－	一部欠損	二面使用
89	016-02	瓦	平瓦	B 2	D53		トレンチ	－	－	－	－	ナデ、ケズリ、布目痕	やや粗	並	灰	一部残	
90	022-05	陶器	皿	B 2	D52		包含層	－	4.2	－	－	ロクロナデ、糸切り痕	やや粗	良	灰黄	底部完存	円形加工陶磁製品
91	008-02	土製品	人形？	A 1	－		置き土掘削中	長(5.45)	幅(3.0)	－	－	－	密	並	橙	一部欠損	
92	029-02	陶器	ボタン	C	I48		床土	径2.0～2.05	－	厚1.3	重量4.0g	施釉	密	良	胎土：灰白 施釉：オリーブ褐	完存	太平洋戦争中の金属の代用ボタンか？
93	006-05	土師質	土錘	A 2	D19		包含層	長(1.9)	幅(0.85)	孔0.3	重量(1.1g)	ナデ	やや粗	並	褐灰	一部欠損	
94	007-01	土師質	土錘	A 2	D31		包含層	長2.75	幅1.95	孔0.5	重量9.2g	ナデ	密	並	橙	完存	
95	007-02	土師質	土錘	A 2	E28		包含層	長4.6	幅1.95	孔0.65～0.75	重量(11.4g)	ナデ	やや粗	並	浅黄橙～にぶい橙	一部欠損	
96	007-03	土師質	土錘	A 2	E24		包含層	長3.75	幅1.0	孔0.4	重量(3.1g)	ナデ	密	並	にぶい黄橙	一部欠損	
97	007-04	土師質	土錘	A 2	E25		包含層	長(3.5)	幅(1.1)	孔0.45	重量(3.5g)	ナデ	密	並	にぶい橙	一部欠損	孔開け直した痕あり
98	015-02	土師質	土錘	B 1	C61		淡褐色砂質土	長(3.4)	幅(1.4)	孔0.55	重量(4.5g)	ナデ	やや密	並	灰白	一部欠損	
99	022-01	土師質	土錘	B 2	C48		包含層・明茶砂質土	長4.7	幅2.15	孔0.6	重量(14.8g)	ナデ	密	並	浅黄橙	一部欠損	
100	024-02	土師質	土錘	C	K43	SK30	青灰色粘質土	長5.3	幅1.7	孔0.5	重量(13.8g)	ナデ	密	並	にぶい黄橙	一部欠損	マメツ進む
101	028-04	土師質	土錘	C	N47		床土	長(6.35)	幅(2.65)	孔0.85～0.90	重量(34.0g)	ナデ	やや粗	並	灰白	一部欠損	全体の約半分黒変する
102	026-02	土師質	土錘	C	K43	SK30	青灰色粘質土	長8.5	幅3.0	孔1.25～1.30	重量(61.5g)	ナデ、ケズリ	やや密	並	灰黄～オリーブ灰	一部欠損	全体黒変する
103	036-05	陶質	土錘	試掘（B1）	ｸﾞﾘｯﾄ15		包含層	長7.0	幅3.5	孔1.7～1.8	重量(77.0g)	オサエ、糸切り、施釉（鉄釉）	密	良	胎土：赤褐 施釉：暗赤灰	一部欠損	

第10表　遺物観察表（２）　　※第16図　遺物実測図（２）と対応

V　結　語

1　調査のまとめ

今回の調査区は本流沿いの後背湿地及び自然堤防上に設定された、ある意味でトレンチ的な調査であった。遺構密度や出土遺物量は決して多いとはいえないが、当町内初めての発掘調査であり、弥生時代後期以降の人々の生活の一端を垣間見ることができたといえる。

少なくとも今回の調査区では、縄文時代の遺構・遺物等は確認できなかった。縄文海進頂期以降の海退期に現在の沖積地が形成されてきたことを再確認できた。

A・C地区における標高0.2～0.5mの検出面(灰白色砂)の形成は弥生時代後期以降であることが確認できた。検出面より上層の標高0.3～0.5mまでに堆積しているシルト(粘質土)層及びシルト砂混(砂質土)層は古墳時代から12世紀後半までに堆積した層であると考えられる。B地区に関してもほぼ同じで、上層の遺構検出面である標高1m前後の褐色砂質土層は近世までに堆積したものだと考えられる。

遺構については、溝・土坑のみで住居跡は検出できなかった。A・C地区は古墳時代以降現在まで後背湿地のため居住には適していなかったためと考えられる。

しかし、単なる流れ込みとは考えにくい遺物もあることから、近くに集落が存在したことは想像に難くない。

集落の推定地としては、現在の香海中学校を中心とする標高約3mの字西山及び標高約2mの字地家垣内にある地家集落の自然堤防上が有力である。

地家集落は、中世以降の当町域における最初の集落として成立したとされており、推定地ながら、矢野氏の中世城館があったとされている。また、字西山、字永田の分布調査では弥生時代から中世に至る遺物が表採されていることからも集落が存在している可能性は高いと考えられる。残念ながら、字地家垣内の分布調査では、最近の盛土や宅地化が進んでいたため、表採できた遺物は非常に少なく、土師器の小片が多かった。当町の歴史解明のためにも今後大規模な開発に際しては事前の調査が望まれる。

2　A2地区上層の溝について

第18図に示したように、A2地区上層(旧耕作土直下)で溝状の遺構が検出された。

調査中は水田暗渠として認識していた。しかし、調査後、農業技術(水田)の専門家である磯島義一氏に検討していただいたところ、以下のようなご教示を得た。(文責齋藤直樹)

「水田の暗渠と考えるには以下の点から考えると疑問がある。」

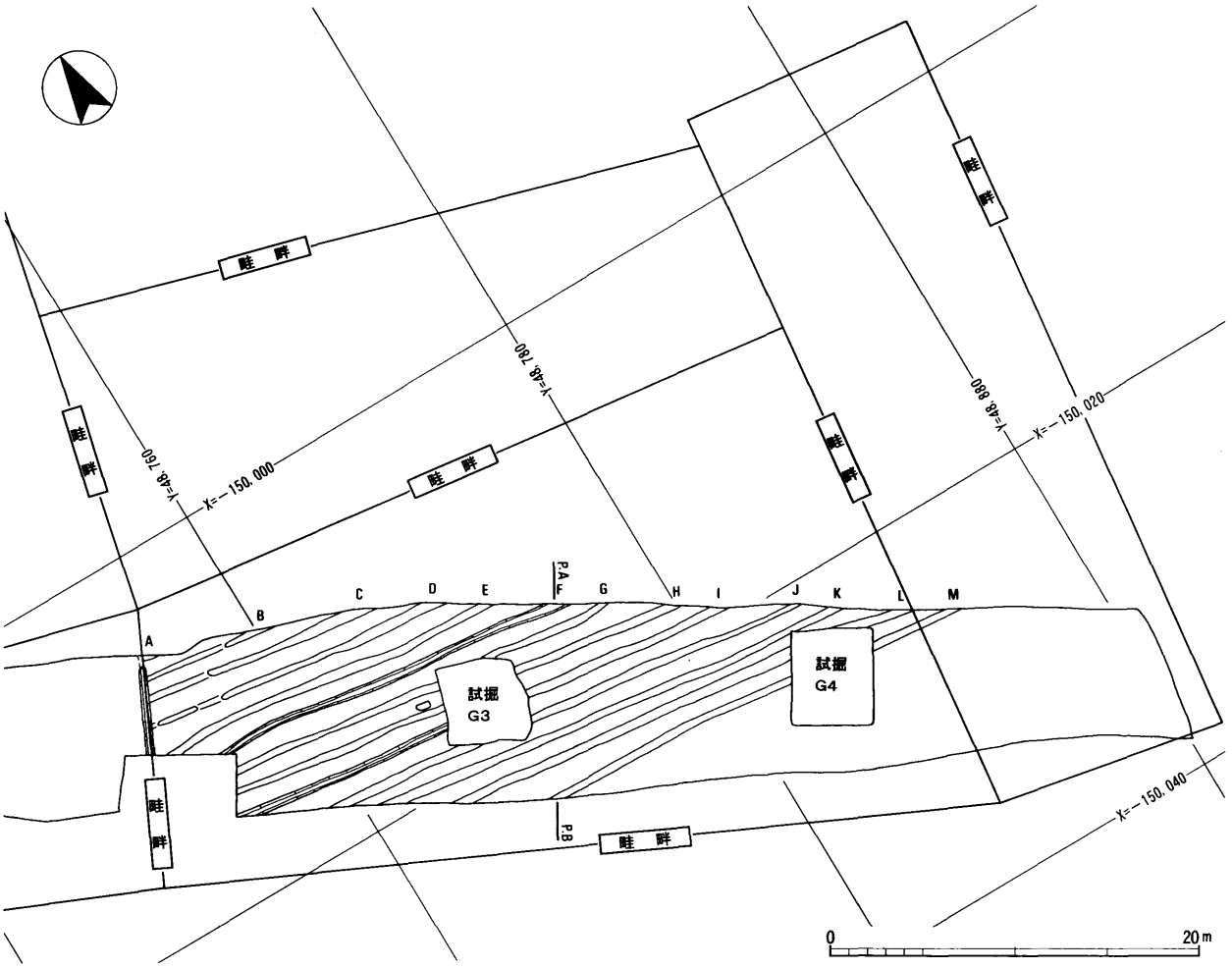
① 本来水田の暗渠は、膝までつかるような湿田において、必要最小限設置するものである。例えば、水が噴き出すような地点のみ暗渠を施して、乾かすものである。現在でも暗渠の間隔を広くとるのは、暗渠の設置に費用がかかるためである。通常、溝と溝の間隔は5～10mである。経済効率から考えても、本数が多すぎる。

② 溝の深さが、幅に比べて浅すぎる。これでは、旧水田面を耕して苗を植えるときに溝の底を突き抜けてしまう。また、砂の暗渠は見たことがない。

③ 暗渠とすれば、当然「落し口(おとしくち)(排水路)」があるはずであるが、検出されていない。ただし、現在南側にある堤防が近世以前に構築されていなかったと想定すると、南側の雲出川に向かって、排水路があってもおかしくはない。

検出されていないということだが、もし排水を流すのであれば、自分の水田の畦畔の内側に浅い排水路を掘削すれば、田面はかなり乾燥し、使いやすくなると考えられる。

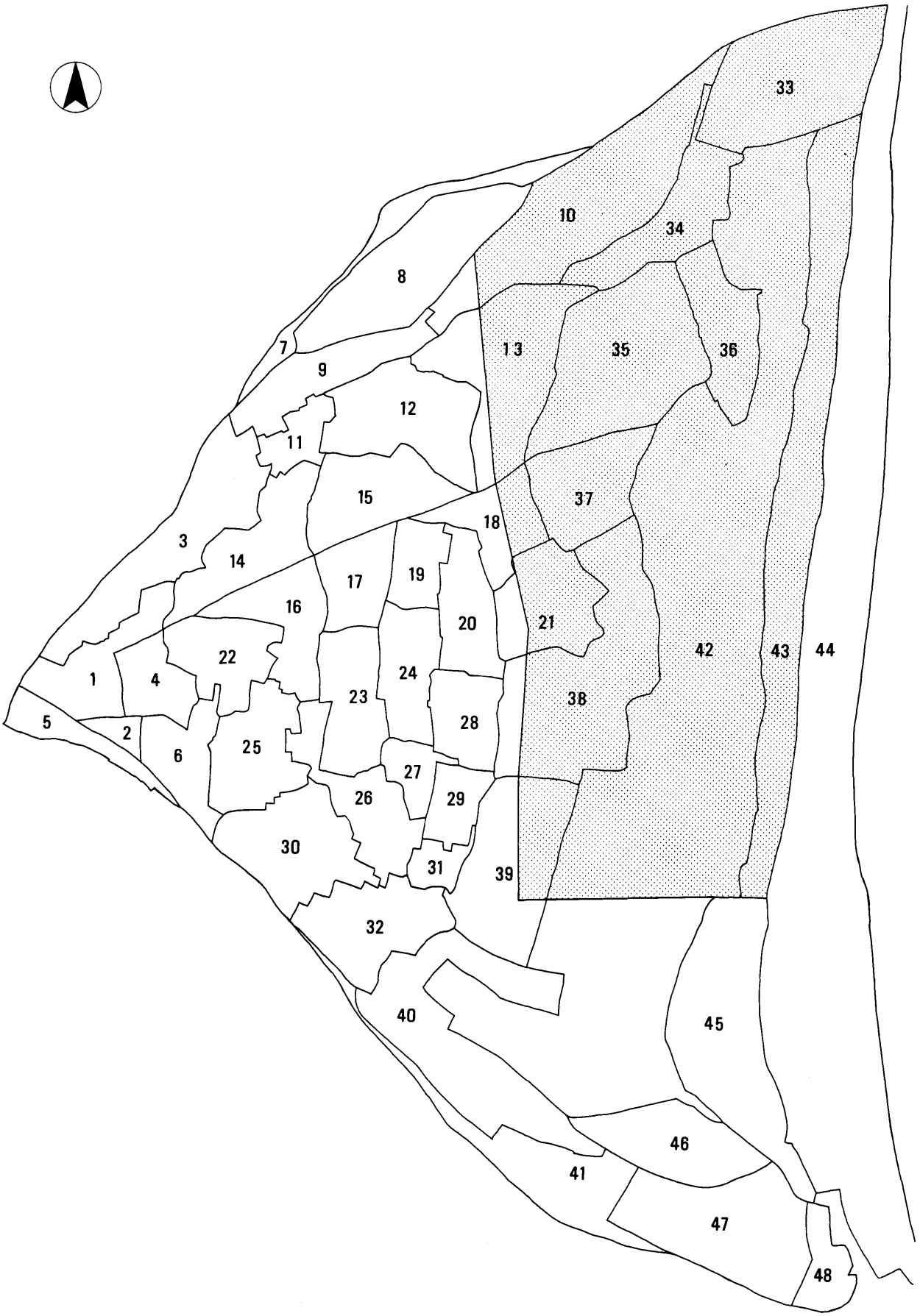
④ これだけの暗渠システムであれば、本来周辺にもないとおかしい。つまり一枚の水田だけこのような暗渠を施しても、周辺の水田が高ければ、暗渠としての機能が発揮できない。水田は一枚の水田だけでは成り立たない。周囲の水田と一体のシステムである。もちろん、水田システムを稼働さ



第17図　A２地区上層遺構平面図（１：４００）

No.	字名	旧字名	備考	No.	字名	旧字名	備考
1	西ノ宮	西ノ宮、天王		27	観音堂	観音堂、貝塚	
2	花垣内	花垣外		28	砂原垣内	砂原	
2	西山	西山		29	東山垣内	東山	
4	天伯	天白、山神戸		30	馬場垣内	馬場	
5	前川新畑	前川新畑		31	井ノ松	井ノ松	
6	エバグチ	下馬口、下馬屋敷		32	五反田	五反田	
7	北林跡	北山、林跡		33	北新田	北新田、北郷	
8	辰新田	辰新田		34	北川	北川	新開地に全部編入
9	川原新起	川原新畑		35	稲葉	井倉、明神後	新開地に全部編入
10	川新田	川新田	新開地に部分編入	36	中釜	釜ノ土井、北釜、四ツ辻	新開地に全部編入
11	川原垣内	川原		37	小塩屋	小塩屋	新開地に全部編入
12	野中	コベノ内、野中		38	浜浦	長池、砂ノ浦	新開地に部分編入
13	若宮	若宮、奥出	新開地に部分編入	39	中タダラ	中タタラ	新開地に部分編入
14	永田	永田、山の腰		40	前ノ洲	前ノ洲	
15	北八反田	八反田		41	林跡	林跡	
16	北浦	北浦、寺脇		42	大新田	江尻田、江子畑、砂畑、稲子場、鵜塚、宮ノ西、高塚、石塚	新開地に部分編入
17	南八反田	道薩神					
18	圦ノ口	圦ノ口	新開地に部分編入	43	高砂	黒松、砂原新田、後砂原	新開地に全部編入
19	小ノ西	小ノ西		44	海面高砂	高砂	
20	小松垣内	小松		45	山添	宮ノ内	
21	小ノ東	橋ノ下、川田	新開地に部分編入	46	南新田	エビス	
22	中世古	御墓、地神		47	宮新田	宮新田	
23	堀田	堀田		48	川口垣内	川口	
24	砂ノ西	砂ノ西		※	新開地	小塩屋、高砂、北川、稲葉、中釜、（浜浦、小ノ東、圦ノ口、若宮、川新田、中タダラ、大新田）	軍用地（旧三重航空隊）の町移管が完了し、新たに字名を設定
25	地家垣内	地家、中門、西出					
26	東浦	東浦					

第11表　矢野村字名一覧　　※番号は第18図　矢野村字切図（復元）と対応



第18図　矢野村字切図（復元）　※スケールアウト　網点は字新開地

せる人間側のシステムも重要である。

以上の点から、この溝の機能は、暗渠以外のものを考えてもよいと思われる。例えば、塩田。しかし、現在の海岸(河口)から約２キロも離れているという条件は弱い面でもあるが、船で海水を運べば、塩田としての機能は果たせる。

一つの仮定ではあるが、香良洲神社や明治初頭の神社合祀まで調査区近くにあったとされる天王社に関係があり、奉納する特別な塩を生産していたのではないだろうか。地元の記録や伝承をさらに調査することが必要である。

また、今後の低湿地の調査でこのような類例が増加することに期待したい。

3　矢野村（現香良洲町）の字名と塩田について

第19図は町役場に保管されている1891(明治24)年８月作成の「旧公図①」の縮図(約1:6,000。当時の矢野村を３枚に分割して収めている。)を合成して、再トレースしたものに、現在の字新開地②を重ねたものである。字界などはっきりしない部分は、現在の公図と『矢野村地図』を参考に復元した。

『矢野村地図』の作成は「旧公図」よりも早く、1884(明治17)年に作成されている。

現在、土地の地番表示に使用されている字名とその字界は、第19図に示した明治24年ころとは大きく異なっている。その原因は、昭和初期に町内北東部の水田地帯を埋め立てて建設された旧海軍の三重航空隊の用地取得、戦後にその用地が返還されたときに字新開地が設定されたこと、中央部水田地帯のほ場整備での字界の変更などが考えられる。

今回、第19図に復元した字の中には、町史にもふれられている近世の塩生産③に関係すると考えられる「字小塩屋」・「字中釜」がある。推定地の現状は工業団地や宅地となっている。「旧公図」によれば、「字小塩屋」「字中釜」とも地目のほとんどが畑となっているのに対し、それらの周辺は「字大新田」で、地目のほとんどは水田である。

「字大新田」の旧地形は海岸に平行する砂堆内陸側の後背湿地であり、塩田に適していたものと考えられる。「字小塩屋」「字中釜」は畑であることから自然堤防もしくは砂堆の一部であったと考えられる。

三重航空隊の用地建設地には、香良洲沖合の海底の砂を使って約２ｍの埋め立てが行われたそうである。したがって、地下には塩生産に関係する遺構が保存されている可能性が非常に高いと考えられる。

［註］

①香良洲町教育委員会並びに香良洲町役場のご理解とご協力を得て、「旧公図」および現在の「公図」、『矢野村地図』、『矢野村地誌』、『香良洲町郷土史』などを閲覧させていただいた。

『矢野村地図』は箱蓋の裏書きによると全51枚(附録２、字切図48、矢野村地縮図１)であるが、現状は(1998年12月)、字永田及び矢野村地縮図の計２枚が欠けている。

『矢野村地誌』は表紙に明治21年編纂と書いてあるが、香良洲町史では明治25年とされている。別に編集されたものが存在するのかもしれない。現在町に保管されているものは表紙のみで裏表紙がなく、なくなっている可能性もある。

②三重航空隊跡地のうち、北部が1963(昭和38)年、南部が1964(昭和39)年に町移管が完了し、この地区を併合して字新開地と改称した。

③香良洲町内での塩の生産等に関しては下記の文献を参考にした。

『香良洲町史』（香良洲町教育委員会、1993）

後藤溥『ふるさと香良洲の歴史』、1981

Ⅵ　附　編

1．香良洲西山遺跡の地形発達と堆積環境の変遷について

パリノ・サーヴェイ株式会社

1　はじめに

香良洲西山遺跡(三重県一志郡香良洲町所在)は、平成９年度雲出川改修にともない発掘調査された遺跡で、雲出川河口に形成された三角州の先端部分(標高２m)に立地する。発掘調査の結果、標高０m付近の砂・シルト層から中世の土師器鍋や山茶椀などが出土した。今回の分析調査では、遺物が出土した層位やその上下の堆積層の堆積環境を検討することを目的として、珪藻分析を実施する。

2　試料

試料を採取した場所は、Ｂ１トレンチ断面とＢ２トレンチ断面である。前者では６層(上位より１層～６層)に、後者では７層(上位より７層～13層)に分層されている。各トレンチ断面における層相変化を、以下に述べる。

Ｂ１トレンチは、１層が青灰色シルト、２層が砂混じり青灰色シルト、３層が砂混じり暗青灰色シルト、４層がシルト混じり青灰色砂、５層が暗青灰色シルト、６層が灰白色砂である。

Ｂ２トレンチでは、７層が青灰色シルト、８層が砂混じり青灰色シルト、９層が暗青灰色シルト、10層が青灰色シルト、11層がシルト混じり青灰色砂、12層が砂混じり青灰色シルト、13層が暗青灰色砂である。

珪藻分析試料として、Ｂ１トレンチでは１層(試料番号１)、2層～3層(試料番号2)、5層(試料番号3)、６層(試料番号４)、Ｂ２トレンチでは７層(試料番号１)、８層(試料番号2)、９層(試料番号３)、11層(試料番号４)の計８点を選択した(第19･20図)。

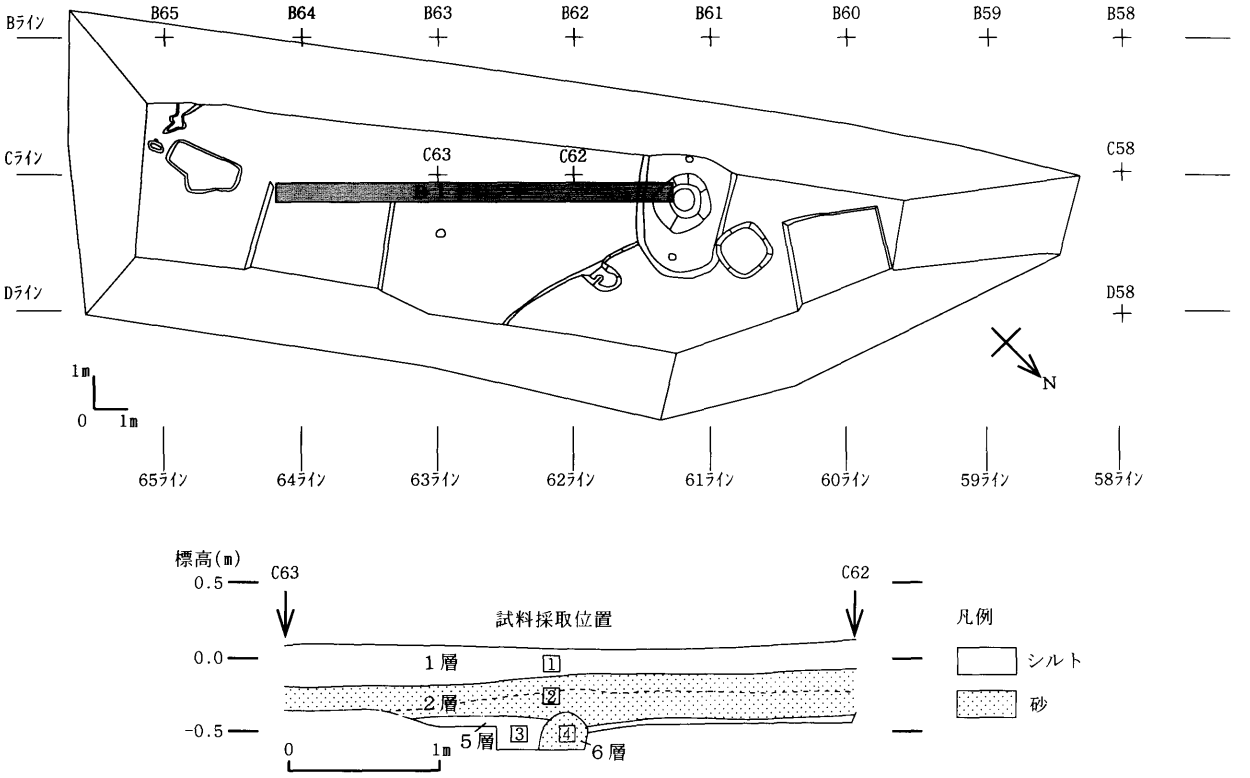
3　分析方法

試料を湿重で７ｇ前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に、200個体以上同定・計数する。種の同定は、K.Krammer and Lange－Bertalot(1986・1988・1991a・1991b)、K.Krammer(1992)などを用いる。

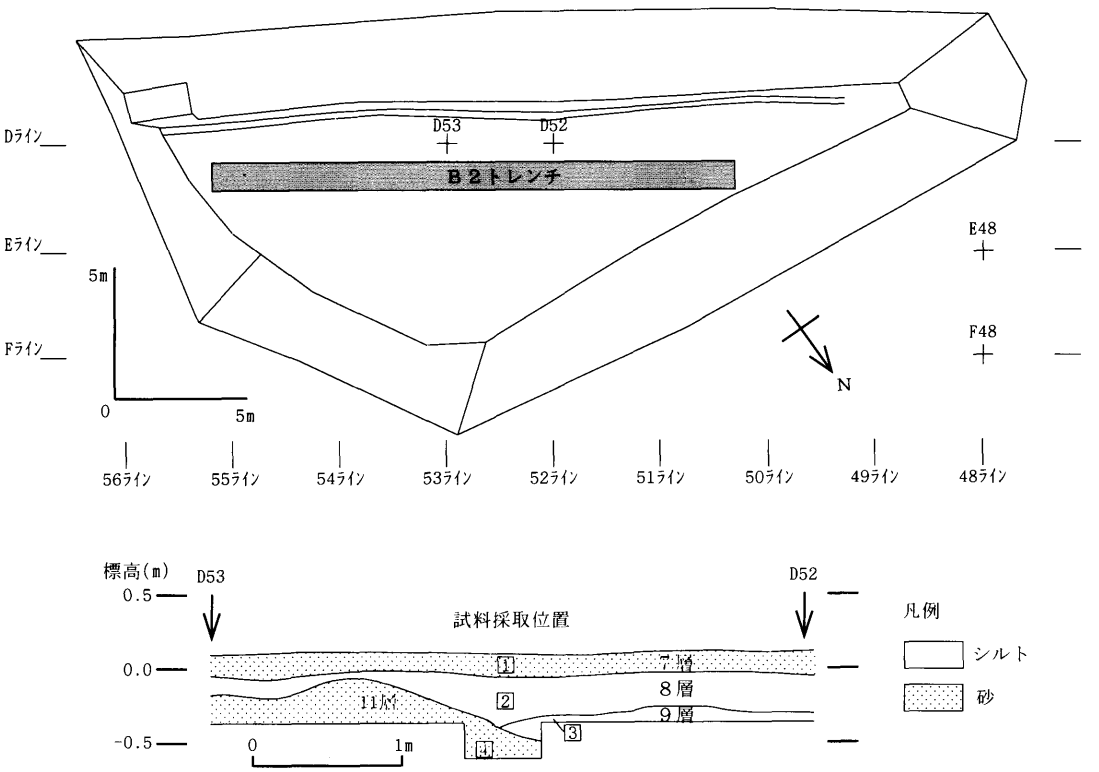
同定結果は、海水生種、海水～汽水生種、淡水生種順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(ｐＨ)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種については、その内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率2％以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出した化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求め考察の際に参考にした。堆積環境の解析にあたって、海生種については小杉(1988)、淡水生種については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性については、Asai,K.&,Watanabe,T.(1995)の環境指標種を参考とする。

4　結果

結果を第12･13表・第21図に示す。Ｂ１トレンチは、試料番号１・４、Ｂ２トレンチでは試料番号１・４から珪藻化石が産出したが、それ以外の４試料では８～35個体と少ない。また、完形殻の出現率も50～20％と低い。産出分類群数は、合計で32属118分



第19図　Ｂ１トレンチの断面図及び試料採取位置



第20図　Ｂ２トレンチの断面図及び試料採取位置

類群である。以下に、産出種の特徴を述べる。

＜Ｂ１トレンチ＞

試料番号４は、海水生種から汽水生種と淡水生種が、それぞれ50％づつ産出する。特徴は、海水～汽水生種の*Cyclotella striata*、*Diploneis interrupta* が10％と多産し、海水付着性の*Diploneis suborbicularis*、海水～汽水生で付着性の*Diploneis smithii*、*D. smithii var. pumila*、汽水付着性の*Nitzschia granulata*、*Pseudopodosira kosugii* を伴う。

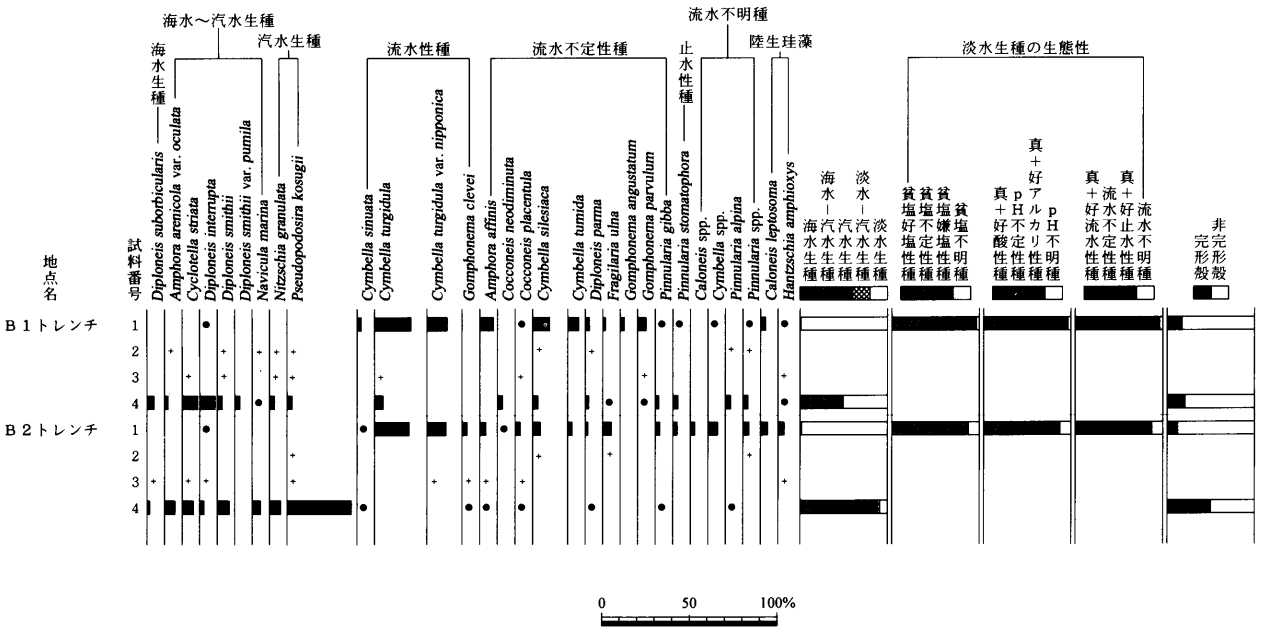
このうち*Diploneis suborbicularis* は、海水泥質干潟指標種群(小杉，1988)の一種、*Cyclotella striata* は、内湾指標種群(小杉，1988)の一種、*Diploneis smithii*、*D. smithii var. pumila* は、汽水泥質干潟指標種群(小杉，1988)、*Nitzschia granulata* は、海水泥質干潟指標種群(小杉，1988)の一種でもある。淡水生種は、流水性の*Cymbella turgidula* などを伴う。

試料番号１は、淡水生種が大部分を占め、真・好流水性種(川などの流水域に生育するもの)と流水不定性種(流水域～止水域まで生育するもの)の多産が特徴である。産出種の特徴は、流水性の*Cymbella turgidula* が約20％と優占し、その変種で同じ生態性の*Cymbella turgidula var. nipponica*、流水不定性の*Amphora affinis*、*Cymbella silesiaca*、*C. tumida*、*Gomphonema parvulum* などを伴う。このうち*Cymbella turgidula* は、中～下流性河川指標種群(安藤，1990)の一種でもある。

珪藻化石が少なかった試料番号３・２は、前記したような淡水生種と海～汽水生種とが混在している。

＜Ｂ２トレンチ＞

試料番号４は、海水生種から汽水生種までの合計が約90％と優占する。特徴は、汽水生で付着性の*Pseudopodosira kosugii* が約40％と優占し、海水～汽水生種で付着性の*Amphora arenicola var. oculata*、海水～汽水生種で浮遊性の*Cyclotella striata*、海水～汽水生で付着性の*Diploneis smithii*、*Navicula marina*、汽水付着性の*Nitzschia granulata* などを伴う。このうち*Pseudopodosira kosugii* は、汽水化した塩性湿地などの主に泥に付着生育する種で、汽水泥質干潟の環境を指標する標徴種(小杉，1988)とされ、これまで*Melosira sp. n* として報告されてきた種である。



第21図　主要珪藻化石群集

海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は１％未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

試料番号１は、Ｂ１トレンチの試料番号１とほぼ同様の種類が産出し、消長も近似している。流水性の*Cymbella turgidula* が約20％と優占し、その変種の*Cymbella turgidula var.nipponica* などが多産することを特徴とする。珪藻化石の少なかった試料番号３・２は、前記したような淡水生種と海～汽水生種とが混在している。

5　考察

（１）堆積環境の変遷

今回の珪藻分析結果をもとに、各トレンチ別に堆積環境の変遷について述べる。

＜Ｂ１トレンチ＞

Ｂ１トレンチの６層（試料番号４）は、内湾指標種群や干潟指標種群を含む海水～汽水生種が多産すること、中～下流性河川指標種群を含む流水性種が産出することから、内湾水に流水の流れ込みのあるような干潟に堆積したとみられる。５層（試料番号３）や２層（試料番号２）は、珪藻化石の産出が少なく、本地点付近が珪藻の生育に適さない環境に変化したと考えられる。すなわち、干潟は後退し、大潮などの時に冠水する潮上帯のような場所に変化したと考えられる。１層（試料番号１）は、河川中～下流部や河川沿いの河成段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現する中～下流性河川指標種群（安藤，1990）が多産することから、河川の氾濫の影響を受けるような場所になったとみられる。すなわち、この時期には海水の影響はまったくなくなり、三角州が成立したと考えられる。このことは、僅かながらも、陸生珪藻が１層で検出されていることからも示唆される。

＜Ｂ２トレンチ＞

Ｂ２トレンチにおいても、Ｂ１トレンチとほぼ同様の変化がみられた。ただし、最下位の11層（試料番号４）は、汽水泥質干潟指標種や海水泥質干潟などの干潟指標種が優占し、内湾指標種群を多産したが、淡水生種の比率がＢ１トレンチより低いことから、同じ干潟でもＢ１トレンチ６層より河川水の影響が少なかったとみられる。これが、地形条件や時代・時期差によるものとみられるが、今のところ詳しいことはわからない。今後、さらに周辺の調査を進めたい。

なお、９層以浅の堆積環境の変化は、Ｂ１トレンチとほぼ同様であったと考えられる。

（２）三角州の発達と環境変遷

以上のことより、Ｂ１トレンチの灰色砂の６層（試料番号４）と、Ｂ２トレンチのシルト混じり青灰色砂の11層（試料番号４）はほぼ対比され、ともに干潟に堆積したとみられる。ただし、河川水の影響が両トレンチで異なっていたらしいが、それが地形的要因によるものなのか時期的要因によるものか、現時点ではよく分からない。周辺の調査の進展に期待したい。

その上部には、両トレンチとも珪藻化石の産出が少ない暗青色シルトの５層（試料番号３）や砂混じり青灰色シルトの２層（試料番号２）、暗青灰色シルトの９層（試料番号３）や青灰色シルトの８層（試料番号２）が堆積する。これらの層では珪藻化石が少なかったことから、本地点付近が珪藻の生育に適さない環境に変化したと考えられる。すなわち、干潟は後退し、大潮などの時に冠水する潮上帯のような場所に変化したと考えられ、当時本遺跡は基本的に離水していたと考えられる。

最上部のＢ１トレンチの青灰色シルトの１層（試料番号１）やＢ２トレンチの砂混じり青灰色シルトの７層（試料番号１）になると、中～下流性河川指標種群含む流水性種が多産するように群集が変化することから、遺跡周辺は雲出川の氾濫による堆積物によって覆われたと考えられる。すなわち、この時期には海水の影響はまったくなくなり、この時点より三角州が発達しはじめたと考えられ、現在みられる雲出川河口付近の三角州の原型になった。このことは、遺構・遺物が両層より検出されるようになることと、調和的である。その時代は、Ｂ１トレンチの１層と２層に挟まれて中世の土師器鍋や山茶椀などが出土していることから、中世頃と考えられる。

種類	生態性			環境指標種	B1トレンチ				B2トレンチ			
	塩分	pH	流水		1	2	3	4	1	2	3	4
Diploneis litoralis (Donk.)Cleve	Euh				-	-	-	-	-	-	-	2
Diploneis suborbicularis (Greg.)Cleve	Euh			E1	-	-	-	4	-	-	1	3
Eunotogramma laeve Grunow	Euh				-	1	-	-	-	-	-	1
Navicula granulata Bailey	Euh				-	-	-	-	-	-	-	1
Thalassionema nitzschioides (Grun.)Grunow	Euh			A,B	-	-	-	2	-	-	3	-
Thalassiosira oestrupii (Osten.)Proskina-Lavrenko	Euh			A	-	-	-	1	-	-	-	-
Amphora arenicola var. oculata Cleve	Euh-Meh				-	3	-	2	-	-	-	12
Cocconeis scutellum Ehrenberg	Euh-Meh			C1	-	-	-	2	-	-	-	-
Cyclotella striata (Kuetz.)Grunow	Euh-Meh			B	-	-	2	9	-	-	5	13
Cyclotella striata-C. stylorum	Euh-Meh			B	-	2	1	2	-	-	1	3
Diploneis interrupta (Kuetz.)Cleve	Euh-Meh				1	-	-	9	1	-	3	5
Diploneis smithii (Breb.)Cleve	Euh-Meh			E2	-	2	1	3	-	-	-	14
Diploneis smithii var. pumila (Grun.)Hustedt	Euh-Meh			E2	-	-	-	3	-	-	-	-
Diploneis smithii var. rhombica Mereschkowsky	Euh-Meh				-	-	-	1	-	-	-	-
Navicula formenterae Cleve	Euh-Meh				-	-	-	-	-	-	-	4
Navicula marina Ralfs	Euh-Meh			E2	-	4	-	1	-	-	-	10
Navicula spp.	Euh-Meh				-	-	-	-	-	-	-	3
Rhaphoneis surirella (Ehr.)Grunow	Euh-Meh			D1	-	3	2	-	-	-	-	1
Achnanthes brevipes Agardh	Meh			D1	-	-	-	1	-	-	-	1
Achnanthes brevipes var. intermedia (Kuetz.)Cleve	Meh			D1	-	-	-	1	-	-	-	2
Achnanthes haukiana Grunow	Meh			D1	-	-	1	-	-	-	-	1
Caloneis permagna (Bailey)Cleve	Meh				-	-	-	-	-	-	-	1
Cocconeis disculoides Hustedt	Meh				-	-	-	1	-	-	-	-
Diploneis pseudovalis Hustedt	Meh				-	-	-	-	-	-	-	3
Fragilaria fasciculata (Agardh)Lange-B.	Meh				-	-	-	-	-	-	-	2
Navicula yarrensis Grunow	Meh				-	2	-	1	-	-	1	4
Nitzschia cocconeiformis Grunow	Meh			E1	-	2	-	-	-	-	2	-
Nitzschia granulata Grunow	Meh			E1	-	6	1	3	-	-	-	13
Opephora martyi Heribaud	Meh			D1	-	-	-	-	-	-	-	1
Pseudopodosira kosugii Tanimura et Sato	Meh				-	1	3	3	-	1	2	75
Rhopalodia musculus (Kuetz.)O.Muller	Meh				-	-	-	2	-	-	-	-
Synedra pulchella Kuetzing	Meh				-	-	-	-	-	-	-	1
Synedra tabulata Agardh	Meh				-	-	-	-	1	-	-	-
Terpsionoe americana (Bail.)Ralfs	Meh				-	-	-	-	-	-	-	2
Thalassiosira lacustris (Grun.)Hasle	Meh				-	1	-	-	-	-	-	-
Unknown-1	Meh				1	-	-	-	-	-	-	1
Amphora fontinalis Hustedt	Ogh-Meh	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	4
Fragilaria brevistriata Grunow	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	1
Hantzschia distincte-punctata (Hust.)Hustedt	Ogh-Meh	al-il	l-bi		-	-	-	-	-	-	-	1
Navicula pusilla W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind		-	1	-	-	-	1	-	1
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		1	-	-	-	2	-	-	-
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	-	-	2	1	1	1	2	-
Achnanthes inflata (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1	-	-	-	-	-	-	-
Achnanthes lanceolata (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	-	-	1
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	16	-	-	-	7	-	1	2
Aulacoseira granulata (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	-	-	-	-	-	-	-	1
Aulacoseira italica (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	1	-	-	-	-	-
Caloneis bacillum (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	1	-	-	-	-
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	6	-	-	-	8	-	-	-
Caloneis silicula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		3	-	-	-	1	-	-	-
Caloneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	5	-	-	-
Cocconeis neodiminuta Krammer	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	3	1	-	-	-
Cocconeis placentula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	1	-	6	-	1	1
Cocconeis placentula var. euglypta (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	1	-	-	-	-
Cocconeis placentula var. lineata (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	-	1	-	-	-
Craticula cuspidata (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	-	-	1	-	-	-
Cymbella amphioxys (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	ind	l-ph		-	-	-	1	1	-	-	-
Cymbella mesiana Cholnoky	Ogh-ind	al-bi	l-bi	O	1	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella naviculiformis Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	2	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	20	1	-	3	9	1	-	-
Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	5	-	-	-	2	-	-	1
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	13	-	-	-	5	-	-	-
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	43	-	1	5	40	-	-	-
Cymbella turgidula var. nipponica Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	24	-	-	-	22	-	1	-
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	-	11	-	-	-
Diatoma hyemale var. mesodon (Ehr.)Kirchner	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	-	-	-	-	1	-	-	-
Diatomella balfouriana (W.Smith)Grevil	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	1	-	1	-
Diploneis ovalis (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		2	-	-	2	-	-	-	3
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind		5	1	-	2	3	-	-	1
Diploneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	2	-	-	-	-
Epithemia adnata (Kuetz.)Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind		1	-	-	-	1	-	-	-
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	1	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria capucina var. radians (Kuetz.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	3	-	-	-
Fragilaria construens fo. venter (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	-	-	-	-	-	-	-	1
Fragilaria ulna (Nitzsch)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		3	-	-	1	10	1	-	-
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	-	-	2	2	-	-	-
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	2	-	-	1	1	-	-	-
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	5	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	al-bi	r-ph	T	-	-	-	-	5	-	1	1
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	3	-	-	-	2	-	-	-
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	10	-	1	1	-	-	-	-
Gomphonema quadripunctatum (Oestrup.)Wislouch	Ogh-ind	al-bi	r-ph	K,T	-	-	-	-	1	-	-	-
Gomphonema sumatorense Fricke	Ogh-ind	ind	r-bi	J	-	-	-	-	1	-	-	-
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	1	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	2	-	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	1	-	1	1	7	-	2	-
Navicula confervacea (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB,S	1	-	-	-	-	-	-	-
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.)Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	1	-	-	-	-
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	3	-	-	1	2	-	1	-
Navicula radiosa fo. nipponica Skvortzow	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	1	-	-
Navicula viridula (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	-	-	-	1	-	-	-	-
Navicula viridula var. linearis Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	1	-	-	-
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	1	-	1	-	-
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		1	-	-	1	2	-	-	-
Neidium iridis (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	-	-	-	-	1	-	-	-
Neidium spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	-

第12表　珪藻分析結果表（1）

種類	生態性			環境指標種	B1トレンチ				B2トレンチ			
	塩分	pH	流水		1	2	3	4	1	2	3	4
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	-	-	-	-	-	-	1	-
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	2	-	-	-	1	-	-	-
Pinnularia alpina W.Smith	Ogh-hob	ac-il	unk		-	4	-	3	-	-	-	1
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	1	-	1	1
Pinnularia borealis var. scalaris (Ehr.)Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	-	-	3	-
Pinnularia braunii (Grun.)Cleve	Ogh-hob	ac-bi	l-ph		-	-	-	2	-	-	-	-
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		1	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia divergens W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	2	-	-	2	5	-	-	1
Pinnularia gibba var. dissimilis H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	ind		1	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia imperatrix Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-	-	-	2	-	-	-
Pinnularia macilenta (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	1	-	-	-
Pinnularia microstauron (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	-	-	-	1	1	-	-	-
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	1	-	-	-	1	-	-	-
Pinnularia pisciculus Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	1	-	-	-	-
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	1	-	-	-	-
Pinnularia similis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	1	-	-	-
Pinnularia stomatophora (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph		2	-	-	3	5	-	-	-
Pinnularia subnodosa Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	1	2	-	-	-
Pinnularia sudetica (Hilse)M.Peragallo	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia viridiformis Krammer	Ogh-ind	ind	ind		1	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	3	-	-	1	2	-	-	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	1	-	3	7	1	-	-
Rhoicosphenia abbreviata (Ag.)Lange-B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K,T	1	-	-	-	-	-	-	1
Rhopalodia gibba (Ehr.)O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	-	-	-	-	-	-
Rhopalodia quisumbirgiana Skvortzow	Ogh-hil	al-il	ind		1	-	-	-	-	-	-	-
Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	1	-	-	1	1	-	-	-
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	1	-	-	-	-	-	1	2
Stauroneis phoenicenteron fo. gracilis (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	ind	l-ph	O	1	-	-	-	-	-	-	-
Stauroneis phoenicenteron var. hattorii Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	1	-	-	-	1	-	-	-
Tabellaria flocculosa (Roth)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	-	-	1	1	-	-	-	-
海水生種合計					0	1	0	7	0	0	4	7
海水－汽水生種合計					1	14	6	32	1	0	9	65
汽水生種合計					1	12	5	12	1	1	5	107
淡水－汽水生種合計					1	1	0	0	2	1	0	7
淡水生種合計					204	7	8	52	198	6	16	18
珪藻化石総数					207	35	19	103	202	8	34	204

凡例

H.R.:塩分濃度に対する適応性
- Euh :海水生種
- Euh-Meh:海水生種-汽水生種
- Meh :汽水生種
- Ogh-Meh:淡水生種-汽水生種
- Ogh-hil:貧塩好塩性種
- Ogh-ind:貧塩不定性種
- Ogh-hob:貧塩嫌塩性種
- Ogh-unk:貧塩不明種

pH:水素イオン濃度に対する適応性
- al-bi:真アルカリ性種
- al-il:好アルカリ性種
- ind :pH不定性種
- ac-il:好酸性種
- ac-bi:真酸性種
- unk :pH不明種

C.R.:流水に対する適応性
- l-bi:真止水性種
- l-ph:好止水性種
- ind :流水不定性種
- r-ph:好流水性種
- r-bi:真流水性種
- unk :流水不明種

環境指標種
- A:外洋指標種 B:内湾指標種 C1:海水藻場指標種 D1:海水砂質干潟指標種
- E1:海水泥質干潟指標種 E2:汽水泥質干潟指標種（以上は小杉, 1988）
- J:上流性河川指標種 K:中～下流性河川指標種 M:湖沼浮遊性種
- O:沼沢湿地付着生種（以上は安藤, 1990）
- S:好汚濁性種 U:広適応性種 T:好清水性種（以上はAsai,K. & Watanabe,T.1995）
- R:陸生珪藻（RA:A群,RB:B群,RI:未区分陸生珪藻、伊藤・堀内, 1991）

第13表 珪藻分析結果表（2）

引用文献

安藤一男(1990)淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, p.73－88.

Asai,K. and Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species in to Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35－47.

伊藤良永・堀内誠示(1991)陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p.23－45.

小杉正人(1988)珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p.1－20.

Krammer, K.(1992)PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26. p.1－353. BERLIN・STUTTGART.

Krammer, K. and Lange－Bertalot, H.(1986)Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange－Bertalot, H.(1988)Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange－Bertalot, H.(1991a)Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales,Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange－Bertalot, H.(1991b)Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae)und Gomphonema. Band 2/4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.

2　香良洲西山遺跡付近の地形環境

青木　哲哉（立命館大学非常勤講師）

1　はじめに

人間は、自然環境に影響され、またこれを利用しながら生活してきた。中でも、地形は人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活とは密接な関係にあると考えられる。地形環境は、第四紀の間変化を続け、現在に至っている。人間は、時代とともに進展する自らの生活を、移り変わる地形環境に巧みに対応させ、また時にはこれを改変することがあった。こうした点からみて、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期ごとの地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、従来の地形発達研究でなされてきた数千年オーダーでの考察だけでなく、より細かいオーダーで究明されなければならない。これには、遺跡の発掘調査地区における地形・地質学的な調査が有効な手段となる。発掘調査地区では、微地形や堆積物などが直接観察できる。このため、微地形の有様や堆積物の詳細な区分および連続性が明らかにでき、細かいオーダーで地形環境を復原することが可能となる。

発掘調査地区では、こうして明らかになった地形環境の時期がより詳しく解明できる。発掘調査地区では、地層の堆積時期や微地形の形成時期を考察することが、各地層から出土した遺物の編年を通じてなしうる。また、地質断面が直接観察できるため、^{14}C年代測定用のサンプルが容易に採取できる。細かいオーダーで復原された地形環境が、考古遺物や^{14}C年代測定などによって、どの時期のものかを捉えられるのである。

さらに、発掘によって人間生活の痕跡である遺構が検出される。このため、調査地区における過去の人間生活を克明に知り得る。遺跡の発掘調査地区では、過去の地形環境と人間生活の両者が明らかになり、数多くの調査区を取り扱うことで、比較的広範囲における両者の関わり合いについて考察できるのである。

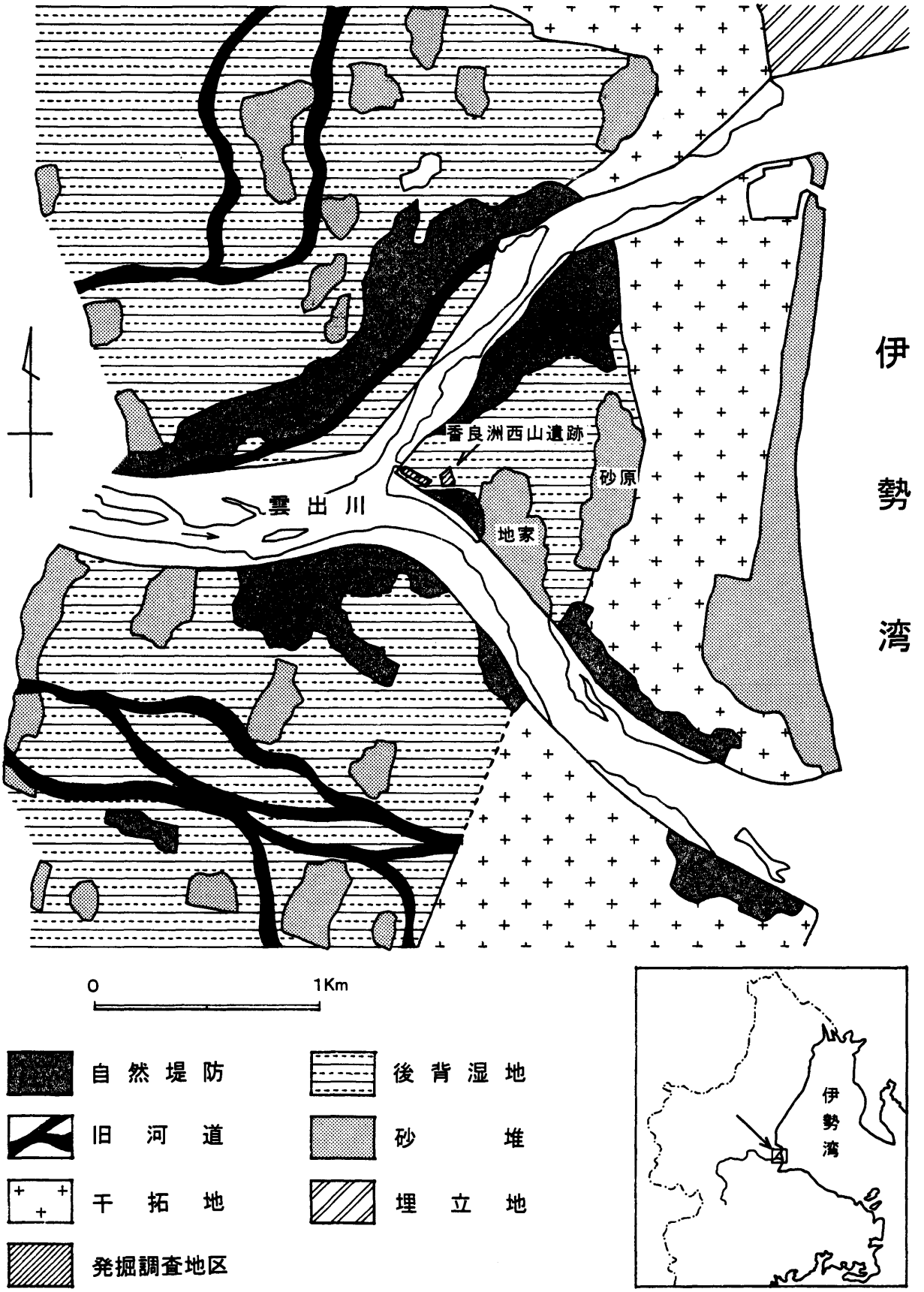
今回、以上の観点から香良洲西山遺跡で地形環境の調査を行った。本稿では、その結果を報告したい。調査では、①2万分の1および5,000分の1空中写真の判読と現地観察に基づいて、遺跡付近における地形の様相を検討、②遺跡周辺で実施されたボーリング資料の分析、③遺跡の発掘調査地区における地質断面の観察を行った。さらに、これらの調査結果に考古学の発掘成果などを加味して、遺跡付近の地形環境を考察した。

2　遺跡付近の地形について

香良洲西山遺跡は、伊勢平野の中部を東流する雲出川の最下流部に位置する。雲出川は、下流部において比較的広い面積をもつ沖積平野を形成し、その周辺には数面の段丘が分布している。沖積平野の北側にみられる段丘は、雲出川水系に発達する段丘のうち、最も広範囲に発達するもので、中位段丘に相当する。沖積平野とは比高約5mの崖で接し、段丘面には1～2m程度の緩やかな起伏がみられる。現在、面上には久居の市街地が立地している。雲出川下流沖積平野の南側には、これより低い低位段丘が分布する。沖積平野とは、比高約2～3mの段丘崖で接する。この段丘面は下流方向へ高度をさげ、嬉野町付近で沖積平野下に埋没する。

雲出川下流部の沖積平野は、東西約12km、南北およそ3kmと東西に細長い。この平野は、大きく自然堤防帯と三角州帯に分けられる。自然堤防帯に相当するのは、雲出川下流沖積平野の西部～中央部である。ここは、沖積平野の形成が開始された約2万年前から現在まで、一度も海に没したことがない。現在、自然堤防帯には自然堤防と後背湿地などの微地形が分布する。

一方、三角州帯は伊勢湾に近い沖積平野の東部に広がる。約6,000年前といわれる縄文海進頂期に海



第22図　香良洲西山遺跡付近の地形分類図

域となり、その後三角州の発達によって陸化したところである。三角州帯には、2種類の微高地がみられる。ひとつは、河川の氾濫によって形成された自然堤防で、他のひとつが沿岸流など海の営力によってつくられた砂堆である。これらは断続的に分布し、そこには現集落や畑などがみられる。自然堤防は、おおむね河川の流下方向である東西に、また砂堆は海岸線に平行する南北方向に細長い。

このうち砂堆に関しては、三角州帯のほぼ全域に散在している。これらは、断続的ながら3列以上の列をなし、それぞれの間隔が大きい。これは、雲出川の土砂流出量および侵食力が、比較的大きいことに起因すると考えられる。縄文海進頂期以降、雲出川によって大量の土砂が海域に運び込まれ、海岸線が海方へ移動した。移動する海岸線付近には、順次砂堆が形成され、これらはその後雲出川の侵食によって、断続的に残ったのである。なお、現海岸線に沿っては、近世以降の新田開発にともなう干拓地が分布する。

雲出川は、こうした沖積平野を曲流し、最下流部で2本の流路に分流する。香良洲西山遺跡は、三角州帯に属するこの分流地点の東側に位置している。遺跡付近には砂堆、自然堤防および後背湿地が認められる（第22図）。このうち遺跡付近の砂堆は、発掘調査地区の南西側と東側にみられる。前者には、前田町屋遺跡が立地し、古墳時代初頭や奈良時代、鎌倉・室町時代の遺構・遺物が検出されている[①]。また、これに連続する1.5km北方の砂堆には、宮間戸遺跡が存在し、ここでは弥生時代後期と古墳時代後期の遺物や、鎌倉時代の遺構・遺物がみられる[②]。後者の砂堆は2列平行してみられ、その上には現在地家ならびに砂原の集落がのる。

これらの砂堆間に存在する香良洲西山遺跡は、自然堤防から後背湿地にかけて立地し、Ａ１・２地区とＣ地区は後背湿地に、またＢ１・２地区は自然堤防に位置する。現在、自然堤防上には80cm～1.5mの盛土がなされ、後背湿地より約1.7m高い。一方、後背湿地は海抜高度50～70cm程度で、極めて低平である。

3　遺跡周辺と発掘調査地区の堆積物

(1) 遺跡周辺の沖積層

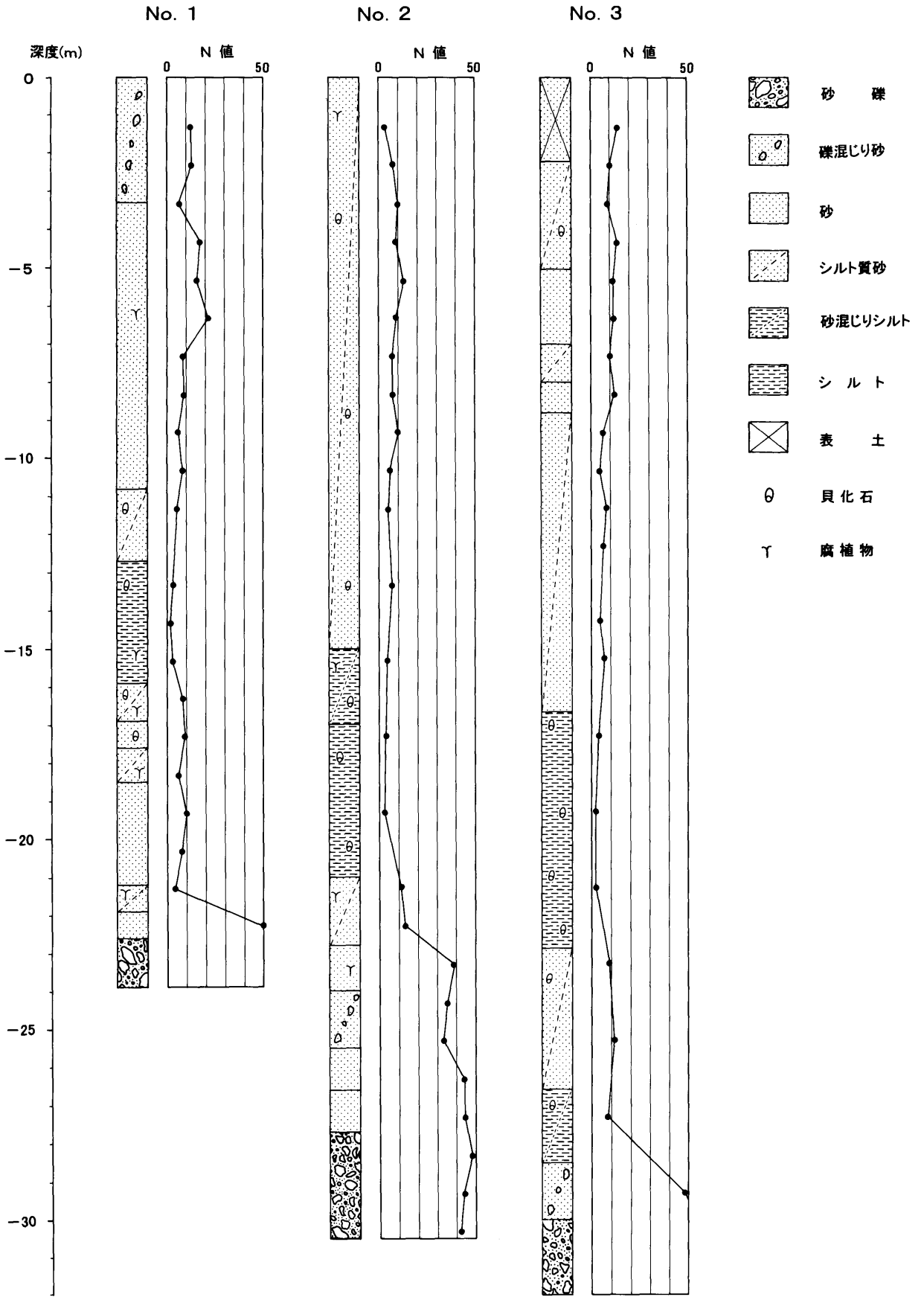
香良洲西山遺跡は、沖積平野の三角州帯に位置する。この付近のボーリング資料（第23図）を検討すると、沖積平野を構成する沖積層は、Ｎ値40～50以上のよく締まった砂礫層の上に堆積している。この砂礫層は広義の沖積層基底礫層と呼ばれ、わが国における多くの沖積平野下で認められる。同層は、約3万年前に堆積したとされ、その上面には顕著な谷地形がみられる。

この谷地形は、海面変化と深く関わって形成された。海面は、約2万年前の最終氷期最寒冷期にいたる間に低下した。谷地形は、それにともなう河川の侵食作用によって形成されたのである。雲出川下流沖積平野が位置する伊勢平野の場合、約2万年前の海岸線は伊勢湾の入口付近にあったといわれ、現在の伊勢湾は陸地であった。伊勢平野を流れる各河川は、それぞれ谷地形をつくり、やがてこれらの谷は合流して旧海岸線へとのびていた。当時の雲出川は、こうした谷底を流下していたのである。第23図に示したボーリング資料は、現在の雲出川最下流部において、その後この谷地形の中に堆積した沖積層を表している。

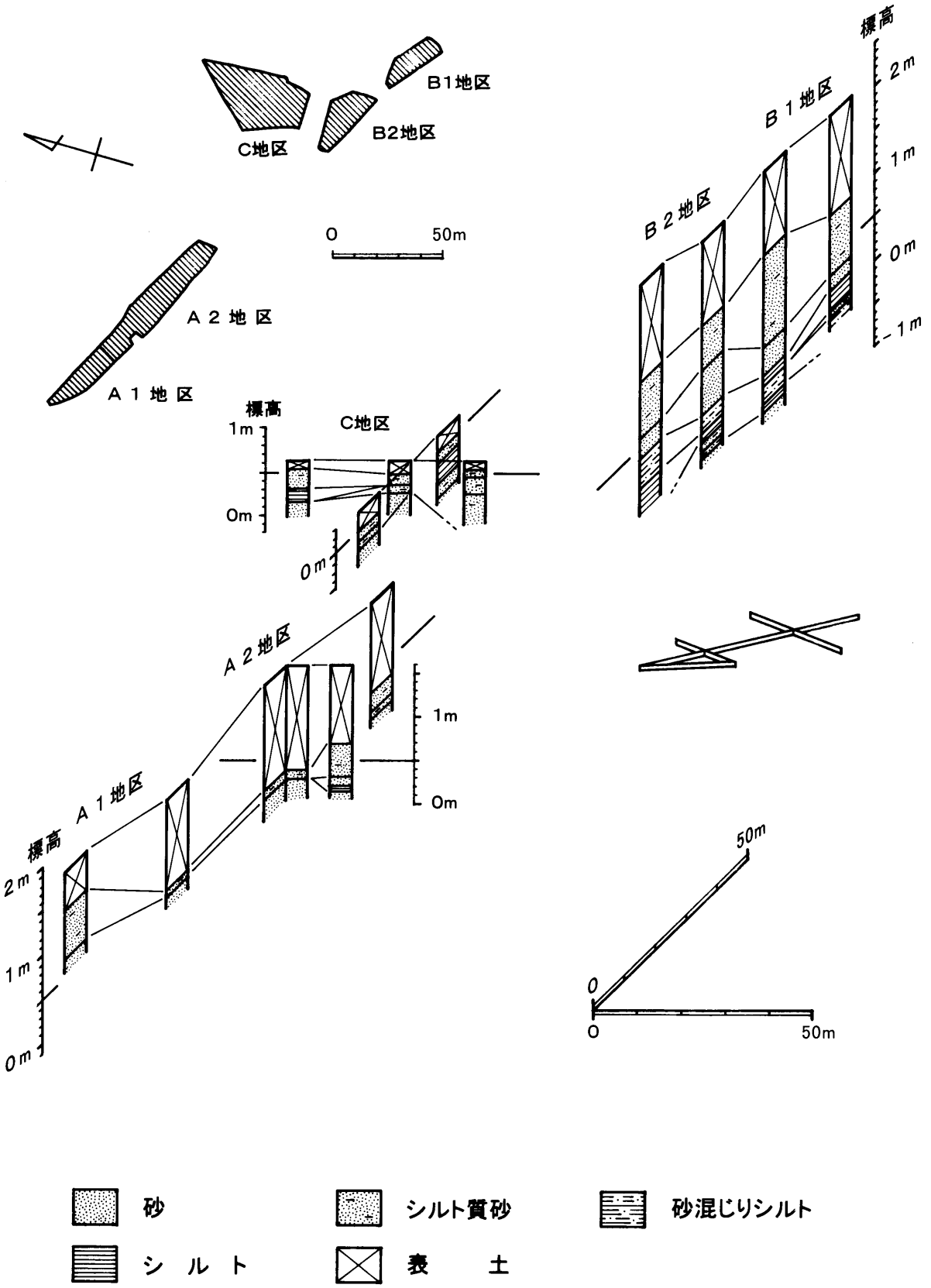
雲出川下流沖積平野の三角州帯における沖積層は、4つの層に細分される。下位のものから順に下部砂層、中部泥層、上部砂層および沖積陸成層で、Ｎ値30以下の比較的軟弱な堆積物である。これらの層が堆積することによって、沖積平野は形成されてきたのであり、各層を詳細に検討すれば、沖積平野形成時の堆積環境が知られる。

4つの層のうち、中部泥層は粘土やシルト、砂混じりシルトなどからなり、遺跡のNo.1ボーリング資料では深度約12.7～15.9m付近に認められる。層中には貝化石が多数混入することから、海成の堆積物であると考えられる。この層は、一般に8,000～6,000年前の^{14}Ｃ年代測定値を示すことが多く、縄文海進にともなって海底に堆積した層とされる。縄文海進頂期にあたる約6,000年前、雲出川下流沖積平野の三角州帯は海域となり、旧海岸線は現在より3～4km内陸まで後退していたと考えられる。

上部砂層は、砂またはシルト質砂からなる。No.1ボーリング資料では、深度10.8m以浅にみられる厚



第23図　香良州西山遺跡付近のボーリング資料



第24図　香良州西山遺跡における堆積物

い層で、貝化石を含む。この層は、三角州前置層に相当し、縄文海進頂期以降の海退期に堆積したものである。雲出川が、海退する海にこの層を搬出した結果、三角州が形成されるとともに、雲出川の最下流部は急速に陸化していったと考えられる。

沖積陸成層は、礫混じり砂や砂混じりシルトなどからなる。比較的粗粒な堆積物から細粒なものまで、堆積物の粒径はバラエティーに富む。この層は断続的に分布し、厚さ1.8m以下と薄い。上部砂層の堆積によって三角州が形成された後、それを薄く被覆した洪水堆積物と考えられる。

(2) 発掘調査地区における堆積物

香良洲西山遺跡のA～C地区で観察される堆積物は、その特徴からみて、基本的に6つに区分される（第24図）。すなわち、下位から順に灰白色の砂、青灰色の砂混じりシルトとシルト質砂、青灰色のシルト、灰褐色の砂、褐色のシルト質砂、ならびに表土である。本稿では、これらをⅠ～Ⅵ層と呼ぶことにする。

Ⅰ層である灰白色の砂は、A１・２地区とC地区で観察される。厚さが40cm以上あり、これらの地区では極めてよく連続する。Ⅰ層の上面からは、古墳時代前期の遺物が出土するとともに、A２地区では主に弥生時代後期～古墳時代前期の遺構が検出される。このことは、Ⅰ層が弥生時代後期までに堆積したことを物語る。なお、B１・２地区では、最下位で灰白～暗青灰色砂の上部が部分的に観察される。A１・２地区とC地区にみられるⅠ層は、この砂に連続する可能性が高い。珪藻分析によれば、この堆積物からは内湾指標種群や干潟指標種群を含む海水～汽水生種が多産し、中～下流性河川指標種群を含む流水性種が産出する。このことから、砂は内湾水に流水の流れ込みのあるような干潟に堆積したと考えられている。[3]

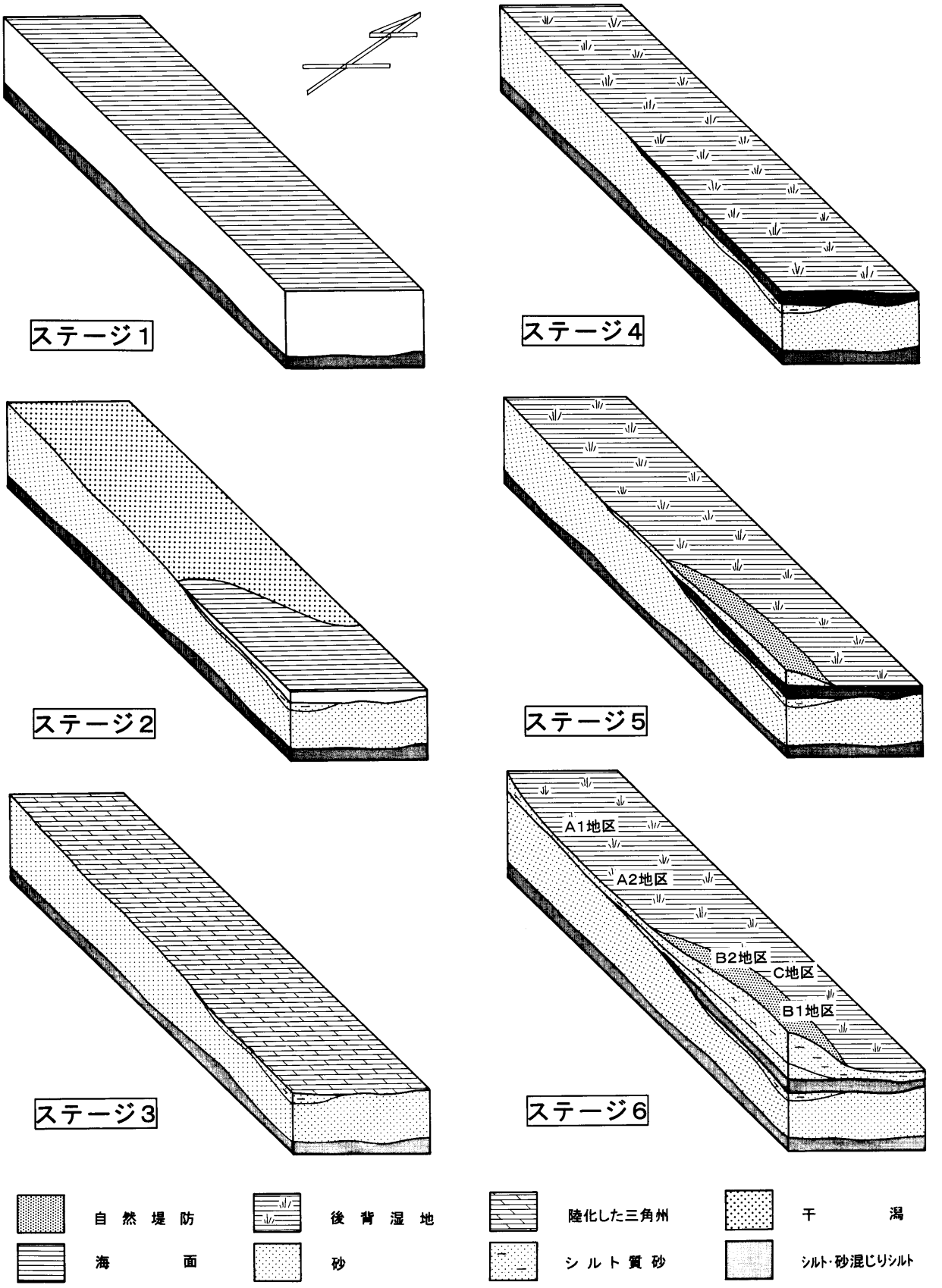
Ⅱ層は、青灰色の砂混じりシルトとその上位に位置する青灰色のシルト質砂である。これらは、B２地区でのみ認められる。このうち、上位のシルト質砂には、汽水泥質干潟指標群や海水泥質干潟などの干潟指標種が優占し、内湾指標種群も多く含まれる。これは、この堆積物が干潟に堆積したことを示している。[4]

Ⅲ層の青灰色を呈するシルトは、A２地区とB１・２地区、C地区でみられる。A２地区におけるⅢ層は、南西部を中心に認められ、厚さが最大で約30cmと比較的薄い。B１・２地区では、Ⅲ層が60cm以上の厚さをもち、細かくみれば2～3つの堆積物に分けられる。B１地区では、下位から暗青灰色のシルト、青灰色を呈する砂混じりシルトおよびシルトに、B２地区では青灰色シルトの上位に、青灰色の砂混じりシルトがみられる。このうち、両地区の最上位に位置するシルトならびに砂混じりシルトは、中～下流性河川指標種群が多産する[5]堆積物であり、洪水によって堆積したと判断される。また、B１地区における砂混じりシルトには、12～13世紀の遺物が混入しており、これより下位の堆積物がこの時期以前にもたらされたことを示す。

C地区では、Ⅲ層が青灰～淡灰褐色のシルト質砂と、その上位に位置する橙灰色のシルトに細分される。C地区の中央部には、Ⅰ層の砂がおよそ50cmの高まりをなしてほぼ南北にのびる。青灰～淡灰褐色のシルト質砂は、この高まりの西側および北東側の低所に認められる。他方、橙灰色のシルトは、高まりの東側に存在する低所をさらに埋積している。中でも、青灰～淡灰褐色のシルト質砂には、砂の中にシルトの細かいレンズが多数観察され、洪水流によって堆積した様相を呈する。

Ⅳ層にあたる灰褐色の砂は、B地区を中心に形成された自然堤防の堆積物と考えられ、A２地区とB１・２地区で認められる。粗～細砂からなる淘汰のあまりよくない砂であり、河成堆積物の特徴を示す。A２地区においては、明橙色を呈しており、鉄分が付着している。厚さが15cm以下と薄く、主にA２地区の南部にみられる。これに対して、下流側に位置するB１・２地区では、Ⅳ層が最大で48cmの厚さをもつ。B地区全域に連続的に分布し、A２地区と比べて上面が約40cm高い。B１・２地区では、Ⅳ層中に12～13世紀の遺物が含まれている。下位のⅢ層（青灰色の砂混じりシルト）にも同時期の遺物が混入していることからみて、Ⅳ層の砂は12～13世紀のある時期に堆積したと考えられる。

Ⅴ層である褐色のシルト質砂も、B地区を中心に分布する自然堤防の堆積物である。A～C地区の全



第25図　香良州西山遺跡付近における模式的な地形環境

域に存在し、上面はＢ１・２地区において比高約90cmの高まりをなす。厚さは、Ａ１・２地区で平均およそ20cm、Ｃ地区では10cm前後で薄いものの、Ｂ１・２地区では30cm～1mの厚さをもつ。堆積物中には、中世～近世の遺物が混入しており、自然堤防は近世に入ってからの洪水によって、さらに発達したと考えられる。

4　遺跡付近の地形環境

以上までに述べた地形・堆積物などの特徴から、香良洲西山遺跡付近の地形環境は、次のように変遷したと考察できる（第25図）。

【ステージ１】およそ6,000年前の縄文海進頂期、この遺跡周辺には海域が広がっていた。海岸線は、現在より3～4km内陸に位置し、海底にはシルトを中心とする細粒堆積物（中部泥層）が沈積した。

【ステージ２】縄文海進頂期を過ぎると、海面が低下し、古雲出川によって砂（上部砂層）が海域に搬出された。雲出川下流平野の三角州帯では、砂の堆積によって三角州が発達し、陸化が進んでいった。やがて海岸線は、弥生時代後期以前に遺跡付近まで前進した。この時期、遺跡付近は干潟となり、砂（Ｉ層）が堆積した。Ｂ１・２地区では、その後も干潟の状況が続き、砂混じりシルトとシルト質砂（II層）が堆積した。

【ステージ３】弥生時代後期までに海岸線はさらに前進し、遺跡付近は陸化した。この時期から古墳時代前期に至るまでは、洪水の発生しない安定した環境がつづいた。こうした環境下で、弥生時代後期や古墳時代前期には人間の活動がなされた。

【ステージ４】古墳時代前期から12～13世紀にかけては、洪水が数回および、低所が埋積された。Ｂ１・２地区では、シルトや砂混じりシルトが堆積し、またＣ地区ではまずシルト質砂が、つづく洪水でＡ２地区とＣ地区にシルトの堆積がなされた。こうして12～13世紀までには、遺跡付近に後背湿地的な環境が現出した。

【ステージ５】12～13世紀には、遺跡付近で洪水が発生し、Ａ２地区およびＢ１・２地区に砂が堆積した。その結果、Ｂ１・２地区を中心とする範囲に、自然堤防が形成された。その後江戸時代になるまで、遺跡付近には洪水がおよばなかったものの、自然堤防上では顕著な人間生活はなされなかった。

【ステージ６】江戸時代になると、洪水によってシルト質砂が遺跡付近を覆った。Ｂ１・２地区には、特に厚くシルト質砂が堆積したため、自然堤防はさらに発達した。現在の遺跡付近における地形環境は、おおむね江戸時代に形成されたものである。

5　おわりに

香良洲西山遺跡は、雲出川下流沖積平野の三角州帯に位置する。この付近の地形環境は、　弥生時代後期以前における干潟の現出とその後の陸化、　古墳時代前期以降12～13世紀にかけての後背湿地化、12～13世紀から江戸時代における自然堤防の形成へと変遷した。その間の弥生時代後期～古墳時代前期には、遺跡付近に洪水がおよばない安定した環境が訪れた。本遺跡におけるこの時期の人間活動は、こうした環境下でなされたのである。

今後は、雲出川下流平野における人間生活と地形環境の関わりをより克明にするために、周辺遺跡における地形環境を調査・考察することが望まれる。

［註］

① 前田町屋遺跡（第２次）（『平成９年度三重県埋蔵文化財年報９』、三重県埋蔵文化財センター、1998）

② 中村信裕「宮間戸遺跡発掘調査報告」（『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』、三重県教育委員会、1983）

③ パリノ・サーヴェイ株式会社「香良洲西山遺跡の地形発達と堆積環境の変遷について」（『平成10年度雲出川改修香良洲地区埋蔵文化財発掘調査（香良洲西山遺跡）にかかる珪藻分析業務依託報告』、1998）

④ 前掲書③

⑤ 前掲書③

写真図版 1

調査前遺跡遠景（西上空から　1997年 4 月撮影）

写真図版 2

調査前遺跡遠景 （北上空から　1997年 4 月撮影）

A 1 地区全景 （東から）

A 2 地区全景 （西から）

B 1 地区全景 （西から）

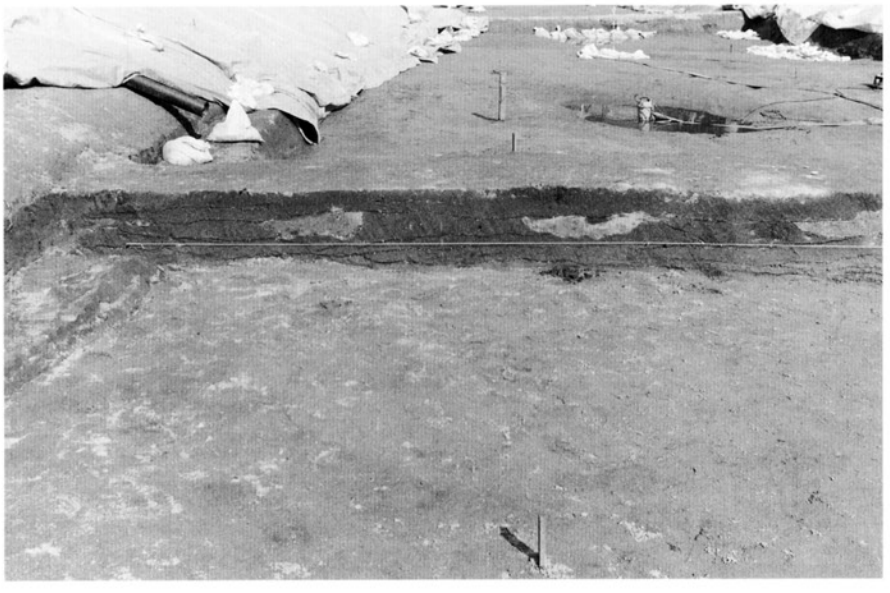
写真図版 4

Ｂ２地区上層遺構面全景 （西から）

Ｃ地区全景 （南から）

ＳＫ11（北から）

ＳＤ12（南から）

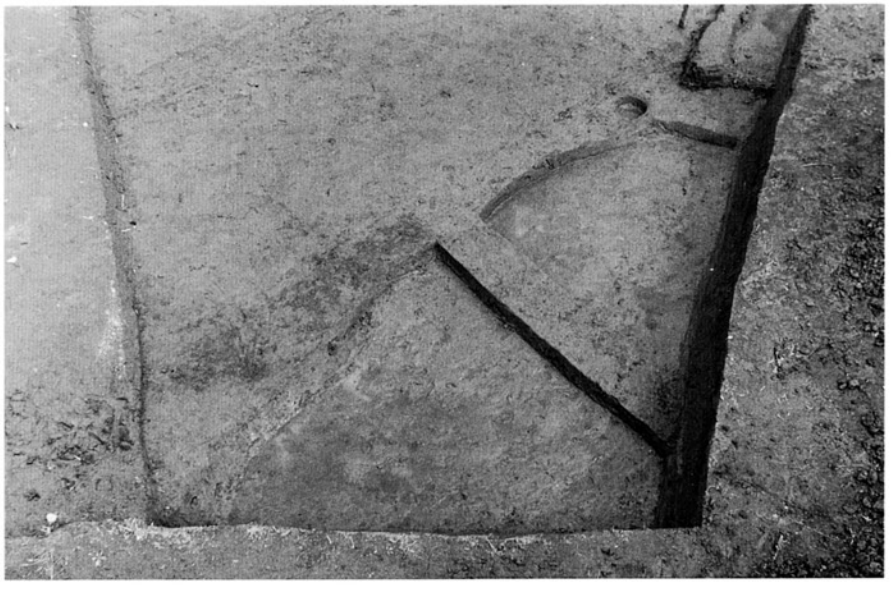


Ａ２地区横断土層
Ｅ24付近（西から）

写真図版６

Ｂ１地区南壁土層
Ｃ63付近（北から）

Ｂ２地区下層全景
B2トレンチ掘削後（西から）



ＳＫ３０（西から）

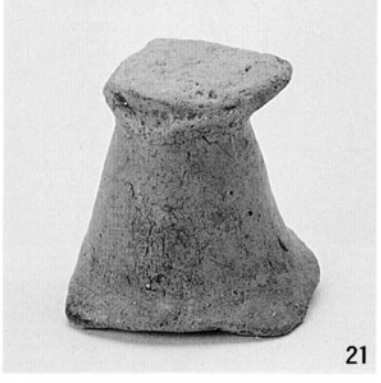
旧流路 （南東から）

旧沼地 （南東から）

旧流路内遺物出土状況
（土師器杯26）

写真図版 8

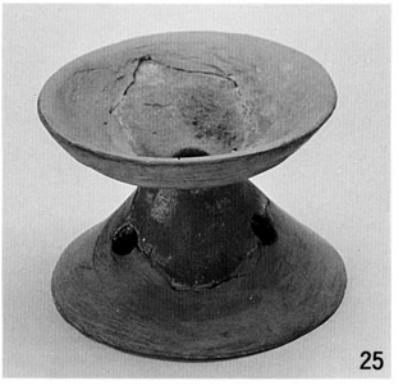
2

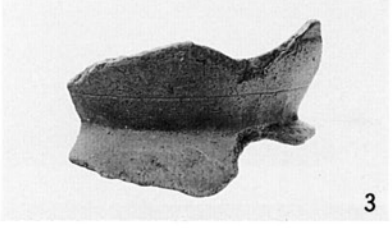

21

20

23

24

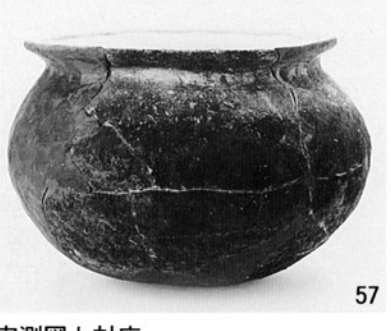

25


3

8

11

12


57

26

65

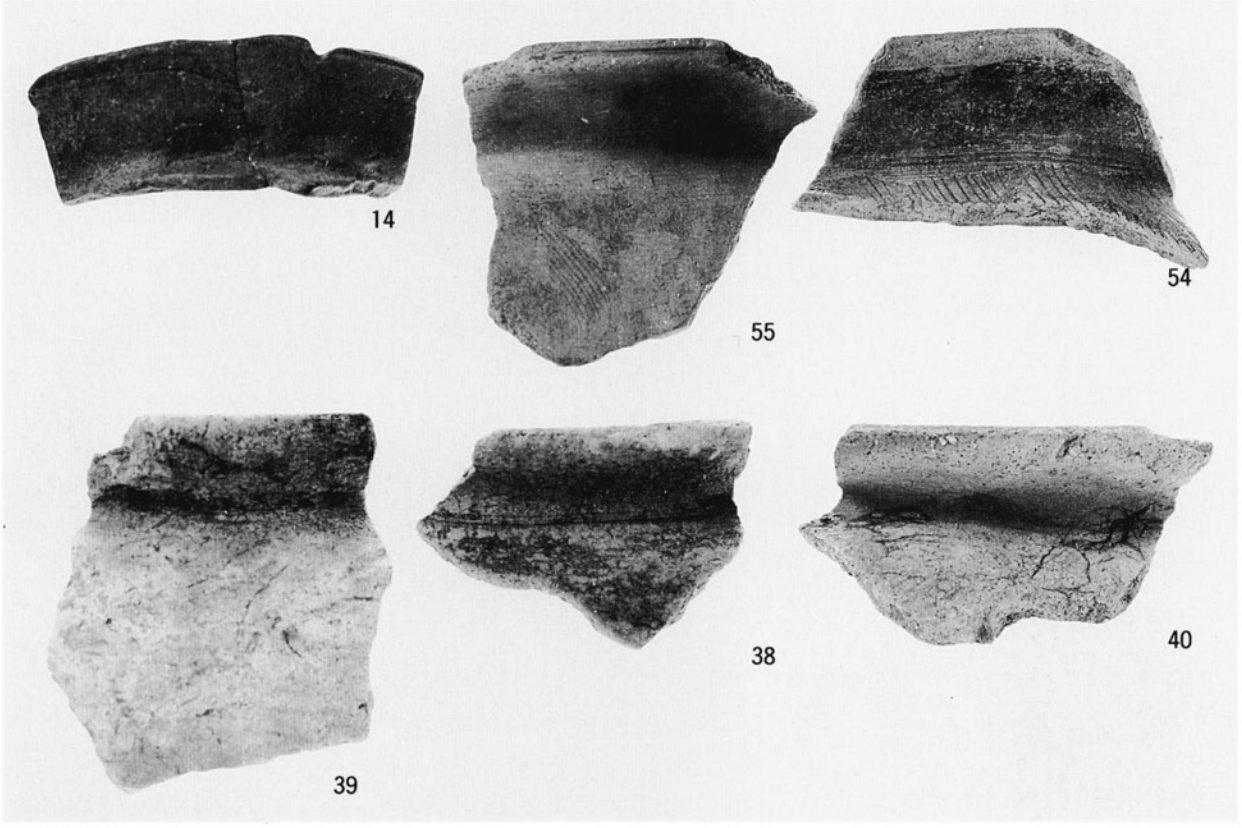
69

73

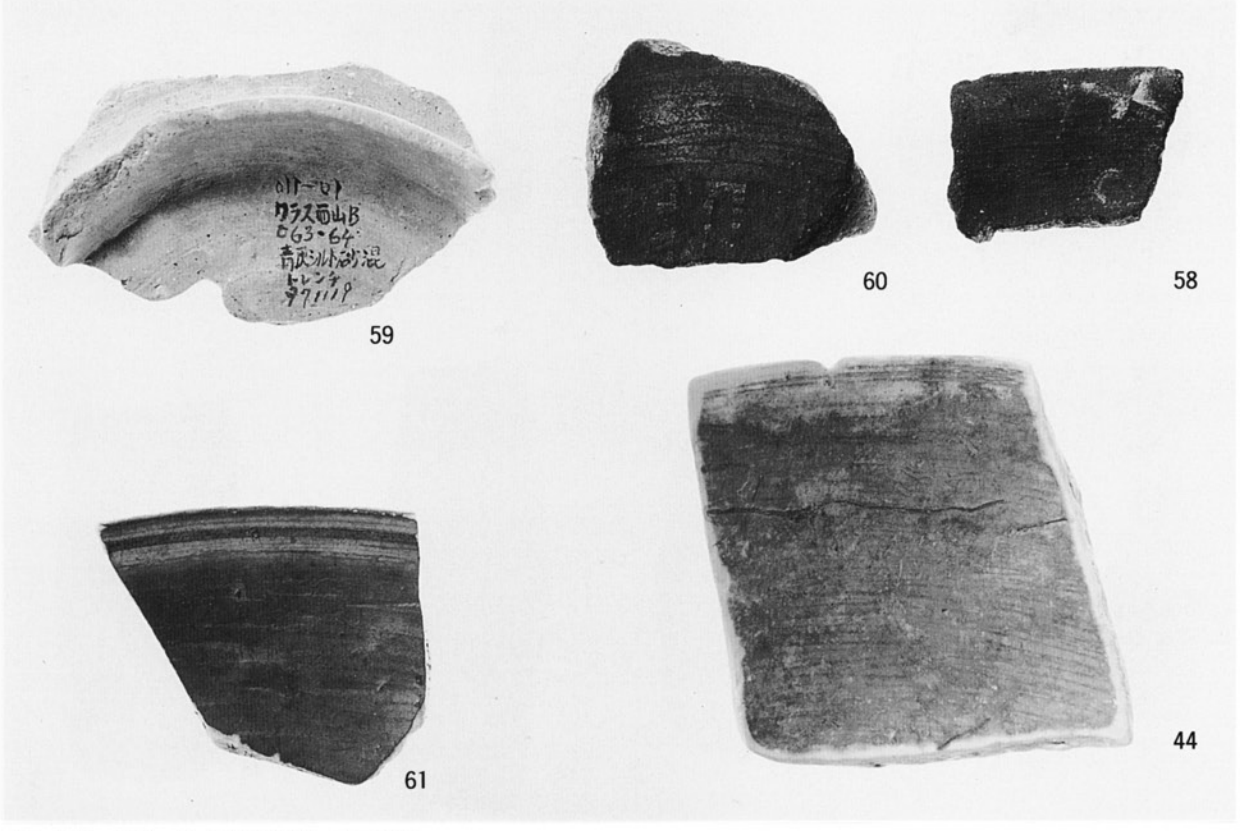
83

91

出土遺物（1）　※写真の番号は遺物実測図と対応。

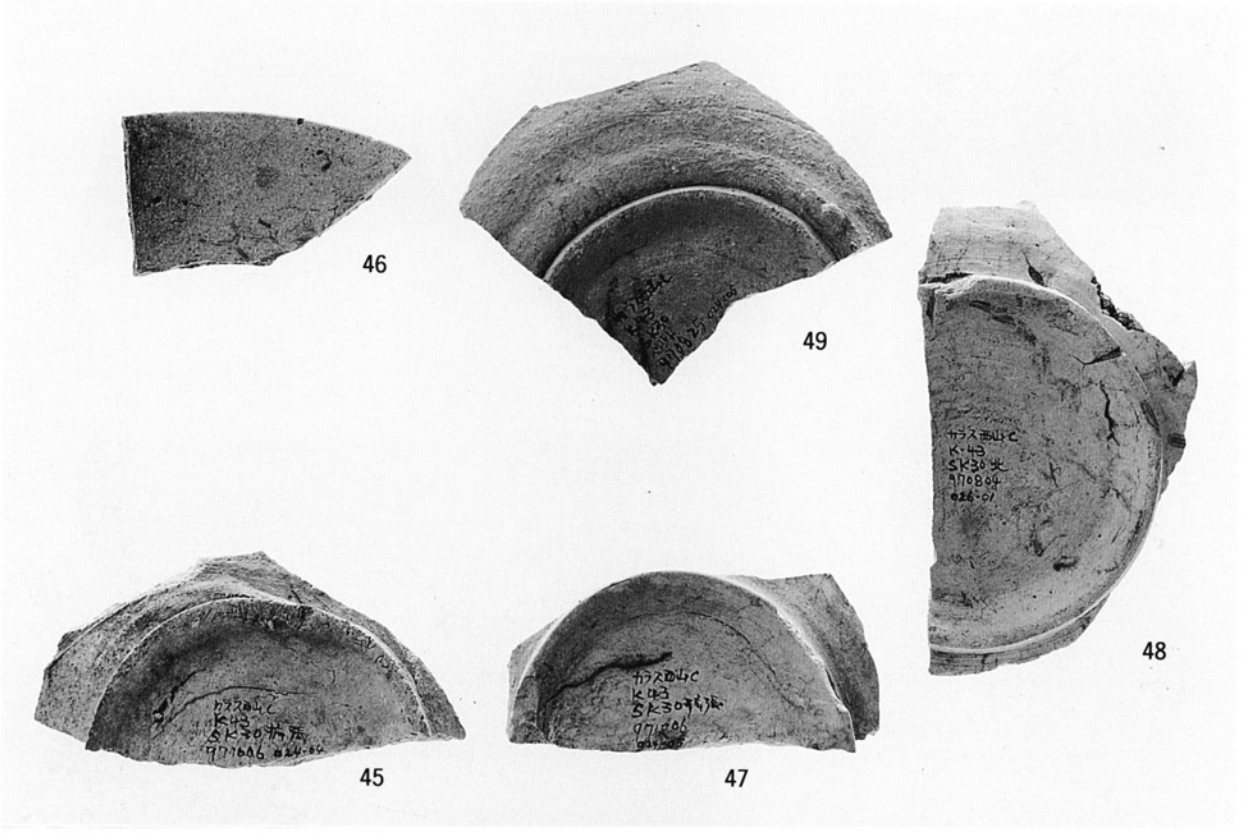


出土遺物（2）土師器甕

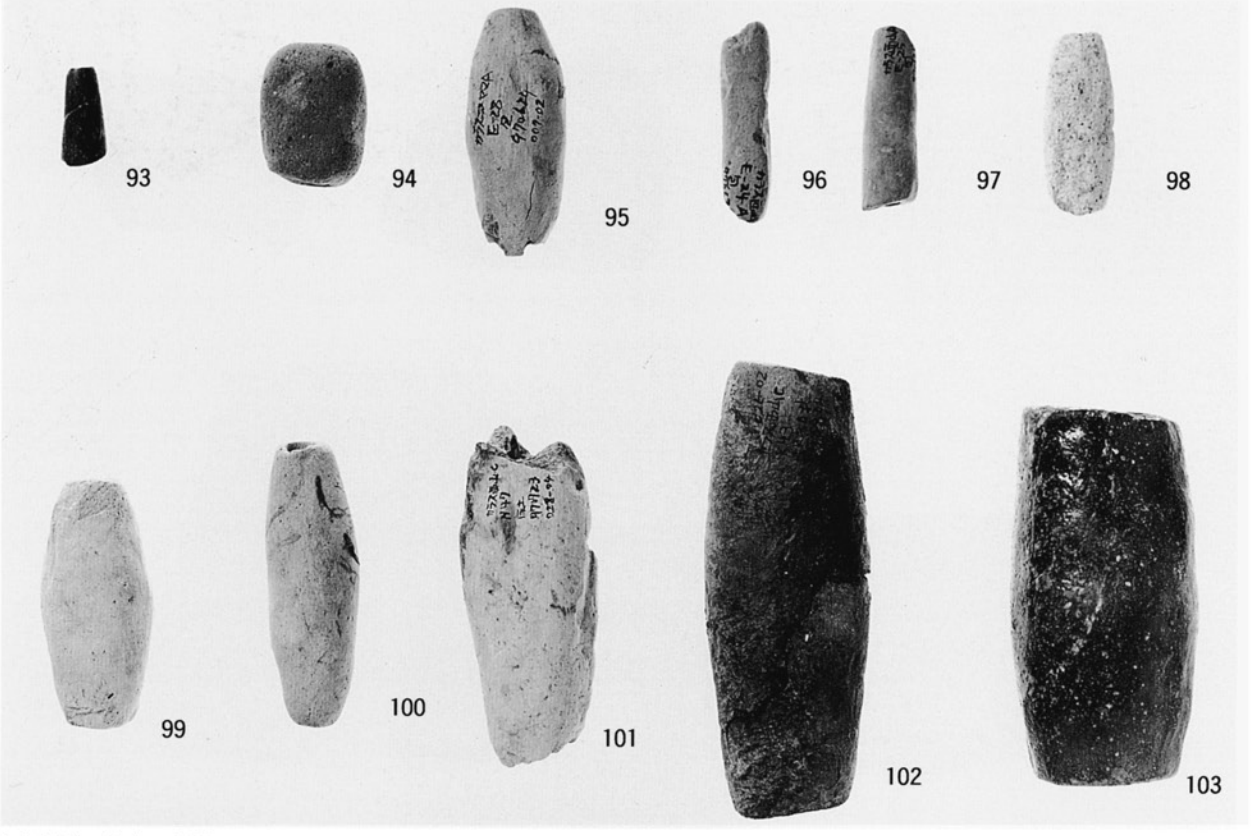


出土遺物（3）黒色土器椀及び瓦器椀

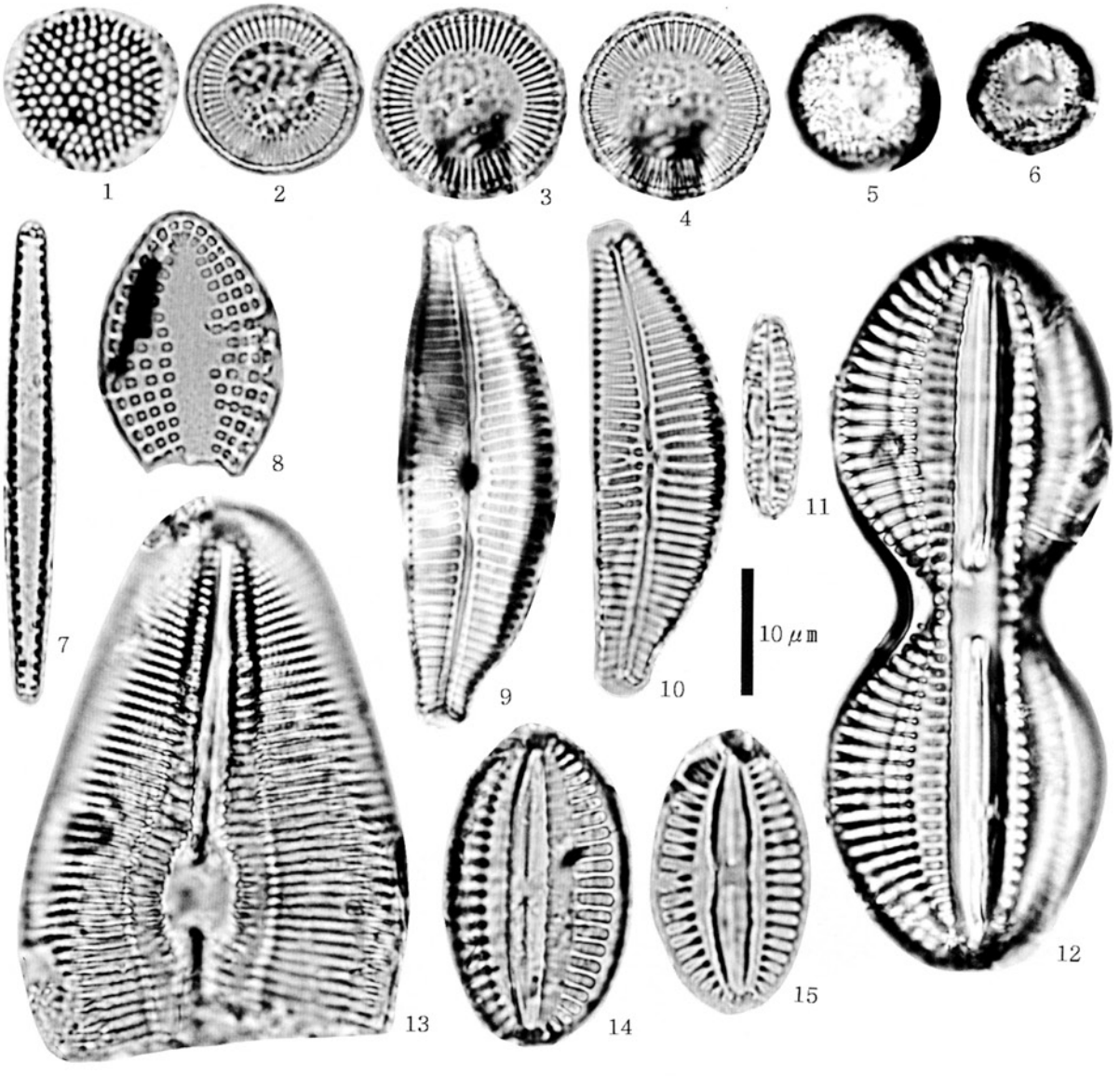
写真図版10



出土遺物（4）ＳＫ30出土山茶椀

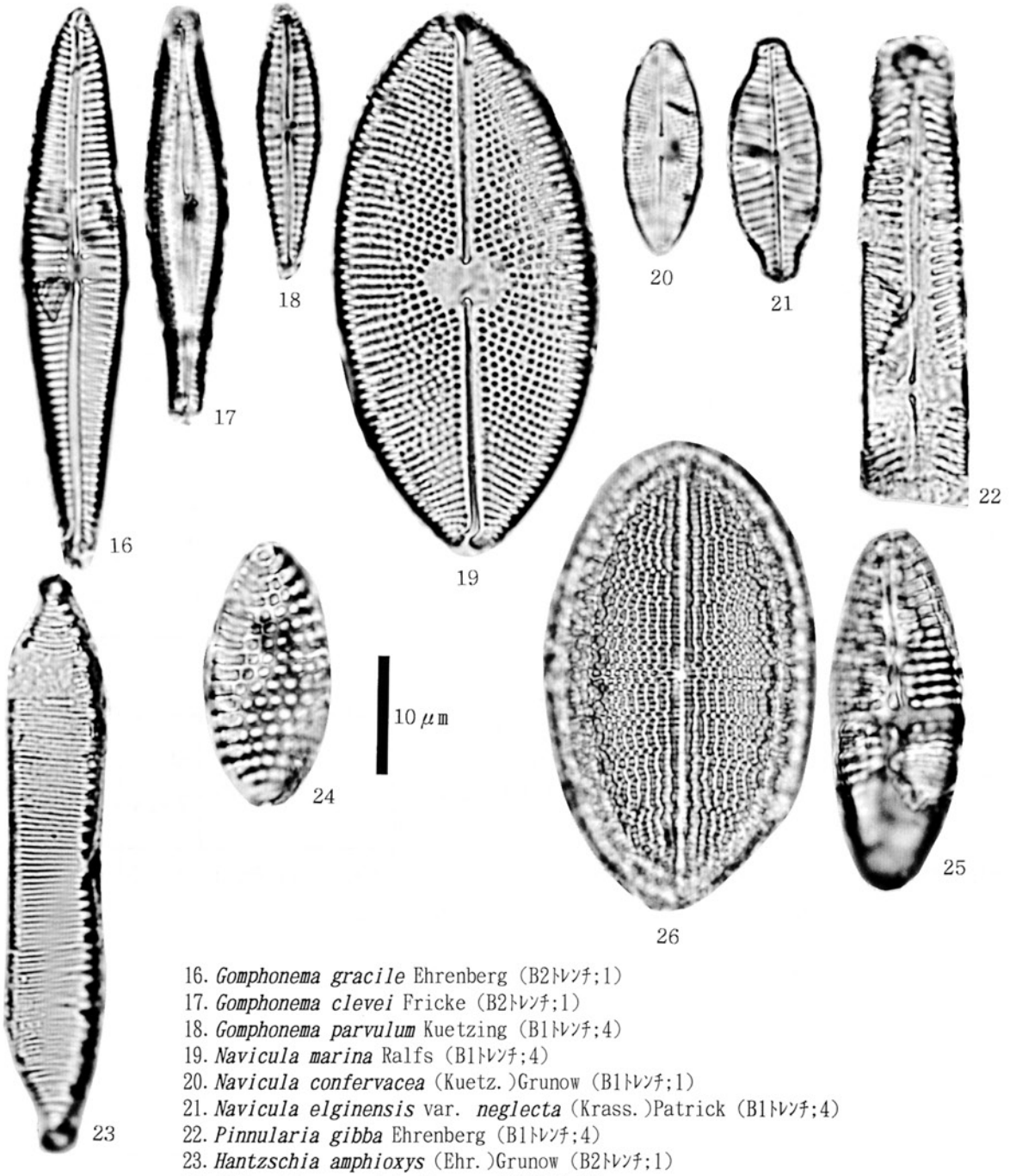


出土遺物（5）土錘



1. *Thalassiosira oestrupii* (Osten.)Proskina-Lavrenko (B1トレンチ;4)
2. *Cyclotella striata* (Kuetz.)Grunow (B1トレンチ;4)
3. *Cyclotella striata* (Kuetz.)Grunow (B1トレンチ;3)
4. *Cyclotella striata* (Kuetz.)Grunow (B1トレンチ;3)
5. *Pseudopodosira kosugii* Tanimura et Sato (B1トレンチ;3)
6. *Pseudopodosira kosugii* Tanimura et Sato (B1トレンチ;4)
7. *Thalassionema nitzschioides* (Grun.)Grunow (B2トレンチ;3)
8. *Rhaphoneis surirella* (Ehr.)Grunow (B1トレンチ;3)
9. *Cymbella turgidula* var. *nipponica* Skvortzow (B2トレンチ;1)
10. *Cymbella turgidula* var. *nipponica* Skvortzow (B1トレンチ;1)
11. *Cymbella sinuata* Gregory (B1トレンチ;1)
12. *Diploneis interrupta* (Kuetz.)Cleve (B1トレンチ;4)
13. *Diploneis smithii* var. *rhombica* Mereschkowsky (B1トレンチ;4)
14. *Diploneis suborbicularis* (Greg.)Cleve (B1トレンチ;4)
15. *Diploneis suborbicularis* (Greg.)Cleve (B1トレンチ;4)

写真図版12



16. *Gomphonema gracile* Ehrenberg (B2ﾄﾚﾝﾁ;1)
17. *Gomphonema clevei* Fricke (B2ﾄﾚﾝﾁ;1)
18. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (B1ﾄﾚﾝﾁ;4)
19. *Navicula marina* Ralfs (B1ﾄﾚﾝﾁ;4)
20. *Navicula confervacea* (Kuetz.)Grunow (B1ﾄﾚﾝﾁ;1)
21. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.)Patrick (B1ﾄﾚﾝﾁ;4)
22. *Pinnularia gibba* Ehrenberg (B1ﾄﾚﾝﾁ;4)
23. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow (B2ﾄﾚﾝﾁ;1)
24. *Nitzschia granulata* Grunow (B1ﾄﾚﾝﾁ;2)
25. *Achnanthes crenulata* Grunow (B2ﾄﾚﾝﾁ;3)
26. *Cocconeis placentula* (Ehr.)Cleve (B2ﾄﾚﾝﾁ;1)

報　告　書　抄　録

ふりがな	からすにしやまいせきはっくつちょうさほうこく
書名	香良洲西山遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１８７
編著者名	齋藤直樹　青木哲哉
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒５１５－０３２５　三重県多気郡明和町竹川５０３番地　℡ 0596－52－1732
発行年月日	西暦　１９９９年　３月　２６日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
香良洲西山遺跡 （からすにしやまいせき）	三重県一志郡香良洲町 （みえけんいちしぐんからすちょう） 字西ノ宮他 （あざにしのみやほか）	24402	2	34° 38′ 46″	136° 31′ 58″	19970522 ～ 19971219	2,745	雲出川改修香良洲地区事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
香良洲西山遺跡	集落跡	弥生時代～室町時代	溝・土坑・井戸	弥生土器・山茶椀・土師器・陶器	

平成 11(1999) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 9 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　１８７

雲出川改修香良洲地区事業に伴う

香良洲西山遺跡発掘調査報告

一　志　郡　香　良　洲　町

１９９９．３

編集・発行　　三重県埋蔵文化財センター

印　　刷　　オリエンタル印刷株式会社